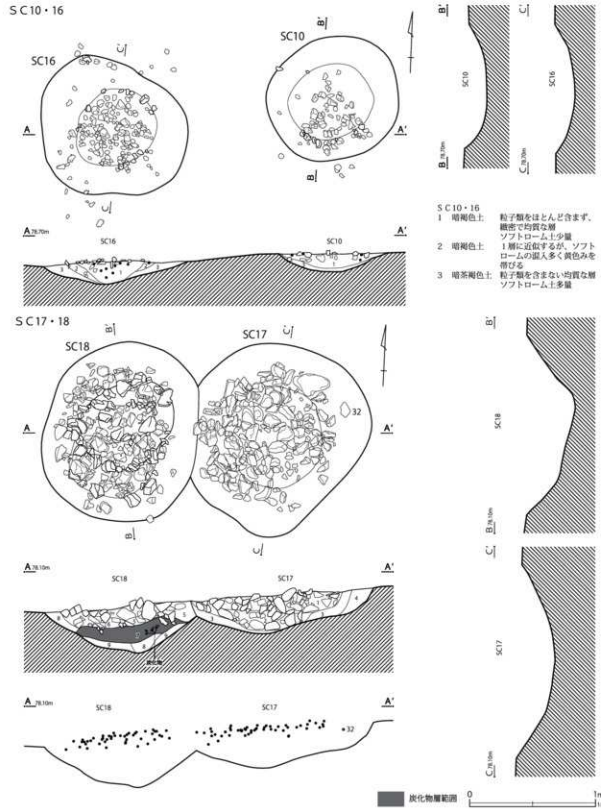
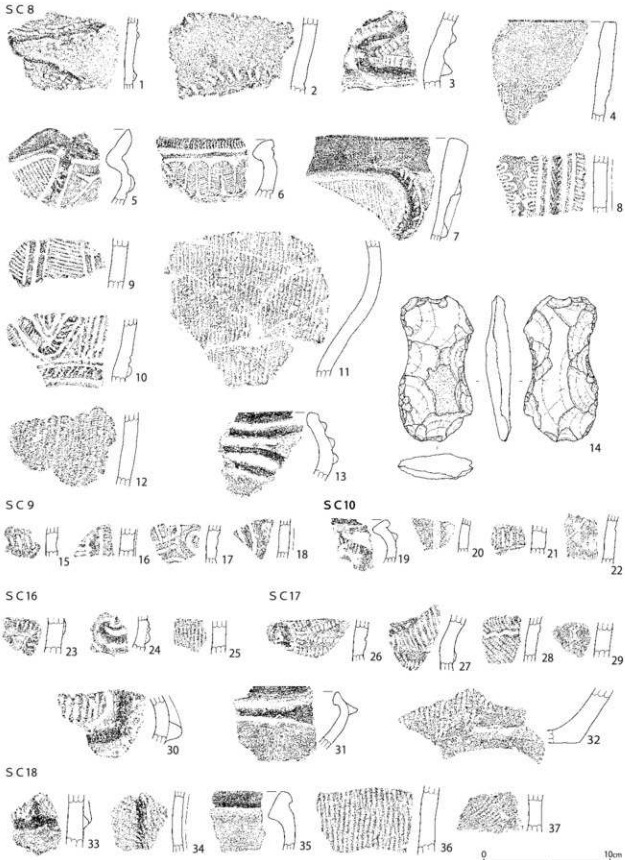


第571図 Ⅱ区集石土壙（4）



第572図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（3）

や南側に集中しており、覆土の上層に集中している。壙中で火を焚いた痕跡は認められなかった。

集石の礫は、礫総個数175点、礫総重量11.5kgであり、チャート系礫の占める比率は89％である（第587図２）。

時期は勝坂式の新段階期と推定される。

遺物は第572図19～22が出土した。19は口縁部に刻みのある隆帯で渦巻文を施文し、21は爪形文を施文している勝坂式土器である。20は磨消懸垂文を有し、22は条線地文上に弧線文を描くもので、加曽利ＥⅢ式に比定されよう。

第16号集石土壙（第571図、第572図23～25、第587図３）

Ｒ・Ｓ－10・11区に位置する。第10号集石土壙が隣接する。平面形は不整形で、規模は長径1.25m、短径0.06m、深さ0.16mである。断面形は緩い弧状を呈し、壙底は丸く窪む。礫は中央部付近に集中して含まれており、壙中で火を焚いているような痕跡は認められなかった。

集石の礫は、礫総個数441点、礫総重量17.7kgであり、チャート系礫の占める比率は91％である（第587図３）。非常に小さい礫が多く、被熱で破砕されているものと思われる。

時期は勝坂式の新段階期と思われる。

遺物は第572図23～25が出土した。23は刻み隆帯で区画を行い、24は２本隆帯で渦巻文を描いている。25は非常に細かいが０段多条ＲＬの縄走縄文を施文する。勝坂式の新しい段階に比定されよう。

第17号集石土壙（第571図、第572図26～32、第587図４）

Ｐ－９・10区に位置する。第18号集石土壙、第37号集石土壙と重複するが、両遺構とも本遺構より古い。平面形は不整円形で、規模は長径1.53m、短径1.40m、深さ0.30mである。断面形は弧状を呈し、底面は円形でやや波を打ち、中央部が浅い擂鉢状を呈する。礫は中央部に円形状に集中し、壙底まで詰まっている。若干の炭化物は認められるが、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数1,958点、礫総重量189.1kgであり、チャート系礫の占める比率は95％である（第587図４）。重量の重いものには全礫が含まれるが、全体的に小さく割れた礫が多く含まれる。

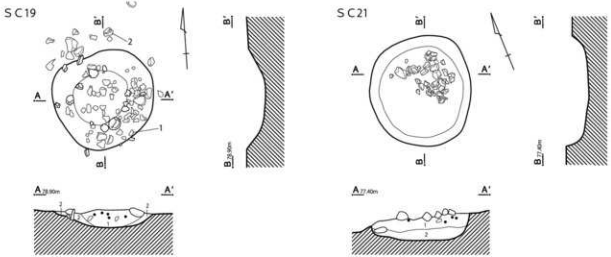
時期は、出土遺物からは第18号集石より古い土器群も含まれているが、切り合い関係では新しいことから、混入の遺物と解釈し、第18号住居跡とほぼ同時期か若干新しい時期である勝坂式新段階期と推定される。

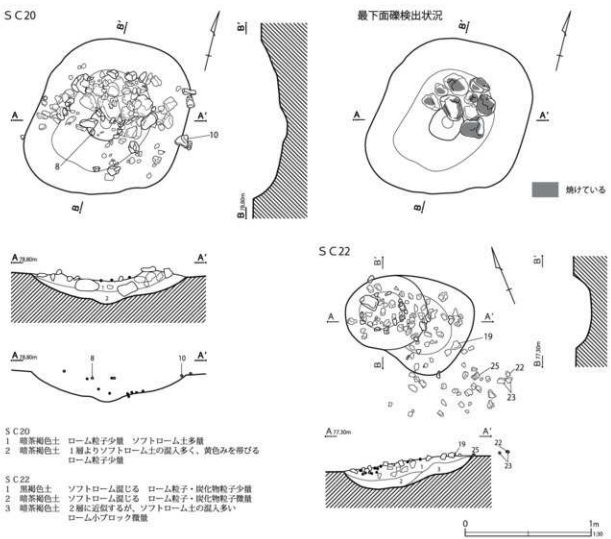
遺物は第572図26～32が出土した。26～29は新道式から藤内式にかけての土器群で、キャタピラ文や三角押文、爪形文を施文する。30～32は勝坂式新段階の土器群で、30は隆帯の楕円区画に沈線を沿わせている。31は口縁部に隆帯を巡らせ、32は０段多条ＲＬの縄走縄文を施文する。

第18号集石土壙（第571図、第572図33～37、第587図５）

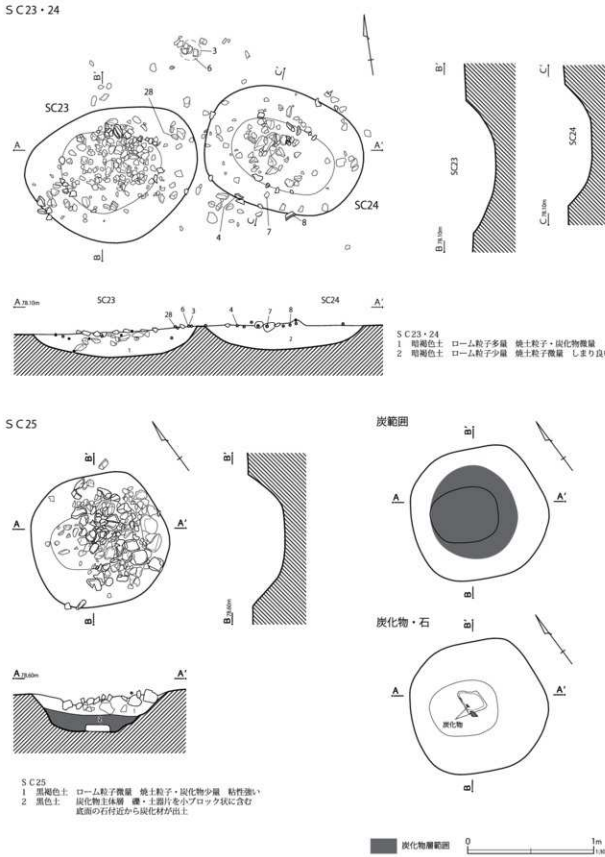
Ｐ－９区に位置する。第17号集石と重複するが、本遺構の方が古い。平面形は楕円形で、規模は長径1.42m、短径1.21m、深さ0.36mである。断面形は浅い擂鉢状を呈し、壙底は少し段状に波打つ。底面よりやや浮いた覆土第７層が炭化物を主体にした層で、大形の炭化物が出土しており、樹種と年代測定を行った。明らかに礫の下側に炭化物層があることから、礫の過熱か調理のためかは不明であるが、火を焚いていたことは明らかである。

集石の礫は、礫総個数1,855点、礫総重量134.0kgであり、チャート系礫の占める比率は95％である（第587図５）。礫は全礫がごく少量で、ほとんどが破砕礫であり、しかも細かく割れた軽量





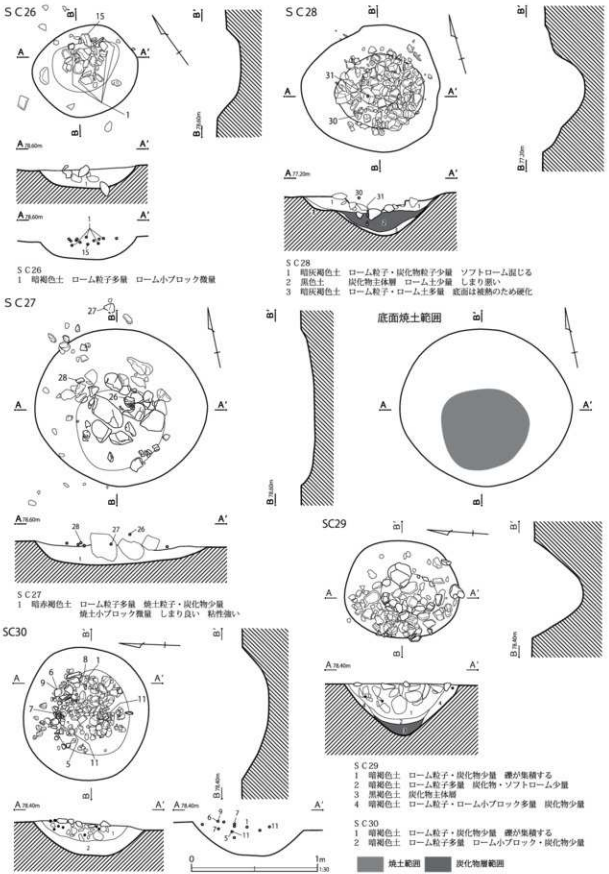
第573図　Ⅱ区集石土壙（5）



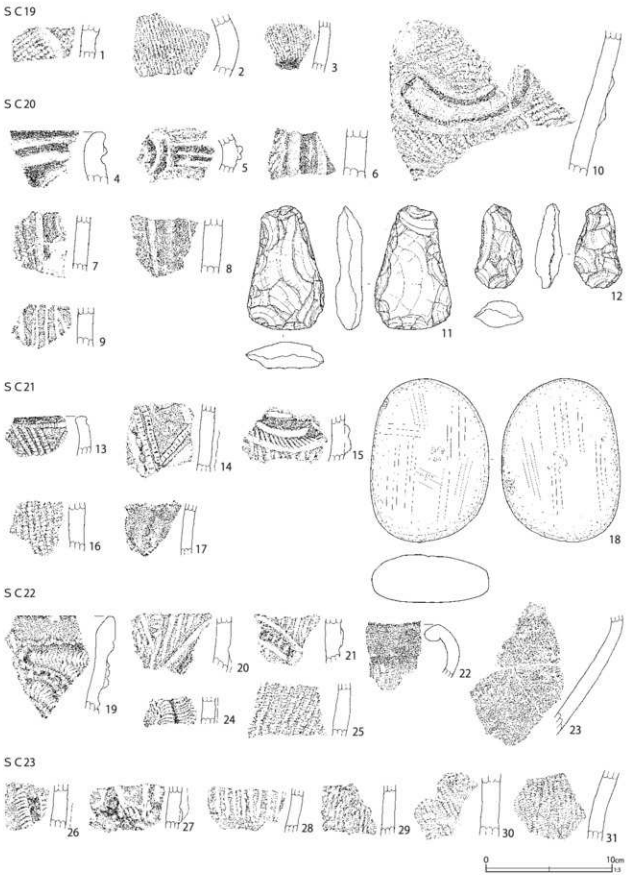
SC23・24
1　暗褐色土　ローム粒子多量　焼土粒子・炭化物微量
2　暗褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子微量　しまり良い

SC25
1　黒褐色土　ローム粒子微量　焼土粒子・炭化物少量　粘性強い
2　黒色土　炭化物主体層　礫・土器片を小ブロック状に含む
　　底面の石付近から炭化材が出土

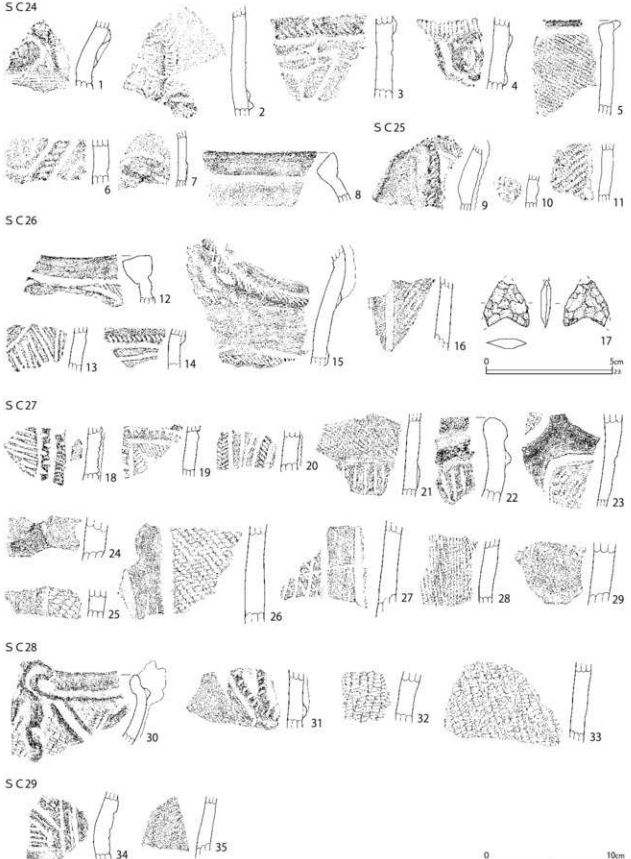
第574図　Ⅱ区集石土壙（6）



第575図 Ⅱ区集石土壙（7）



第576図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（4）



第577図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（5）

な礫が大半を占めていた。

時期は、勝坂式中～新段階の藤内式期の新しい段階と推定される。

遺物は第572図33～37が出土した。33は隆帯区画に沿って爪形文を施文しており、藤内式と思われる。34は垂下隆帯の上にも縄文単節ＲＬを施文している阿玉台Ⅲ式に比定されよう。35は口唇部内端に稜を有する。36は０段多条ＲＬの縦走縄文、37は単節ＬＲ縄文の横位施文である。

第19号集石土壙（第573図、第576図１～３、第587図６）

Ｑ－13区に位置する。平面形は不整円形で、規模は長径0.85m、短径0.80m、深さ0.14mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。礫は中央部にコンパクトに納まり、壙底まで詰まっている。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数197点、礫総重量18.4kgであり、チャート系礫の占める比率は94％である（第587図６）。大きい礫の割合が、若干増えているが、大半は小礫である。

時期は加曽利Ｅ式期である。ＥⅠ式後半期であろうか、細かな時期推定は難しい。

遺物は第576図１～３が出土した。１は単節ＲＬ地文上に沈線を施文している。地文は複節ＲＬＲの可能性もあり、であるとすれば加曽利ＥⅢ愛器の可能性もある。２、３は細かな撚糸文Ｌを施文する加曽利ＥⅠ式であろう。

第20号集石土壙（第573図、第576図４～12、第587図７）

Ｑ－13区に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長径1.42m、短径1.21m、深さ0.24mである。断面形は緩い弧状を呈し、壙底は中央部に小さな窪みを有する。中央部やや北側に集石の中央部があり、壙底に大きな焼け礫を９個並べ、その上部に礫を積み上げたような状態で出土した。礫は焼けているものの、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数350点、礫総重量65.3kgであり、チャート系礫の占める比率は93％である（第587図７）。大きな礫に、全礫が多く含まれている。

時期は、加曽利ＥⅢ式期と思われる。

遺物は第576図４～12が出土した。４～９は加曽利Ｅ式キャリパー形深鉢で、４、５は口縁部、６～９は胴部破片である。４は口縁部を隆帯で区画し、隆帯の渦巻文と区画文を口縁部に施文する加曽利ＥⅡ式かⅢ式、５は地文に撚糸文Ｌを施文し、２本隆帯で渦巻文を繋ぐ加曽利ＥⅠ式、６から９は磨消懸垂文を有する加曽利ＥⅢ式、10は２本の隆起線で渦巻文を施文し、単節ＲＬ縄文を充填施文する加曽利ＥⅢ式土器である。

11、12は打製石斧である。ともに撥形を呈し、刃部は両刃である。

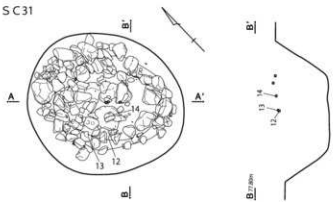
第21号集石土壙（第573図、第576図13～18、第587図８）

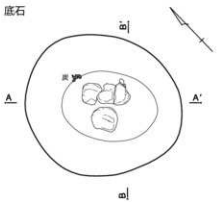
Ｎ－９区に位置する。第27号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。また、第28号集石土壙とも重複するが、新旧関係は不明である。平面形はほぼ円形で、規模は長径0.86m、短径0.80m、深さ0.20mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。遺構の北側の表層に礫が集中しており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

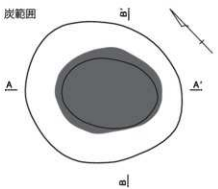
集石の礫は、礫総個数143点、礫総重量6.9kgであり、チャート系礫の占める比率は89％である（第587図８）。破砕された小さな礫が大半を占めていた。

時期は勝坂式の古段階期と思われるが、終末段階期の可能性もある。

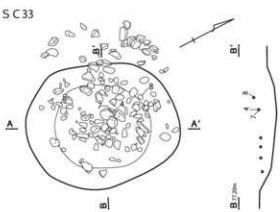
遺物は第576図13～18が出土した。13、14は複列の角押文を施文するもので、13は口縁部の文様帯内に、14は胴部の区画隆帯脇に施文する。

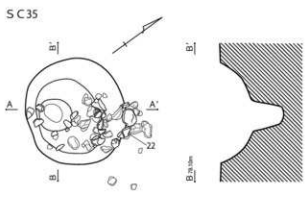






SC31
1　暗褐色土　ローム粒子微量　焼土粒子少量　炭化物微量
2　黒色土　炭化物主体層　ローム粒子多量　焼土粒子少量　炭化物多量　粘性強い
　　大きⅡの炭化物（径５mm前後）を中央部に多く含む
3　褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量　ソフトロームを多量





SC33
1　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック少量焼土粒子・炭化物微量
　　粘性強い

SC35
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量
2　暗黄褐色土　ローム粒子多量　ロームブロック少量　しまり良く粘性強い
3　黄褐色土　ロームブロック多量　しまり非常に良い　粘性非常に強い

炭化物層範囲　0　1m　1:30

第578図　Ⅱ区集石土壙（８）

狢沢式か新道式に比定されよう。15は背割隆帯でモチーフを描く土器で、勝坂式終末期と思われる。16は単節縄文ＲＬを縦走縄文状に施文する。17は無文土器で、鍵状類似の整形痕が残る。

18は磨石である。周縁に整形が施されており、正面及び裏面は著しく摩耗している。

第22号集石土壙（第573図、第576図19～25、第588図１）

Ｏ－９区に位置する。第27号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は不整形で、規模は長径1.00m、短径0.75m、深さ0.20mである。断面形は皿状を呈し、壙底は２段掘り状に波打つ。形状的には２基の土壙が重複しているような形を呈する。遺構のプランから外れて礫が散布しており、表層の礫が散在したものと思われる。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数326点、礫総重量12.9kgであり、チャート系礫の占める比率は92%である（第588図１）。ほとんどの礫が小礫か細片である。

時期は、勝坂式の新段階であろうか。古段階の可能性もあると思われる。

遺物は第576図19～23が出土した。いずれも勝坂式土器である。19は太い三角押文と、細い三角押文でモチーフを描く新道式であろう。24は爪形文に波状沈線が沿う藤内式であろう。20、21は刻み隆帯と沈線でモチーフを描く井戸尻式相当の土器群である。22は内湾の強い無文の口縁部、23は浅鉢の胴部、25は０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する胴部破片である。

第23号集石土壙（第574図、第576図26～31、第588図２）

Ｏ－10区に位置する。第24号集石土壙の西側に隣接する。平面形は楕円形で、規模は長径1.39m、短径1.08m、深さ0.20mである。断面は皿状を呈し、壙底は緩やかに窪んでいる。礫は中央部表層に集中しており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数561点、礫総重量26.6kgであり、チャート系礫の占める比率は92%である（第588図２）。小さな礫が大半を占めている。

時期は、勝坂式の新段階期と思われる。

遺物は第576図26～31が出土した。26は隆帯脇にキャタピラ文を施文する藤内式と思われる。27は連鎖状隆帯で縦位区画を行う深鉢で、隆帯上に刻みも施す。28は地文に平行沈線を施文し、29は撚糸文Ｌ、30は単節ＲＬ縄文の横位施文、31は０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。大半は勝坂式新段階期でもやや古い段階の可能性がある。

第24号集石土壙（第574図、第577図１～８、第588図３）

Ｏ－10区に位置する。第23号集石土壙の東側に隣接する。平面形は隅丸方形で、規模は長径1.23m、短径0.94m、深さ0.20mである。断面形は緩い皿状を呈し、壙底は平坦である。礫は遺構の中央部表層を中心として出土しており、プランの外側にも散在している。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数316点、礫総重量13.8kgであり、チャート系礫の占める比率は89%である（第588図３）。礫の大半は破砕された小さい礫である。

時期は勝坂式中～新段階期であろう。

遺物は第577図１～８が出土した。１、２、４は隆帯脇に爪形文を施文し、５は口唇部が突出し、０段多条ＲＬ縄文を横走施文する。以上は藤内式に比定されよう。３と６は同一個体で、刻み隆帯の区画内に三叉文を施文する。７は低平隆帯を施文しており、８は無文浅鉢の口縁部である。以上は勝坂式新段階に比定されよう。

第25号集石土壙（第574図、第577図９～11、第588図４）

Ｐ－12区に位置する。第38号土壙と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形はほぼ円形で、規模は長径1.09m、短径1.04m、深さ0.31mである。断面形はボウル状を呈し、壙底は緩く窪む。集石の下部の壙底に、炭化物を主体とする黒色土層が堆積しており、明らかに火を焚いた痕跡が認められた。底部周辺の壁が、炭で黒色化していた。壙底の中央部に扁平で大きな礫を１個配置し、その上で火を焚き、その炭層の上に礫が載る状態であった。

集石の礫は、礫総個数1,052点、礫総重量70.0kgであり、チャート系礫の占める比率は96％である（第588図４）。大形の全礫も少数含まれるが、大半は破砕された小さな礫で構成されている。

時期は、勝坂式新段階期と思われる。

遺物は第577図９～11が出土した。９は耳状把手で、背面に刻みを施した隆帯を垂下している。10は角押文を施文し、11は単節ＲＬ縄文の縦位施文である。沈線の痕跡が見え、加曽利Ｅ式になる可能性もある。

第26号集石土壙（第575図、第568図１、第577図12～17、第588図５）

Ｐ－12区に位置する。第38号土壙と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は円形で、規模は長径0.84m、短径0.71m、深さ0.15mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。礫はコンパクトに集中しており、壙底まで詰まっていた。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数99点、礫総重量15.6kgであり、チャート系礫の占める比率は82％である（第588図５）。大形礫には全礫が多く含まれ、中形礫にも全礫の含まれる割合が多くなる。

時期は、勝坂式の新段階期であろう。

遺物は第568図１、第577図12～17が出土した。１は眼鏡状把手を有する深鉢の口縁部である。12～15は刻み隆帯で区画やモチーフを描き、隆帯脇に沈線を沿わせる土器群である。勝坂式新段階に比定されよう。16は磨消懸垂文を有する加曽利ＥⅢ式土器である。

17は石鏃で、先端及び正面左脚部が欠けている。

第27号集石土壙（第575図、第577図18～29、第588図６）

Ｐ－12区に位置する。第39号住居跡、第70号住居跡の炉と重複するが、いずれも本遺構の方が新しい。平面形はほぼ円形で、規模は長径1.36m、短径1.24m、深さ0.15mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。大形礫を中央部に集めて、周囲に小さい礫が散在する状態である。壙底に被熱で焼土化した範囲が丸く認められたが、覆土中には炭化物等は含まれていない。積極的に壙中で火を焚いた痕跡は認められなかったが、当初壙底で火を焚き、炭化材などを片付けるか、あるいは燃え尽きて灰になった後に、礫を廃棄したのであろうか。

集石の礫は、礫総個数79点、礫総重量34.0kgであり、チャート系礫の占める比率は56％である（第588図６）。大形、中形の礫が多く、その中に全礫も一定の割合で含まれている。

時期は、加曽利ＥⅢ式期と思われる。

遺物は第577図18～29が出土した。18～21は刻み隆帯で区画やモチーフを描く勝坂式新段階の土器群である。18、19は隆帯に交互刺突文を、20は「ハ」字状刻みを施している。21は低平な隆帯に沈線状の刻みを施し、地文に単節ＲＬ縄文を横位施文する。22～27は加曽利ＥⅢ式土器で、22は口縁部区画に沈線文を施文し、23～26は磨消懸垂文を有し、地文に単節ＲＬ縄文を縦位施文する。27は地文に格子目沈線文を施文する。28

は撚糸文Lを施文し、29は無文である。

第28号集石土壙（第575図、第577図30～33、第588図7）

N・O－9区に位置する。第27号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しく、第21号集石土壙と重複するが新旧関係は不明である。平面形は不整円形で、規模は長径1.08m、短径1.00m、深さ0.32mである。断面形はボウル状を呈し、壙底は丸く窪む。覆土下層に炭化物主体の黒色土が堆積しており、炭化物層の上層に礫が密集していた。礫を焼くためか、調理のためなのか明らかにし得ないが、壙中で火を焚いていたのは明らかである。

集石の礫は、礫総個数563点、礫総重量45.8kgであり、チャート系礫の占める比率は82％である（第588図7）。大形の礫には全礫が含まれるが、主体となるのは小さく破砕された礫である。

時期は勝坂式終末～ＥＩ式期と思われる。

遺物は第577図30～33が出土した。30は内湾する口縁部が開く深鉢で、幅広の口唇部に渦巻文を巻き上げ、交互押圧を加えた隆帯を垂下する。地文は0段多条ＲＬ縄文を縦位施文する。31は刻み隆帯でモチーフを描き、隆帯脇に沈線を沿わす。32、33は0段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。いずれも勝坂式終末段階の様相を示している。

第29号集石土壙（第575図、第577図34、35、第588図8）

Ｐ－12区に位置する。平面形は不整円形で、規模は長径0.91m、短径0.77m、深さ0.39mである。断面形は擂鉢状を呈し、壙底は小さく丸く窪む。覆土最下層に、炭化物を多量に含む黒色土が堆積しており、壙中で火を焚いたことは明らかである。黒色土より上層に礫がまとまって納まっていた。

集石の礫は、礫総個数453点、礫総重量67.0kgであり、チャート系礫の占める比率は94％である（第588図8）。大形礫の約3分の1は全礫であり、中形の礫にも若干全礫がある。しかし、大半は破砕した小さな礫である。

時期は出土遺物が少なく決めかねるが、勝坂式新段階期と思われる。

遺物は第577図34、35が出土した。34は半截竹管状工具の平行沈線で区画等を行い、区画内に集合沈線を施文する。35は単節ＲＬ縄文を縦位施文する。新段階の中でもやや古い段階に位置付けられようか。

第30号集石土壙（第575図、第580図1～11、第589図1）

Ｏ－12区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.05m、短径0.99m、深さ0.24mである。断面形はボウル状を呈し、壙底は緩やかに窪む。礫は上層の中央部に良くまとまっており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数352点、礫総重量17.9kgであり、チャート系礫の占める比率は83％である（第589図1）。大形の礫には若干の全礫が含まれるが、礫の大半は破砕された小さな礫である。

時期は、勝坂式中～新段階の新しい段階に位置付けられようか。

遺物は第580図1～11が出土した。1は口縁部区画に爪形文と波状沈線を施文する阿玉台式系土器で、雲母を少量含む。2は隆帯脇に平行結節沈線、3、4は幅広の爪形文を施文する勝坂式中段階の藤内式あたりであろう。5～9は半截竹管状工具の平行沈線で施文する土器群である。6～8は同一個体で、隆帯脇や区画内に並行沈線を施文する。9、10は爪形文と波状沈線文を施文するものである。いずれも藤内式の新しい段階に位置付けられるものと思われる。11は浅鉢の底部で、網代痕が残る。

第31号集石土壙（第578図、第580図12～17、第589図２）

Ｍ・Ｎ－11区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.26m、短径1.12m、深さ0.36mである。断面形は深い皿状を呈し、壙底は平坦である。覆土下層に炭化物を多量に含んだ黒色土が堆積しており、壙中で火を焚いたことは明らかである。壙底には４個の大きな礫を並べ、その上で火を焚いたものと思われ、黒色土の上層を中心として多量の礫が納まっていた。また、壙底は炭化物で黒色化していた。

集石の礫は、礫総個数701点、礫総重量164.4kgであり、チャート系礫の占める比率は88％である（第589図２）。大形の礫には全礫が３割程、半割も３割程度含まれており、破砕による小礫化が進んでいないようである。

時期は勝坂式中～新段階と思われる。

遺物は第580図12～17が出土した。12～14は半截竹管状工具の平行沈線で区画を施し、爪形文を沿わせるもので、藤内式の新しい段階に比定されよう。15は０段多条ＬＲ縄文を縦位施文する。

16は短冊形を呈する打製石斧の基部片である。17は乳棒状の磨製石斧が欠損した後、基部の端部及び正面左側縁を作業面として再利用した敲石である。

第33号集石土壙（第578図、第582図１～９、第589図３）

Ｌ・Ｍ－９区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.23m、短径0.99m、深さ0.14mである。断面形は皿状を呈し、壙底は少し波打っている。礫は覆土上層に集中し、プランからはみ出した位置にも散在していた。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数317点、礫総重量35.6kgであり、チャート系礫の占める比率は87％である（第589図３）。大形、中形礫の中に、一定の割合で全礫が存在している。

時期は加曽利ＥⅢ式期と思われる。

遺物は第582図１～９が出土した。１、５はキャタピラ文を施文して波状沈線を沿わせる。２は平行沈線の区画文に沈線の波状文を沿わせ、３、４は平行結節沈線でモチーフを施文する。およそ藤内式に比定されよう。６～９は胴部で括れ口縁部が内湾して開く加曽利ＥⅢ式土器で、胴部に隆帯の渦巻文を繋げるモチーフを施文し、単節ＲＬ縄文を充填施文する。

第34号集石土壙（第579図、第589図４）

Ｍ・Ｎ－10区に位置する。平面形は不整円形で、規模は長径1.17m、短径1.06m、深さ0.37mである。断面形は擂鉢形を呈し、壙底は丸く窪む。覆土全体が炭化物を含む黒色土であり、壙中で火を焚いたことは明らかである。礫は表層から壙底まで詰まっていた。

集石の礫は、礫総個数173点、礫総重量54.1kgであり、チャート系礫の占める比率は99％である（第589図４）。大形礫の半数以上が全礫か半割礫であり、破砕による小礫化も進んでいる。

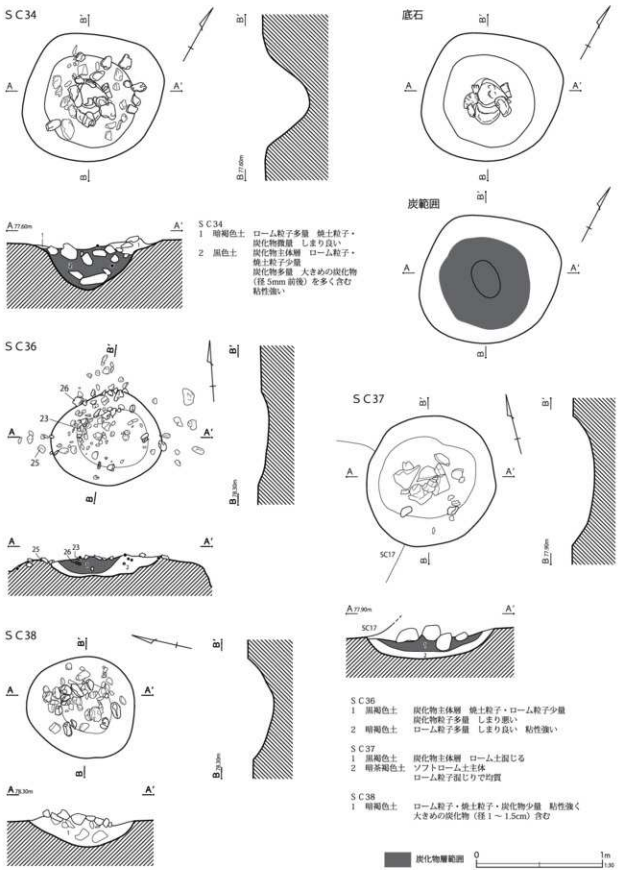
遺物の出土がなく、時期不明である。

第35号集石土壙（第578図、第580図18～22、第589図５）

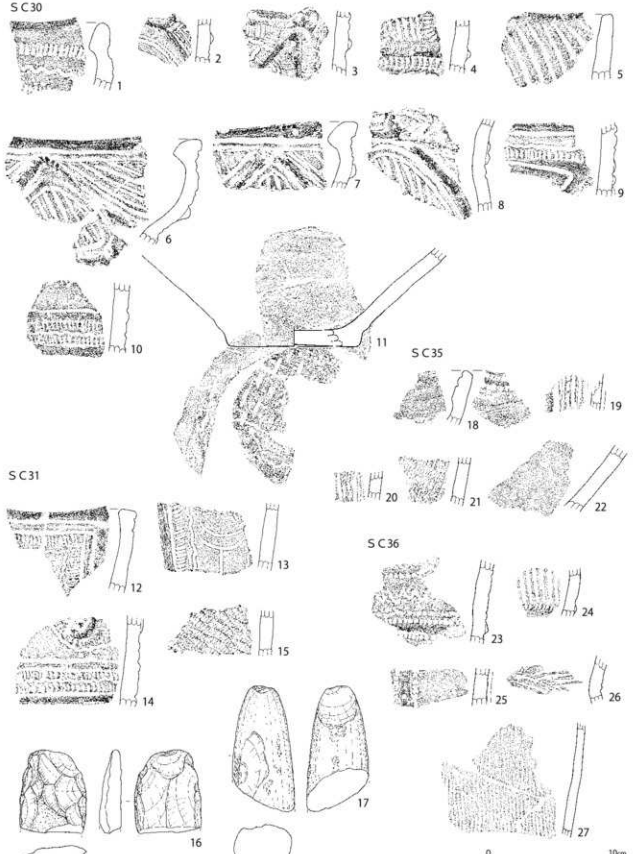
Ｎ－12区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.85m、短径0.77m、深さ0.51mである。断面形はボウル状を呈し、壙底に小ピット状の穴を有する。礫は上層部に集中し、プランからはみ出した位置にも散在する。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数122点、礫総重量12.2kgであり、チャート系礫の占める比率は92％である（第589図５）。大形の礫と小礫に、全礫が少量含まれる。

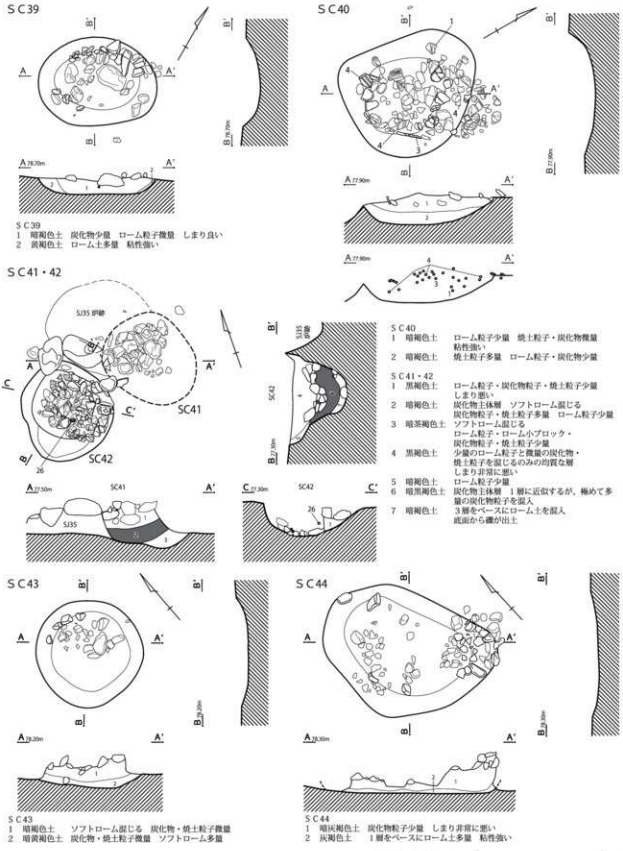
時期は、加曽利ＥⅠ式後半期と思われる。



第579図　Ⅱ区集石土壙（9）



第580図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（6）



SC39
1 暗褐色土 炭化物少量 ローム粒子微量 しまり良い
2 黄褐色土 ローム土多量 粘性強い

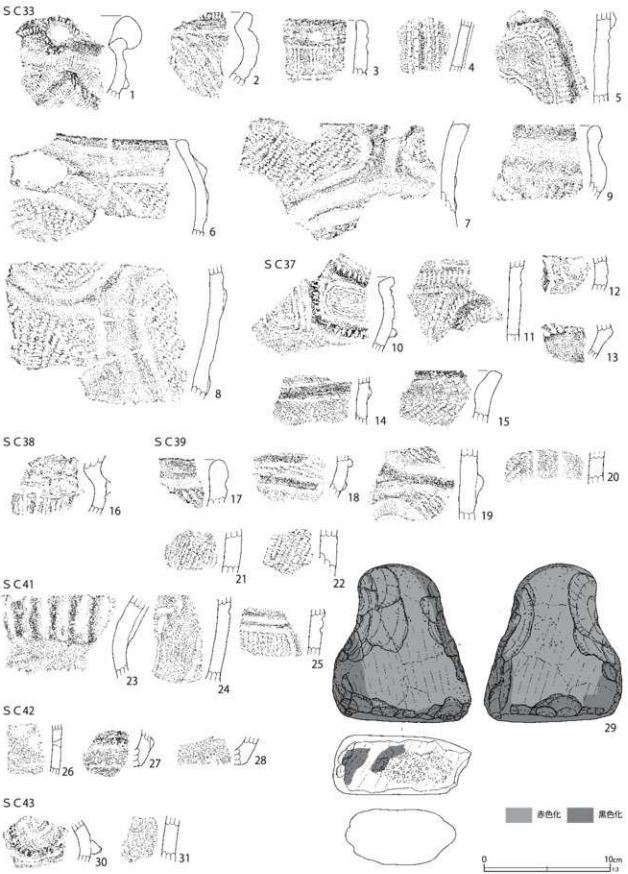
SC40
1 暗褐色土 ローム粒子少量 焼土粒子・炭化物微量 粘性強い
2 暗褐色土 焼土粒子多量 ローム粒子・炭化物少量

SC41・42
1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子少量 しまり悪い
2 暗褐色土 炭化物主体層 1層に近似 ソフトローム混じる
炭化物粒子・焼土粒子多量 ローム粒子少量
3 暗茶褐色土 ソフトローム混じる
ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子・焼土粒子少量
4 黒褐色土 少量のローム粒子と微量の炭化物・焼土粒子を混じるのみの均質な層 しまり非常に悪い
5 暗褐色土 ローム粒子少量
6 暗黒褐色土 炭化物主体層 1層に近似するが、極めて多量の炭化物粒子を混入
7 暗褐色土 3層をベースにローム土を混入 底面から礫が出土

SC43
1 暗褐色土 ソフトローム混じる 炭化物・焼土粒子微量
2 暗黄褐色土 炭化物・焼土粒子微量 ソフトローム多量

SC44
1 暗灰褐色土 炭化物粒子少量 しまり非常に悪い
2 灰褐色土 1層をベースにローム土多量 粘性強い

第581図 Ⅱ区集石土壙（10）



第582図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（7）

遺物は第580図18～22が出土した。18は口縁部内面に角押文を施文する、勝坂式古段階の土器である。19～21は加曽利Ｅ式土器で、撚糸文Ｌ地文上に隆帯懸垂文を施文するＥⅠ式と思われる。22は浅鉢の胴部である。

第36号集石土壙（第579図、第580図23～27、第589図６）

Ｌ－９区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.88m、短径0.75m、深さ0.08mである。断面形は皿状を呈し、壙底は若干波打っている。覆土の西半分程に炭化物を多量に含む黒色土がレンズ状に堆積していることから、壙中で火を焚いたことは明らかであり、プランの中心からやや西にずれて土壙の中心があったものと思われる。礫も中心からやや西に逸れて分布している。

集石の礫は、礫総個数262点、礫総重量12.7kgであり、チャート系礫の占める比率は90％である（第589図６）。大形、中形の礫は少なく、ほとんどが小さな破砕礫であるが、各階梯で全礫が少数存在する。

時期は、勝坂式中段階の時期でもやや古い時期と思われる。

遺物は第580図23～27が出土した。23、25は角押文を施文し、23は三角押文も施文する。24、26は半截竹管状工具の平行沈線を施文するもので、中段階の藤内式に比定されようか。

第37号集石土壙（第579図、第582図10～15、第589図７）

Ｐ－10区に位置する。第17号集石土壙と重複するが、本遺構の方が古い。平面形は円形で、規模は直径1.02m、深さ0.18mである。断面形は皿状を呈し、壙底は緩く窪む。覆土に炭化物を多量に含む黒色土が堆積していることから、壙中で火を焚いたことは明らかである。礫はほぼ中央部で、黒色土中から出土した。

集石の礫は、礫総個数207点、礫総重量16.5kgであり、チャート系礫の占める比率は99％である（第589図７）。小さな破砕礫を主体とするが、大形礫の中に全礫が若干含まれる。

時期は勝坂式古段階の新道式期と思われる。

遺物は第582図10～15が出土した。10は波状口縁を呈する口縁部の楕円区画に沿って２列の押引状の角押文を施文する阿玉台Ⅱ式土器である。11、13はキャタピラ文、角押文、三角押文を施文する新道式土器である。12は爪形文を伴う三叉文、15は単節ＬＲ縄文を横位施文する口縁部破片である。以上は、勝坂式古段階から中段階の土器群であろう。14は隆帯区画に単節ＲＬ縄文を横位施文する。

第38号集石土壙（第579図、第582図16、第589図８）

Ｏ－12区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.86m、短径0.80m、深さ0.21mである。断面形は弧状を呈し、壙底は丸く窪む。覆土に大き目の炭化物を含むが、火を焚いた明らかな痕跡は確認されなかった。礫は中央部にまとまっており、壙底近くまで含まれていた。

集石の礫は、礫総個数171点、礫総重量19.6kgであり、チャート系礫の占める比率は95％である（第589図８）。大形礫の中に、約５割の全礫、半割礫が含まれている。小さな破砕礫も多く含まれるが、礫の破砕化が遅いのであろうか。

時期は勝坂式終末～ＥⅠ式期と思われる。

遺物は第582図16の１点のみであるが、口縁部破片で、口縁に巡らす隆帯が剥落しており、地文にＯ段多条Ｌの撚糸文を施文する。

第39号集石土壙（第581図、第582図17～22、第590図１）

Ｐ－13区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.94m、短径0.71、深さ0.13mである。断面形は皿状を呈し、壙底は丸く窪む。礫は表層

に多く含まれている。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数76点、礫総重量18.5kgであり、チャート系礫の占める比率は93%である（第590図１）。大形礫の含まれる割合は多く、その中で全礫、半割礫も４分の１程含まれている。

時期は、加曽利ＥⅢ式期と思われる。

遺物は第582図17～22が出土した。全て加曽利Ｅ式土器であるが、18、21、22は加曽利ＥⅠ式、17、19、20は加曽利ＥⅢ式であろう。

第40号集石土壙（第581図、第584図１～６、第590図２）

Ｎ－11区に位置する。第44号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は不整形で、規模は長径1.10m、短径0.95m、深さ0.23mである。断面形は皿状を呈し、壙底は緩く窪む。覆土上層から礫と共に土器類が出土した。礫は土壙の北側のプランからはみ出して散在しており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数177点、礫総重量18.8kgであり、チャート系礫の占める比率は90%である（第590図２）。大形や中形の礫の中に、一定の割合で全礫や半割礫が含まれており、礫の破砕化が進んでいないようである。

時期は加曽利ＥⅢ式期である。

遺物は第584図１～６が出土した。１～３は口縁部文様帯を有するキャリパー形深鉢形土器で、１は波状口縁下に沈線の楕円区画文を有し、単節ＲＬ縄文を施文する。２は胴部に３本沈線間を無文に幅広の磨消懸垂文を施文する。３は頸部の括れの弱い器形で、低隆帯で口縁部を区画し単節ＲＬ縄文を充填施文する。胴部は２本沈線間を無文とする磨消懸垂文を施文する。４は口縁部文様帯のない深鉢で、口縁部から３本沈線間を無文にする磨消懸垂文を垂下する。５は内湾して開く口縁部に、沈線の褶曲文を描くものと思われ、口縁部に横位、他は縦位の単節ＲＬを施文する。

６は打製石斧である。撥形を呈し、刃部は片刃である。

第41号集石土壙（第581図、第582図23～25、第590図３）

Ｏ－10区に位置する。第35号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。第35号住居跡の廃絶後、第1次堆積層の薄い炉直上に構築されたものと思われる。平面形は不明で、長径（0.78）m、短径（0.65）m、深さ0.25mの範囲に礫が集中していた。礫の下層には焼土粒子と炭化物粒子を多量に含む層があり、壙中で火を焚いたことは明らかである。

集石の礫は、礫総個数164点、礫総重量24.9kgであり、チャート系礫の占める比率は88%である（第590図３）。比率的には小破砕礫が多いが、大形礫の中には全礫や半割礫が一定の量含まれる。

時期は加曽利ＥⅠ式後半期であろう。

遺物は第582図23～25が出土した。23は間隔を狭めた隆帯を縦位に施文する、中部高地系の土器である。24は低平な隆帯でモチーフを施文し、25は半截竹管状工具の平行沈線で区画と懸垂文を施文する。勝坂式終末期から加曽利ＥⅠ式に比定されよう。

第42号集石土壙（第581図、第582図26～29、第590図４）

Ｏ－10区に位置する。第35号住居跡の炉と重複するが、本遺構の方が新しい。第35号住居跡の廃絶後、第1次堆積層の薄い炉直上に構築されたものと思われる。隣接東側に隣接する第41号集石土壙との新旧関係は不明である。平面形は不整形で、規模は長径0.75m、短径0.74m、深さ0.45mである。断面形は２段掘り状を呈し、壙底はテラスを有する丸い掘り込み状を呈する。

集石の礫は、礫総個数393点、礫総重量41.7kg

であり、チャート系礫の占める比率は80%である（第590図4）。大形礫の中に占める全礫、半割礫の占める割合が多い。

時期は、出土土器の胎土、色調等から勝坂式の新段階辺りであろう。

遺物は第582図26～29が出土したが、小破片で型式判別が難しい。26は補修孔の空く浅鉢の胴部、28は底部付近を隆帯で区画している。29は底部破片である。28から判断して、勝坂式新段階辺りに比定されよう。

第43号集石土壙（第581図、第582図30～31、第590図5）

P－10区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.85m、短径0.84m、深さ0.11mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。土壙の壙底付近まで掘り下げているため、土壙の形状が不明瞭となっており、礫が浮いた状態で出土している。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数93点、礫総重量10.1kgであり、チャート系礫の占める比率は94%である（第590図5）。出土した礫の中には、全礫は含まれていなかった。

時期は、勝坂式期で、詳細な時期は不明であるが、新段階期であろう。

遺物は第582図30～31が出土した。30は刻み隆帯で楕円区画を施し、隆帯脇に沈線を施文して、区画内に三叉文を施文している。勝坂式新段階に比定されよう。31は破片の割れ口に結節沈線の痕跡があることから、勝坂式古段階から中段階の可能性がある。

第44号集石土壙（第581図、第584図7～9、第590図6）

P－10区に位置する。平面形は不整形で、規模は長径1.39m、短径1.03m、深さ0.07mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。壙底付近まで周囲を掘り下げているため、土壙の全体形は不明瞭である。礫は土壙の東隅からまとまって出土しており、西側でも疎らに出土している。壙中で火を焚いた痕跡は検出されなかった。

集石の礫は、礫総個数143点、礫総重量17.9kgであり、チャート系礫の占める比率は80%である（第590図6）。小破砕礫も多く出土しているが、大形礫に占める全礫及び半割礫の割合が多い。礫の破砕化が遅れているのか。

時期は、加曽利EⅢ式期と思われる。

遺物は第584図7～9が出土している。7は磨消懸垂文を施文する加曽利EⅢ式深鉢の胴部破片である。8は無文土器で、9は単節RL縄文を施文する。

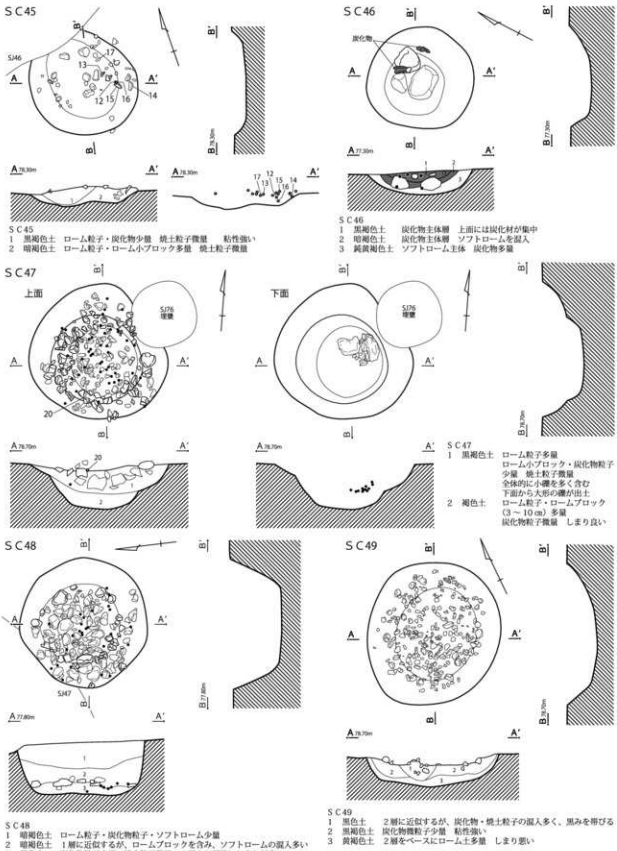
第45号集石土壙（第583図、第584図10～17、第590図7）

P－11区に位置する。第46号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しいと思われる。平面形はほぼ円形で、規模は長径（0.82）m、短径0.78m、深さ0.10mである。断面形は皿状を呈し、壙底は少し波打つ。礫は上層部に集中している。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数47点、礫総重量4.7kgであり、チャート系礫の占める比率は89%である（第590図7）。各重さの階梯において、全礫が一定の割合で含まれている。小さな礫にも全礫が含まれている点が注目される。

時期は、勝坂式期か加曽利EⅢ式期のいずれかと思われるが、集石の状態からは加曽利EⅢ式の可能性が高いと思われる。

遺物は第584図10～17が出土した。10、11は爪形文を有する勝坂式中段階、12～14は刻み隆帯で施文する勝坂式新段階、15～17は磨消懸垂文を施文する加曽利EⅢ式に比定されよう。



SC45
1　黒褐色土　ローム粒子・炭化物少量　焼土粒子微量　粘性強い
2　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量　焼土粒子微量

SC46
1　黒褐色土　炭化物主体層　上面には炭化材が集中
2　暗褐色土　炭化物主体層　ソフトロームを混入
3　黄褐色土　ソフトローム主体　炭化物多量

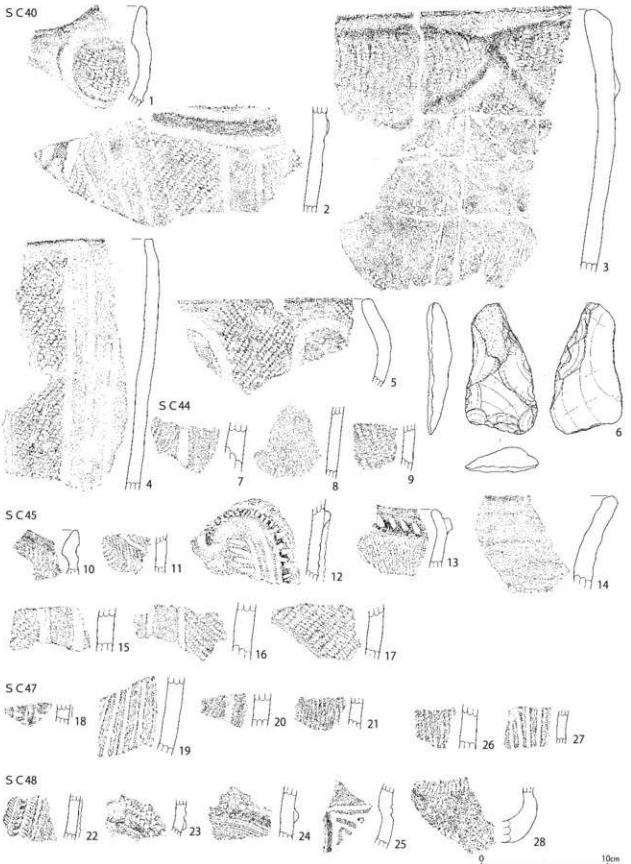
SC47
1　黒褐色土　ローム粒子多量
ローム小ブロック・炭化物粒子
少量　焼土粒子微量
全体的に小礫を多く含む
下面から大形の礫が出土
2　褐色土　ローム粒子・ロームブロック
(3～10cm) 多量
炭化物粒子微量　しまり良い

SC48
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子・ソフトローム少量
2　暗褐色土　1層に近似するが、ロームブロックを含み、ソフトロームの混入多い
3　黒色土　炭化物粒子少量　焼土粒子微量　2層より明瞭にしまりが良い

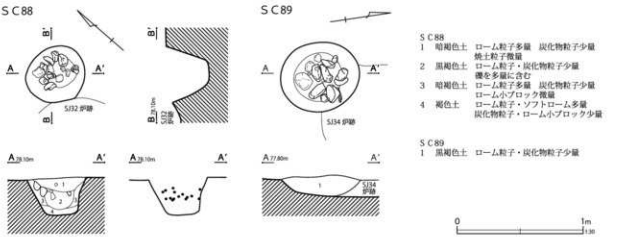
SC49
1　黒色土　2層に近似するが、炭化物・焼土粒子の混入多く、黒みを帯びる
2　黒褐色土　炭化物微粒子少量　粘性強い
3　黄褐色土　2層をベースにローム土多量　しまり悪い

炭化物層範囲　0　1m　1:30

第583図　Ⅱ区集石土壙（11）



第584図　Ⅱ区集石土壙出土遺物（8）



第585図　Ⅱ区集石土壙（12）

第46集石土壙（第583図、第590図８）

Ｌ－10・11区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.85m、短径0.80m、深さ0.17mである。断面形はボウル状を呈し、壙底はやや丸く窪む。覆土の上層部に炭化物を主地とする黒色土層が堆積し、炭化材も集中して検出されている。黒色土の下層には大きな礫が３点配置され、その上で火を焚いた様である。小礫等をあまり含んでいない。

集石の礫は、礫総個数11点、礫総重量0.6kgであり、チャート系礫の占める比率は100％である（第590図８）。大形の礫は全て全礫である。

時期は、出土遺物が無く不明である。

第47号集石土壙（第583図、第584図18～21、第591図１）

Ｑ－12区に位置する。第67号住居跡の埋甕と重複するが、埋甕の方が新しい。平面形は楕円形で、規模は長径1.10m、短径1.07m、深さ0.35mである。断面形は２段掘りのボウル状で、壙底は丸く窪む。遺構が重複している可能性もある。上段部の掘り込み状の壙底に大きな礫が数点配され、その上に小破砕礫が多量に出土した。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数432点、礫総重量60.4kgであり、チャート系礫の占める比率は84％である（第591図１）。大形礫における全礫、半割礫の割合が多い。

時期は、加曽利ＥⅢ式期と思われる。

遺物は第584図18～21が出土した。18は勝坂式、19は曽利式系、20は加曽利ＥⅢ式、21は撚糸文Ｒを施文する土器である。

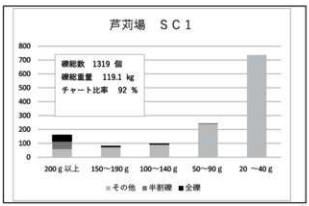
第48号集石土壙（第583図、第584図22～28、第591図２）

Ｏ・Ｐ－９・10区に位置する。第47号住居跡と一部重複するが、新旧関係は不明である。平面は円形で、規模は長径0.98m、短径（0.97）m、深さ0.40mである。断面形はたらい状を呈し、壙底は平坦である。礫は覆土の下部より出土している。

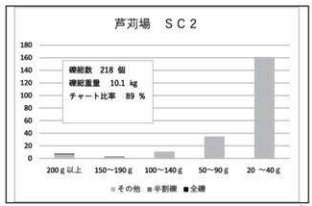
集石の礫は、礫総個数463点、礫総重量46.0kgであり、チャート系礫の占める比率は91％である（第591図２）。全体的に小破砕礫が多く含まれ、大形礫の中に全礫、半割礫も少量含まれる。

時期は、勝坂式古段階に近い中段階の時期と思われる。

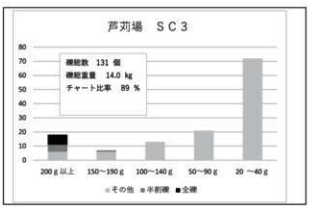
遺物は第584図22～28が出土した。22は隆帯脇に爪形文を施文し、小継ぎの鋸歯状沈線を沿わせている。23は隆帯脇に押引の結節沈線文を施文する。24は雲母を含み、条線文を施文する阿



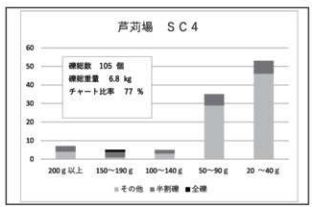
1



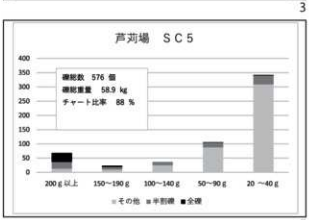
2



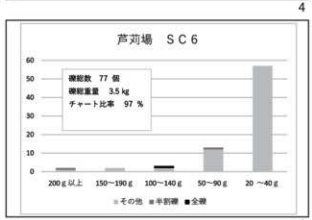
3



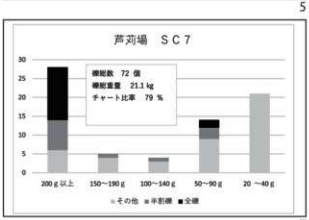
4



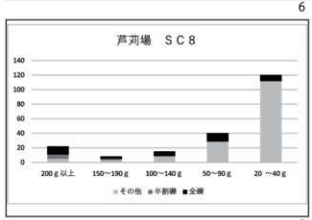
5



6

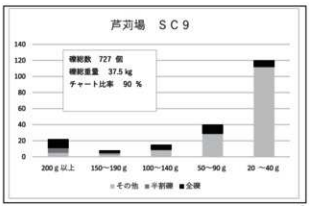


7

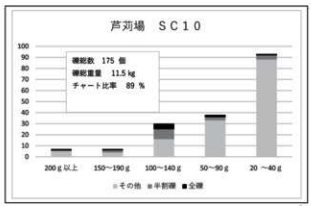


8

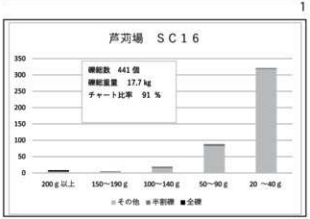
第586図　Ⅱ区集石土壙分析図（１）



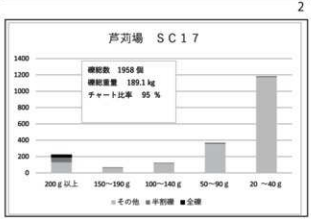
1



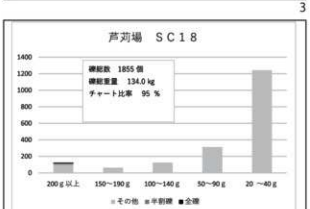
2



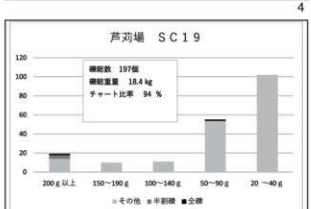
3



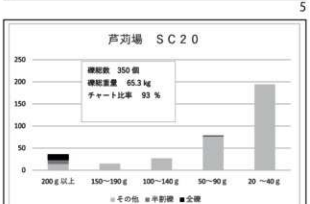
4



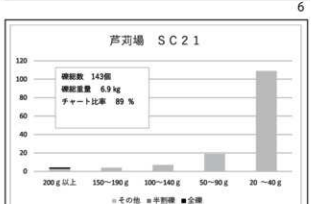
5



6

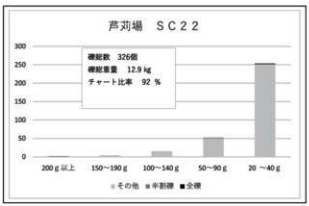


7

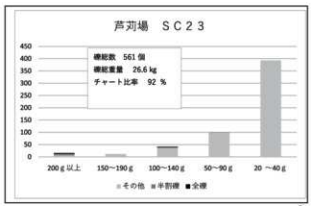


8

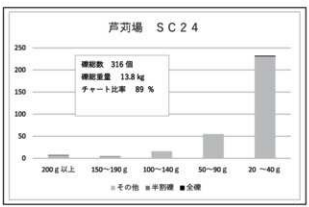
第587図　Ⅱ区集石土壙分析図（2）



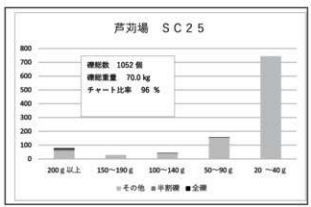
1



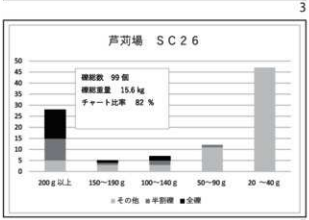
2



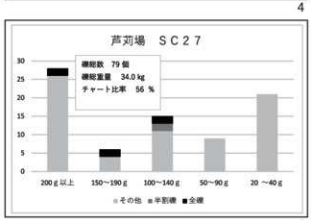
3



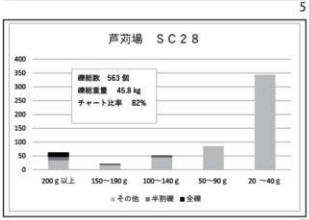
4



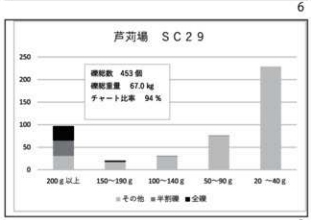
5



6

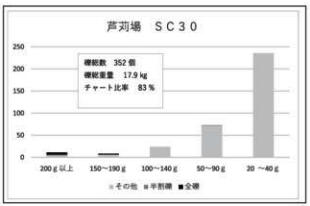


7

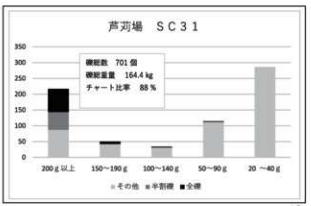


8

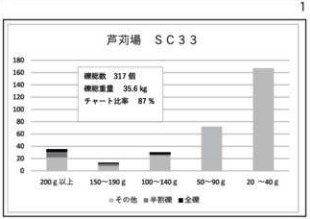
第588図　Ⅱ区集石土壙分析図（3）



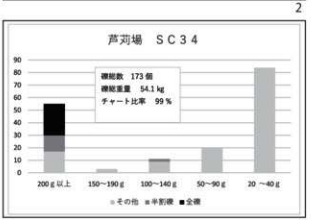
1



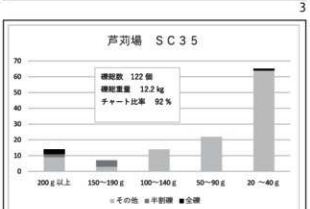
2



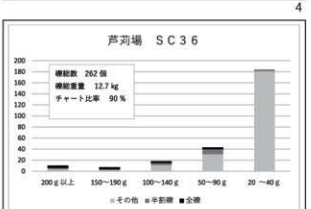
3



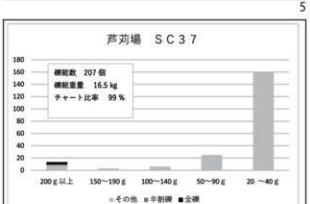
4



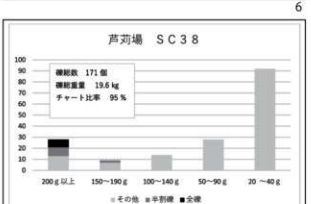
5



6

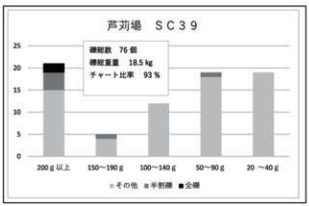


7

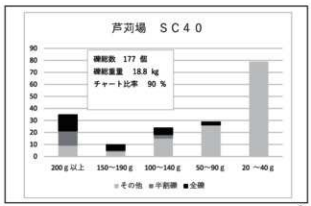


8

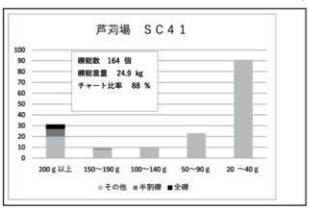
第589図　Ⅱ区集石土壙分析図（4）



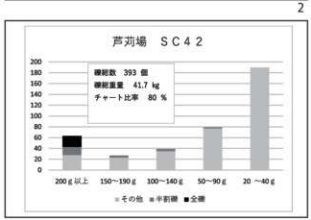
1



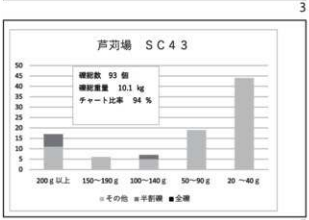
2



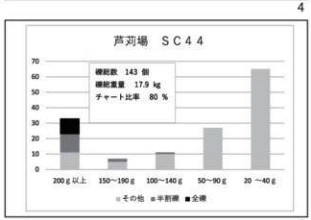
3



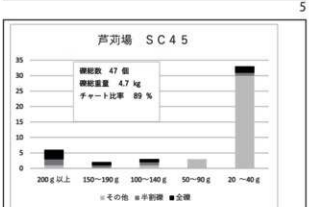
4



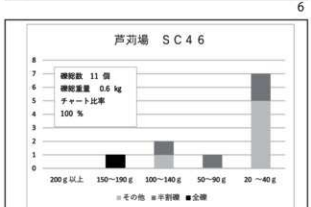
5



6

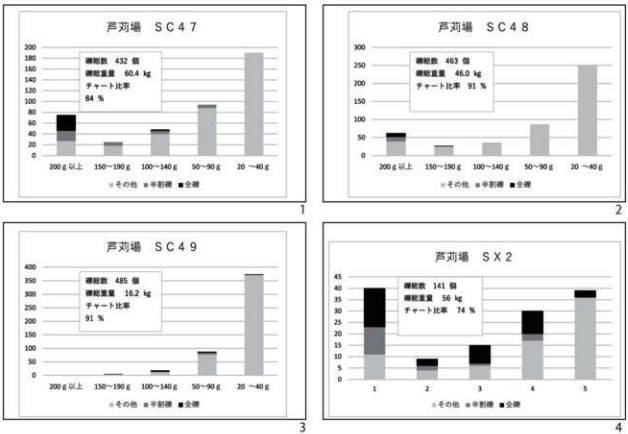


7



8

第590図　Ⅱ区集石土壙分析図（5）



第591図　Ⅱ区集石土壙分析図（６）

玉台式系土器、25は平行沈線でモチーフを描き、28は爪形文を施文する底部破片である。

第49号集石土壙（第583図、第591図３）

Ｒ－11区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.13m、短径1.05m、深さ0.24mである。断面形は緩い弧状を呈し、壙底は丸味を帯びる。礫の大半は覆土上層を中心として出土しており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数485点、礫総重量16.2kgであり、チャート系礫の占める比率は91％である（第591図３）。大形の礫はなく、ほとんどが小破砕礫であった。時期は、不明である。

第88号集石土壙（第585図）

Ｏ－12区に位置する。第32号住居跡と重複するが住居跡の方が古い、第32号住居跡の炉脇に構築されたもので、平面形は円形で、規模は長径0.47m、短径0.45m、深さ0.32mである。断面形は擂鉢形で、壙底は平坦である。

出土遺物はないが、第32号住居跡が廃棄された後、第1次堆積層の薄い炉周辺に構築されたものと思われる。住居跡の時期に近いＥⅠ式後半の時期と推定される。

第89号集石土壙（第585図）

Ｏ－11区に位置する。第34号住居跡と重複するが、住居跡の方が古い。平面形は円形で、規模は長径0.62m、短径0.55m、深さ0.15mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。第34号住居跡が廃棄された後、第１次堆積層が薄い炉の周辺に構築されたものである。

出土遺物はないが、住居跡の時期に近いＥⅡ式前半の時期と推定される。

b）Ⅲ区

第11号集石土壙（第592図、第594図１～７、第611図１）

Ｊ－22・23区に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長径1.35m、短径1.12m、深さ0.17mである。断面形は皿状を呈し、壙底はやや波を打っている。礫は上層に多く含まれており、壙底までは詰まっていない。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数489点、礫総重量22.1kgであり、チャート系礫の占める比率は92%である（第611図１）。破砕礫を主体とし、大形の礫はほとんど出土していない。

時期は勝坂式古段階の新道式期と思われる。

遺物は第594図１～７が出土した。１は隆帯脇に角押文を施文し、複列の角押文を充填施文する。２は蕨状整形痕の残る阿玉台式系の胴部破片で、阿玉台Ⅰb式辺りであろうか。３は三角印刻に三角押文が伴うもので、新道式であろう。５は三角押文で渦巻文を描き、５は隆帯脇にキャタピラ文を施文している。いずれも勝坂式古段階の土器群である。４は区画隆帯に交互刺突を施しており、新段階の土器と思われる。

第12号集石土壙（第592図、第594図８～10、第611図２）

Ｋ－21区に位置する。東側に第13号集石土壙が隣接する。平面形は楕円形で、規模は長径0.78m、短径0.55m、深さ0.12mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。やや大き目の礫を中心にコンパクトにまとまっており、壙底まで礫が詰まっていた。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数105点、礫総重量9.7kgであり、チャート系礫の占める比率は88%である（第611図２）。それぞれの重さで、半割礫が一定の割合で含まれているのが特徴的である。

時期は、判然とはしないが加曽利ＥⅠ式後半期と思われる。

遺物は第594図８～10が出土した。８は頸部を隆帯で区画し、胴部に撚糸文Ｌを施文する加曽利Ｅ式キャリパー形土器で、ＥⅠ式に比定されよう。９は単節ＬＲ縄文を縦位施文する。10は無文土器である。

第13号集石土壙（第592図、第594図11、12、第611図３）

Ｋ－21区に位置する。西側に第12号集石土壙が隣接する。平面形は不整円形で、規模は長径0.50m、短径0.40m、深さ0.08mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。遺構の中央部に大き目の礫がまとまっている。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数20点、礫総重量5.0kgであり、チャート系礫の占める比率は95%である（第611図３）。大形礫は半数以上が全礫か半割礫である。

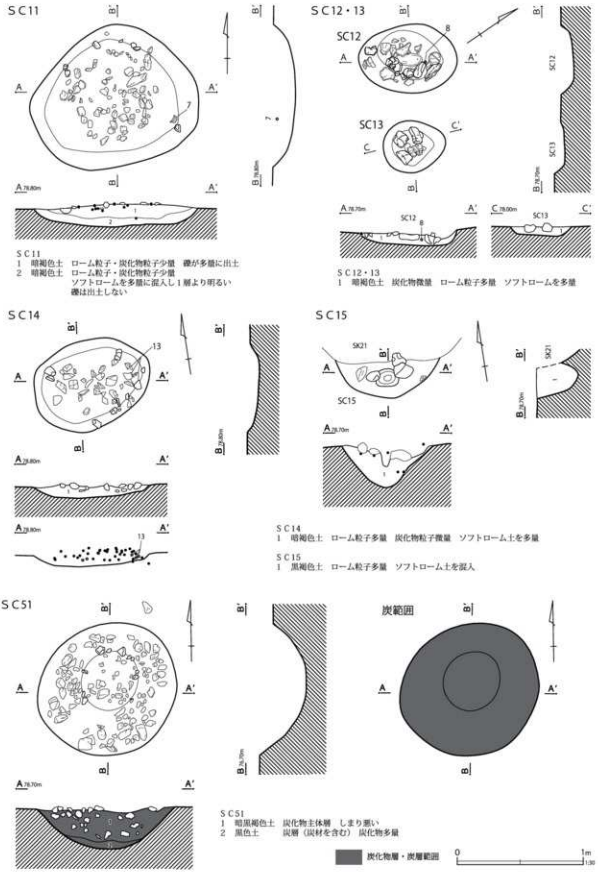
時期は、出土遺物からでは勝坂式中～新段階期と推定される。

遺物は第594図11、12が出土した。11は半截竹管状工具の平行沈線でパネル状区画文を施すものであり、区画に沿って爪形文を施文している。12は無文土器である。

第14号集石土壙（第592図、第594図13、第611図４）

Ｌ－20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.93m、短径0.70m、深さ0.08mである。断面形は皿状を呈し、壙底はほぼ平坦である。礫は表層近くから壙底まで、散在的に出土している。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数187点、礫総重量10.2kgであり、チャート系礫の占める比率は95%である



SC11
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量　礫が多量に出土
2　暗褐色土　ローム粒子・炭化物粒子少量
　　ソフトロームを多量に混入し1層より明るい
　　礫は出土しない

SC12・13
1　暗褐色土　炭化物微量　ローム粒子多量　ソフトロームを多量

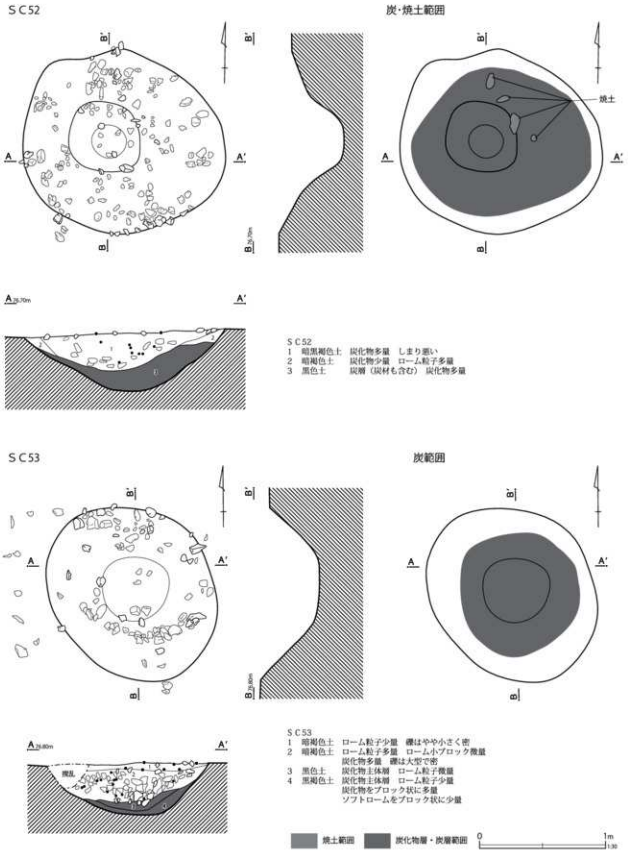
SC14
1　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物粒子微量　ソフトローム土を多量

SC15
1　黒褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム土を混入

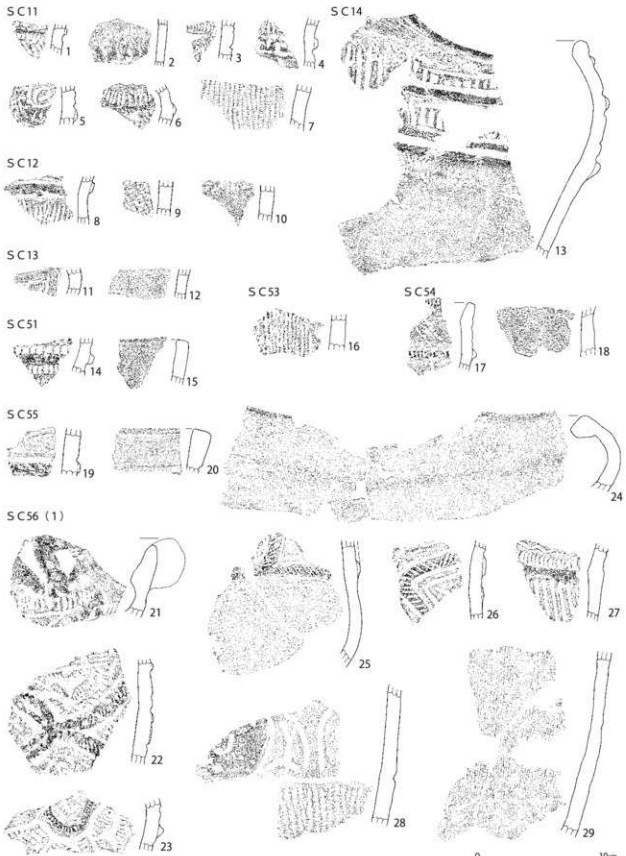
SC51
1　暗黒褐色土　炭化物主体層　しまり悪い
2　黒色土　　炭層（炭材を含む）炭化物多量

炭化物層・炭層範囲

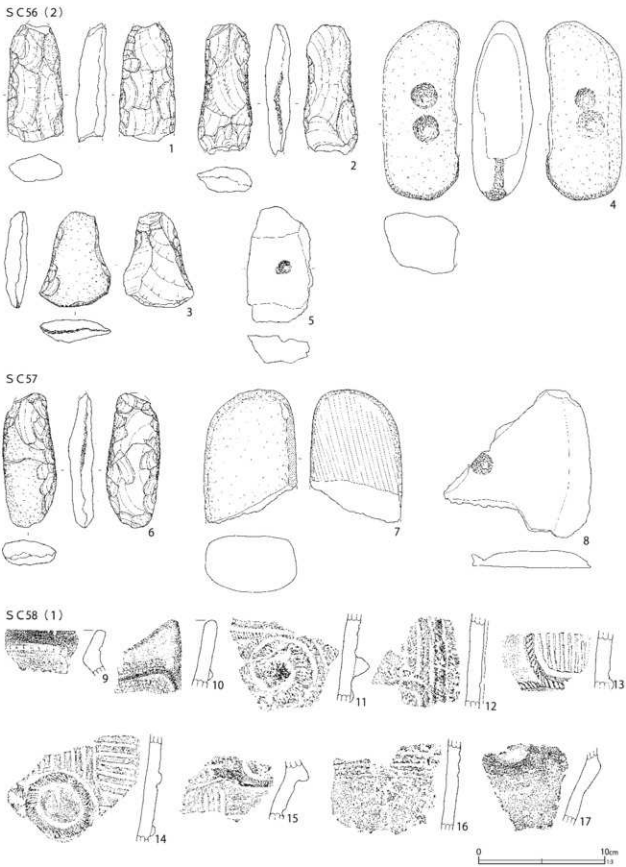
第592図　Ⅲ区集石土壙（1）



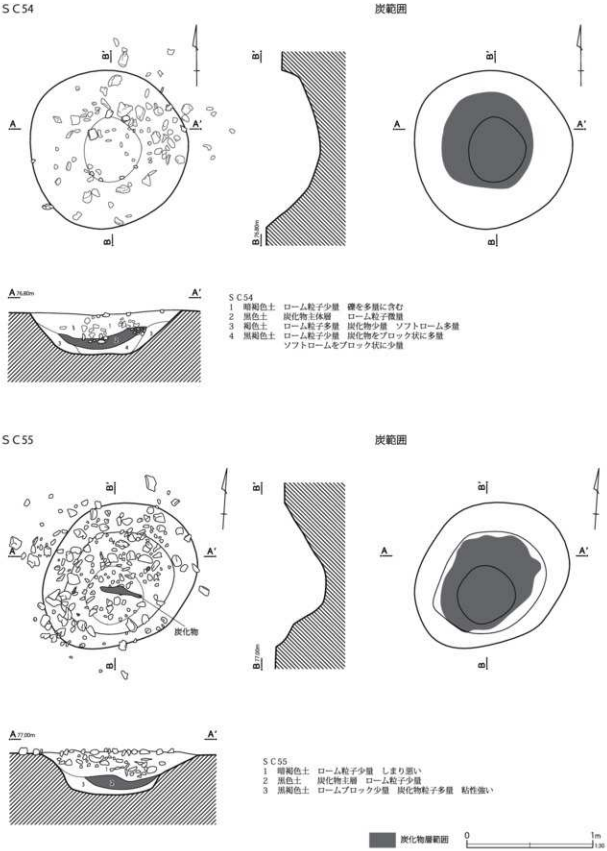
第593図 Ⅲ区集石土壙（2）



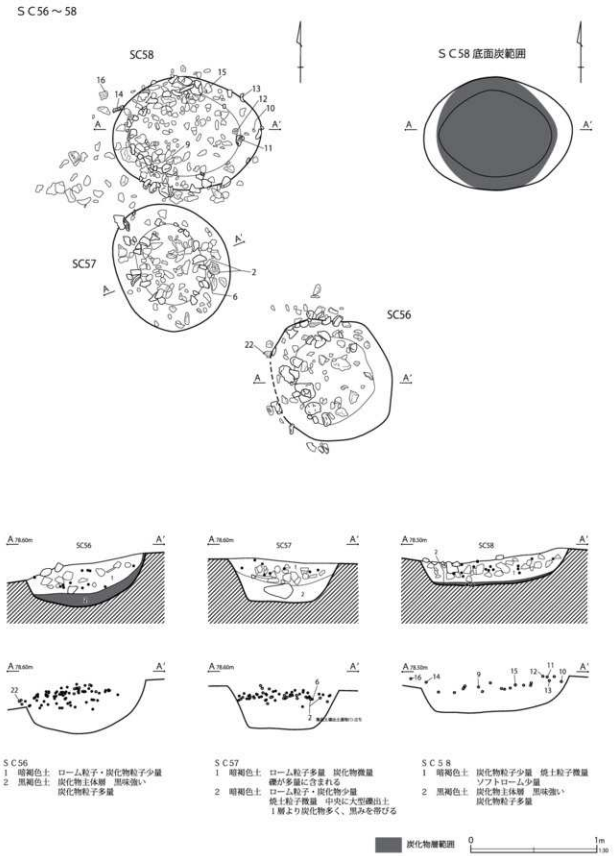
第594図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（1）



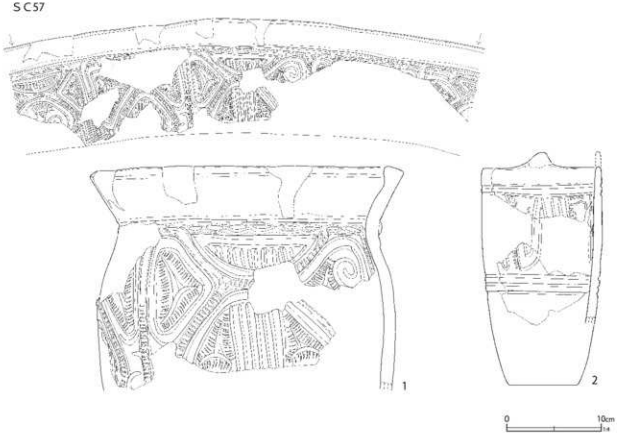
第595図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（2）



第596図　Ⅲ区集石土壙（3）



第597図　Ⅲ区集石土壙（4）



第598図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（3）

第223表　Ⅲ区集石土壙出土復元土器観察表（第598図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
598-1	[23.7]	33.4	-	-	40%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
598-2	[17.3]	(12.6)	-	-	40%

（第611図4）。それぞれの重さで、全礫や半割礫が含まれており、小さい礫にも全礫が含まれている。

時期は、加曽利ＥⅠ式の後半段階と推定される。

出土遺物は第594図13が出土した。13は波状口縁のキャリパー形深鉢で、口縁部に橋状把手が付くものと思われる。口縁部の地文に沈線を施文しており、曽利式系要素を有する。頭部を無文帯とする。

第15号集石土壙（第592図、第611図5）

Ｌ－20区に位置する。第21号土壙と重複するが、本遺構の方が古い。平面形は不明で、規模は長径0.78m、短径（0.27）m、深さ0.33mである。断面形は擂鉢状を呈し、壙底は軽く窪む。壙中の上層部にやや大きな礫がまとまっていた。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数９点、礫総重量4.9kgであり、チャート系礫の占める比率は89％である（第611図5）。大形礫のほとんどが全礫か、半割礫で構成される。

時期は、出土遺物がなく不明である。

第51号集石土壙（第592図、第594図14、15、第611図6）

Ｄ－20区に位置する。調査区最北端部の遺構分布限界地点で、５基まとまって存在する集石土壙の１基である。平面形は円形で、規模は長径1.12m、短径1.03m、深さ0.32mである。断面

形はボウル状を呈し、壙底は丸く窪む。覆土は炭化物主体の黒色土で、炭化材も残存していた。壙底も被熱で焼土化し、さらに炭化物で黒く変色している。礫はこの黒色土中の全体から出土しており、壙中で火を焚いていたことは明らかである。

集石の礫は、礫総個数1,369点、礫総重量68.8kgであり、チャート系礫の占める比率は95%である（第611図6）。大形礫では全礫も少し含まれるが、大半は被熱によって破砕された小礫を主体とする。

時期は、零細な遺物から判断すると、勝坂式中段階の可能性が高い。

遺物は第594図14、15が出土した。14は区画隆帯脇に角押文を1列施文し、それに三角押文1列を沿えている。15は無文の口縁部である。藤内式であろう。

第52号集石土壙（第593図、第611図7）

D－19区に位置する。調査区最北端部の遺構分布限界地点で、5基まとまって存在する集石土壙の1基である。平面形は楕円形で、規模は長径1.61m、短径1.43m、深さ0.45mである。断面形は中央部が落ち込む擂鉢状を呈し、壙底は丸く窪む。覆土下層に炭化物を多量に含む黒色土が堆積しており、礫は主にその上から出土している。壙底は被熱で焼土化し、さらに炭化物が覆って黒色化している。壙中で火を焚いたことは明らかである。

集石の礫は、礫総個数2,741点、礫総重量127.2kgであり、チャート系礫の占める比率は90%である（第611図7）。それぞれの重さの中に、全礫が若干含まれている。また、礫の主体を成すのは被熱によると思われる100g以下の小破砕礫である。大形礫がほとんどないことから、大半の礫は使用により破砕され、小礫化したものと思われる。

時期は、出土遺物がなく不明である。

第53号集石土壙（第593図、第594図16、第611図8）

D－20区に位置する。調査区最北端部の遺構分布限界地点で、5基まとまって存在する集石土壙の1基である。平面形は楕円形で、規模は長径1.46m、短径1.25m、深さ0.41mである。断面形は擂鉢状を呈し、壙底は丸く窪む。覆土下層に炭化物を多量に含む黒色土が堆積しており、礫は主にその上から出土している。壙底は被熱で焼土化しており、さらに炭化物が覆って黒色化している。壙中で火を焚いたことは明らかである。

集石の礫は、礫総個数2,247点、礫総重量146.2kgであり、チャート系礫の占める比率は88%である（第611図8）。それぞれの重さの中に全礫が若干含まれているのが特徴的で、特に大形礫のほとんどが全礫である。

時期は、出土遺物からでは推定が困難である。

遺物は第594図16の1点のみ出土した。16は撚糸文Lを施文する胴部破片で、時期判定が困難であるが、色調や胎土等から勝坂式の可能性が高いものと判断される。

第54号集石土壙（第596図、第594図17、18、第612図1）

D－19区に位置する。調査区最北端部の遺構分布限界地点で、5基まとまって存在する集石土壙の1基である。平面形は円形で、規模は長径1.28m、短径1.25m、深さ0.35mである。断面形はボウル状を呈し、壙底は丸く窪む。覆土最下層ではなく、やや浮いた状態で炭化物を多量に含む黒色土が堆積しており、その範囲で壙底が黒色化している。礫は黒色土より上層から出土しており、壙底までには含まれていない。壙中で火を焚いたことは明らかである。

集石の礫は、礫総個数1,348点、礫総重量70.6kgであり、チャート系礫の占める比率は90%である（第612図1）。それぞれの重さの中に全礫が一定の割合で含まれているのが特徴的である。

また、小破砕礫が最も多く含まれる点は変わりがない。

時期は、勝坂式中段階辺りであろう。

遺物は第594図17、18が出土した。17は角頭状を呈する口唇部に刻みを施し、同じく刻みを施した隆帯で口縁部文様帯を区画する。区画隆帯脇には角押文を施文する。口縁部には斜行する2列の角押文でモチーフを描いている。胎土に雲母を含み、阿玉台Ⅱ式辺りに対応しようか。18は無文の深鉢形土器の頸部破片である。

第55号集石土壙（第596図、第594図19、20、第612図2）

E－20区に位置する。調査区最北端部の遺構分布限界地点で、5基まとまって存在する集石土壙の1基である。平面形は楕円形で、規模は長径1.32m、短径1.07m、深さ0.35mである。断面形は擂鉢状を呈し、壙底は丸く窪む。覆土最下層ではなく、やや浮いた状態で炭化物を多量に含む黒色土が堆積しており、大形の炭化材も残存していた。また、黒色土が分布する範囲で、壙底が黒色化している。壙中で火を焚いたことは明らかである。礫は黒色土より上層から出土しており、壙底までには含まれていない。

集石の礫は、礫総個数1,894点、礫総重量102.3kgであり、チャート系礫の占める比率は85%である（第612図2）。第51号集石土壙から第54号集石土壙までと同様に、それぞれの重さの礫に中に全礫が一定の割合で含まれている点で類似する。

時期は判断が難しいが、第51号集石土壙から第54号集石土壙とほぼ同時期で、勝坂式中段階の所産と思われる。

遺物は第594図19、20が出土した。19は区画隆帯上に押引状の斜位の刻みを施している。時期不詳であるが、勝坂式古段階の可能性がある。20は角頭状を呈する無文の口縁部である。

第51号集石土壙から第55号集石土壙は、規模や形状、壙中内での薪焚きなど共通項が多く、出土する礫の状態も類似する。時期は確定的な遺物の出土が少なく判断が難しいが、およそ勝坂式でも古い段階での所産であることが把握される。何よりも1箇所にまとまって同規模、同様相、同時期の集石土壙が検出された点が注目されよう。

第56号集石土壙（第597図、第594図21～29、第595図1～5、第612図3）

Ⅰ－22区に位置する。第53号住居跡の覆土内に構築される。平面形は楕円形で、規模は長径（1.07）m、短径（0.96）m、深さ0.33mである。断面形はボウル状を呈し、壙底は丸味を帯びる。住居跡の覆土内に構築されているため、形状には不確定な要素が多い。壙底付近に炭化物の多い黒色土が堆積しており、壙中で火を焚いた可能性は高い。礫は黒色土より上層から出土する傾向がある。

集石の礫は、礫総個数1,733点、礫総重量141.4kgであり、チャート系礫の占める比率は94%である（第612図3）。礫は小破砕礫が最も多く、大形礫では全礫や半割礫の含まれる割合が多くなっている。

時期は、勝坂式中段階から新段階にかけての事時期と推定される。

遺物は第594図21～29、第595図1～8が出土した。第594図21は捻りの入った把手を有し、爪形文で区画して三角押文を施文する。胎土に雲母を含み、勝坂式古段階に相当しよう。22～27は勝坂式中段階から新段階の藤内式新段階から井戸尻式古段階にかけての土器群である。22、23は刻み隆帯と沈線でモチーフを描き、三叉文や爪形文、連続押引文を施文する。22は右向きの蛇頭、もしくはサンショウウオの頭を描いているようである。24は無文の口縁部で把手が付いていたようである。25、26は刻み隆帯と沈線で区画を施すもので、25は底部破片である。27は半截竹管

状工具による集合平行沈線を施文し、区画隆帯脇に爪形文と波状沈線文を沿わせている。28、29は勝坂式新段階の土器で、28は低平隆帯で渦巻文を描き、胴部に0段多条RLの縦走縄文を施文する。29は撚糸文Lを施文する胴部破片である。

第595図1～3は打製石斧である。1は短冊形を呈する打製石斧の上半部で、基部を僅かに欠損している。2、3は撥形を呈する。2は両側縁の括れ部に敲打による潰れが認められる。4は磨石である。正面及び裏面に2個1対の凹痕を有するが浅く、不明瞭である。5は石皿の破片で凹痕を有する。

第57号集石土壙（第597図、第598図1、2、第595図6～8、第612図4）

Ⅰ－22区に位置する。第53号住居跡の覆土内に構築される。平面形は楕円形で、規模は長径(1.02) m、短径（0.90）m、深さ0.32mである。断面形はたらい状を呈し、壙底は平坦である。住居跡の覆土内に構築されているため、形状には不確定な要素が多い。覆土下層に大形礫が、上層に小礫が多い傾向にある。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数442点、礫総重量39.2kgであり、チャート系礫の占める比率は83%である(第612図4)。小破砕礫を主体とするが、少量の大形礫には全礫も含まれている。

時期は、勝坂式中段階から新段階にかけての時期と推定される。

遺物は第598図1、2、第595図6～8が出土した。第598図1は無文の口縁部が外反し、頸部で括れる器形の深鉢である。頸部を連鎖状隆帯で区画し、縦位隆帯で胴部を4単位に区画する。区画内には上下で対になるモチーフを描き、区画内に集合沈線や、爪形文を伴う三叉文を施文している。変形したパネル文状区画でもあり、藤内式の新しい段階から井戸尻式にかけての土器と思われる。2は円筒形土器で、口縁部に突起を有し、沈線で縦位区画及び区画文を描き、爪形文を沿えるものと思われる。1と同時期かやや新しい段階に位置付けられるであろう。なお、本遺構が第53号住居跡の覆土内に構築されていることから、形が復元できる土器については混在の可能性を否定しきれない。

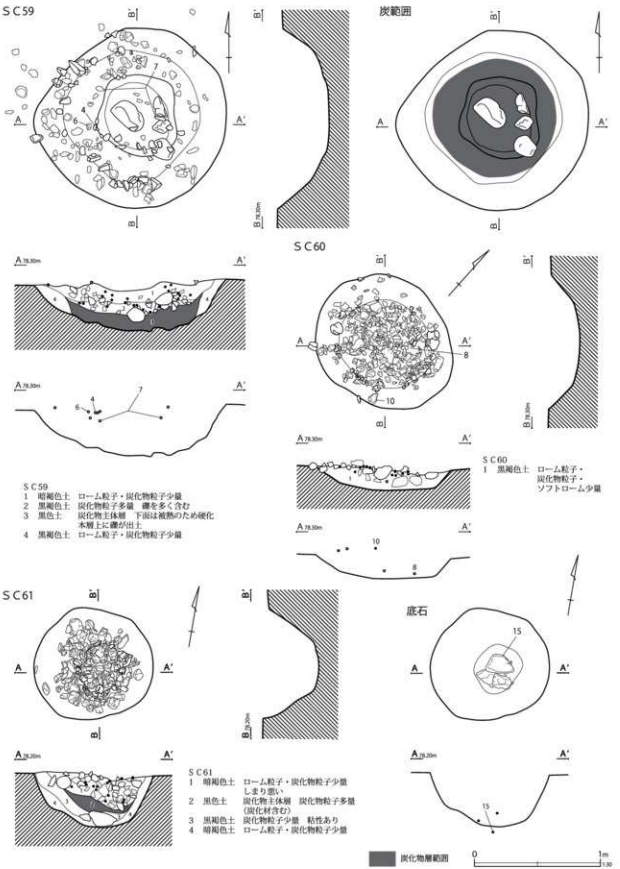
第58号集石土壙（第597図、第595図9～17、第601図1～3、第612図5）

Ⅰ－22区に位置する。第53号住居跡の覆土内に構築される。平面形は楕円形で、規模は長径1.20m、短径0.90m、深さ0.20mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。壙底には炭化物を多く含む黒色土が堆積していたことから、壙中で火を焚いたことは明らかである。住居跡の覆土内に構築されているため、形状には不確定な要素が多い。土壙のプランより外側に礫が散在している点も、覆土中という要素が加味されよう。

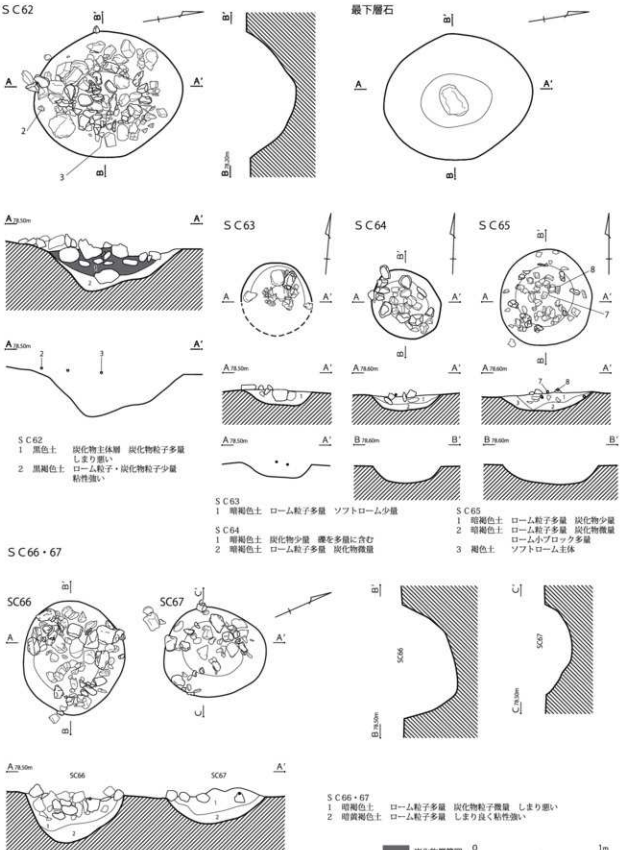
集石の礫は、礫総個数1,689点、礫総重量101.4kgであり、チャート系礫の占める比率は95%である（第612図5）。礫は小破砕礫を主体としている点が第56号集石土壙や第57号集石土壙と類似しており、大形礫の中に全礫が含まれるのも良く類似している。

時期は、勝坂式中段階から新段階にかけての時期と推定される。

遺物は第595図9～17、第601図1～3が出土した。第595図9、10は角押文や2列の押引状の角押文を施文する、勝坂式古段階の土器群で、10は雲母を含む阿玉台Ⅱ式に比定されよう。11～17は勝坂式新段階を中心とした土器群で、11は細かな刻みを施した隆帯で渦巻文、14は円形区画文、12はパネル状の区画文を施文する。沈線は半截竹管状工具の平行沈線を使用している。藤内式の終末期か井戸尻式の初頭期であろう。13、15、17は勝坂式新段の土器群である。



第599図　Ⅲ区集石土壙（5）



第600図 Ⅲ区集石土壙（6）

第601図１は撥形を呈する打製石斧の基部片で、２が短冊形の打製石斧である。３は磨石の破片で、被熱の影響で赤色化及び剥落が生じている。

第56～58号集石土壙の３基は、第53号住居跡の覆土内で吹上パターン状の遺物廃棄後に構築されたのか、さらに覆土が埋まった状態で構築されたかは明らかにし得なかった。しかし、遺物の一括廃棄から多くの時間を経ていないであろうことは、出土遺物から想定されるところである。また、覆土内であっても掘り込みを行っていることから、住居跡の覆土がある程度埋まっていたことも確かであろう。他の住居跡では、炉が埋まりかけている段階で集石土壙が構築される例があるなど、廃棄された住居跡は、埋没過程に伴って用途の異なる様々な行為に活用されていたことを知ることができる。

第59号集石土壙（第599図、第601図４～７、第612図６）

Ｈ－22区に位置する。平面形は不整円形で、規模は長径1.53m、短径1.42m、深さ0.37mである。断面形は緩い弧状を呈し、壙底は凹凸が見られる。壙底には厚く炭化物を多く含む黒色土が堆積しており、壙中で火を焚いたことは明らかである。この黒色土に埋もれる様な形で大きな礫が４点、据えられたように出土した。

集石の礫は、礫総個数1,581点、礫総重量100.4kgであり、チャート系礫の占める比率は95％である（第612図６）。壙底から出土した大形礫は全礫が多く、他は圧倒的に小破砕礫が占めていた。

時期は、勝坂式の新段階期と思われる。

遺物は第601図４～７が出土した。４は沈線の渦巻文に爪形文を沿わせている。57は刻みを施す隆帯で区画を行い、７は沈線の円形区画内にペン先状の集合結節沈線を施文する。６は平行沈線による半隆起線で弧線文を施文する。勝坂式新段階の中で古い様相を有する。

第60号集石土壙（第599図、第601図８～11、第612図７）

Ｈ－20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.16m、短径1.10m、深さ0.18mである。断面形は皿状を呈し、壙底はやや丸く窪む。礫は下部に大形礫が含まれ、上部に小破砕礫が集中していた。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数786点、礫総重量40.4kgであり、チャート系礫の占める比率は95％である（第612図７）。圧倒的に小破砕礫が多くを占めていた。礫が粉々になった状況である。

時期は、零細な資料から勝坂式古段階と推定される。

遺物は第601図８～11が出土した。８は隆帯脇にキャタピラ文を施文するもので、部分的に二重に施文してある。９は無文土器である。

10は撥形を呈する打製石斧で、刃部は片刃である。11は台石である。

第61号集石土壙（第599図、第601図12～16、第612図８）

Ｈ－20区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.94m、短径0.90m、深さ0.40mである。断面形は擂鉢状を呈し、壙底はやや凹凸がある。壙底に扁平な大形礫を３点設置し、炭化物を多く含む黒色土を挟んで上部に破砕礫が詰まっていた。壙中で火を焚いたのは明らかである。

集石の礫は、礫総個数1,065点、礫総重量87.6kgであり、チャート系礫の占める比率は91％である（第612図８）。壙底に配した大形礫が全礫である以外は、ほとんどが中・小の破砕礫である。

時期は、零細な資料から、勝坂式古段階の所産と思われる。

遺物は第601図12～16が出土した。12は隆帯脇にキャタピラ文と三角押文を施文し、14は角押文を施文する。13は隆帯脇に単列の押引沈線

を施文する。

15は集石土壙の底面に敷かれていた磨石である。16は石皿である。

第62号集石土壙（第600図、第602図１～４、第613図１）

Ｉ－20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.19m、短径1.00m、深さ0.35mである。断面形は緩やかな擂鉢状を呈する。壙底は段差を有する。壙底最下部に大形礫１点を配し、その上層に炭化物を多量に含む黒色土が厚く堆積する。礫は黒色土にまみれて出土しており、大形礫も上層から出土している壙中で火を焚いたのは明らかであろう。

集石の礫は、礫総個数486点、礫総重量108.0kgであり、チャート系礫の占める比率は98％である（第613図１）。大形礫の約半分が全礫か半割礫であり、他は小破砕礫が多数を占める。

時期は、勝坂式末から加曽利ＥⅠ式段階と思われる。

遺物は第602図１～４が出土した。１、２ともキャリパー形深鉢の口縁部破片である。１は撚糸文Ｌ地文上に隆帯の渦巻文を施文する。２は口縁部に沈線文を施文する曽利式系の土器である。３は無節Ｒ縄文を施文しており、４は浅鉢の口縁部と思われる。

第63号集石土壙（第600図、第602図５、第613図２）

Ｊ－20区に位置する。第57号住居跡と重複するが、住居跡の方が古い。平面形は円形と思われ、規模は長径0.55m、短径（0.30）m、深さ0.12mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。小さなプランに、大きな礫がまとまっていた。

集石の礫は、礫総個数40点、礫総重量6.5kgであり、チャート系礫の占める比率は93％である（第613図２）。大形礫はほとんどが全礫か半割礫である。

時期は勝坂式新段階期の可能性がある。

遺物は第602図５の１点のみ出土した、角頭状の深鉢の口縁部で、勝坂式土器であろう。

第64号集石土壙（第600図、第602図６、第613図３）

Ｊ－20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.59m、短径0.51m、深さ0.12mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。上層部からやや大形の礫がまとまって出土した。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数43点、礫総重量11.6kgであり、チャート系礫の占める比率は95％である（第613図３）。大形礫の占める割合が多く、小破砕礫よりも個数が多い。また、大形礫は全礫か半割礫が半数を占める。

時期は勝坂式古段階と思われる。

遺物は第602図６が1点のみ出土した。６は雲母を含み、襞状整形痕が残る阿玉台Ⅱ式土器であろうか。

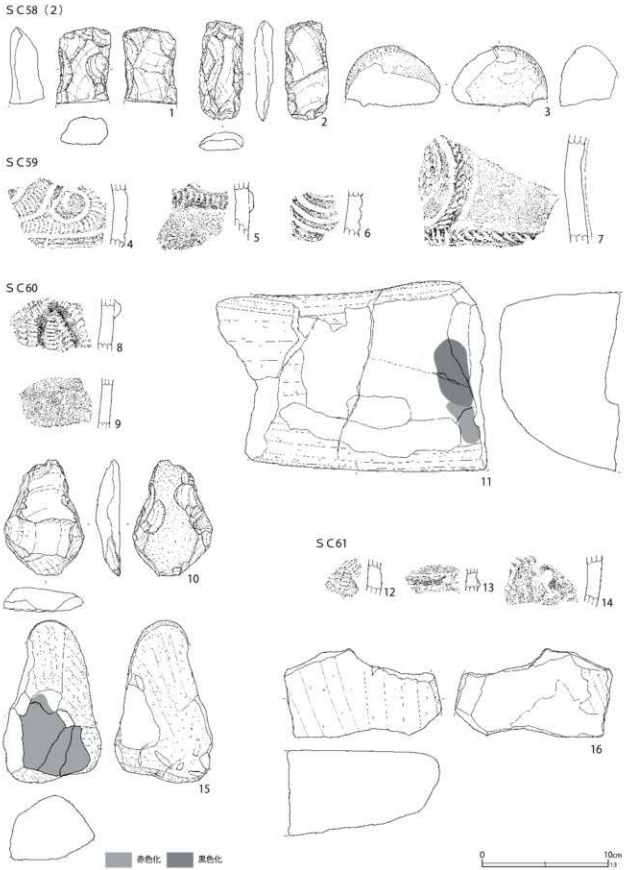
第65号集石土壙（第600図、第602図７、８、第613図４）

Ｊ－20区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.77m、短径0.72m、深さ0.13mである。断面は弧状を呈し、壙底は緩く窪む。覆土上層部に礫が多く出土しており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

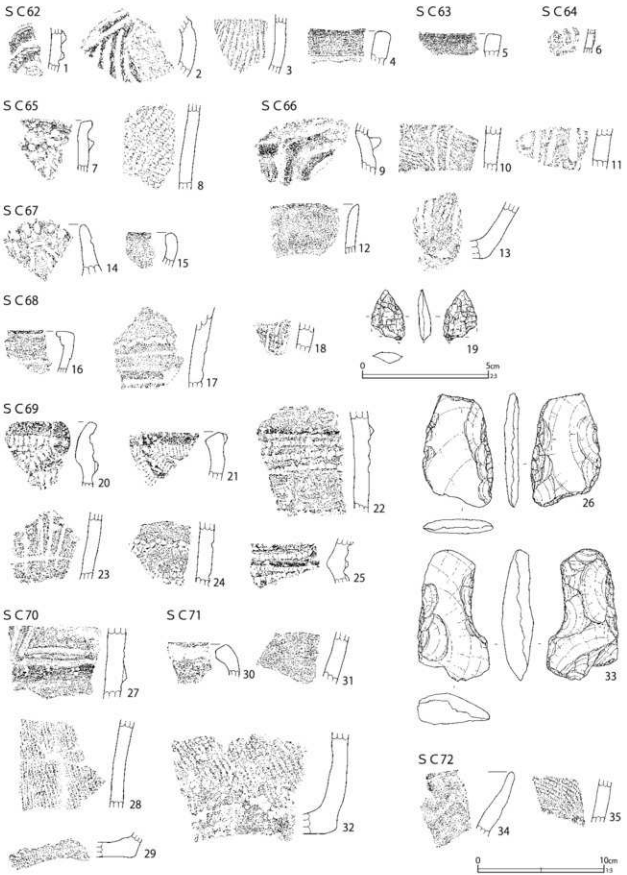
集石の礫は、礫総個数164点、礫総重量8.0kgであり、チャート系礫の占める比率は89％である（第613図４）。圧倒的に小破砕礫が占めていた。

時期は、勝坂式中～新段階期であろう。

遺物は第602図７、８が出土した。７は口縁部に隆帯を施文するが、被熱で器面が荒れており、時期不詳である。８は単節ＲＬ縄文を縦位施文するが、被熱で、器面が荒れている。



第601図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（4）



第602図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（5）

第66号集石土壙（第600図、第602図９～13、第613図５）

Ｋ－18区に位置する。北側に第67号集石土壙が隣接する。平面形は楕円形で、規模は長径0.90m、短径0.88m、深さ0.40mである。断面形は幅広の擂鉢状を呈し、壙底は丸く窪む。礫は上層部にまとまり、大形礫も混じる。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数661点、礫総重量83.7kgであり、チャート系礫の占める比率は95%である（第613図５）。大形礫が多いものの、全礫や半割礫の占める割合が低い。

時期は、加曽利ＥⅢ式期であろう。

遺物は第602図９～13が出土した。９、10、13は加曽利ＥⅢ式土器であり、11は沈線間に雨垂れ刺突文状の沈線を施文する曽利式系の土器と思われる。あるいは、後期称名寺２式の可能性もある。12は壺の口縁部である。

第67号集石土壙（第600図、第602図14、15、第613図６）

Ｋ－18・19区に位置する。南側に第66号集石土壙が隣接する。平面形は不整円形で、規模は長径0.85m、短径0.71m、深さ0.20mである。断面形はボウル状を呈し、壙底は凹凸がある。礫はプランを外れて散在するが、覆土上層を中心にして出土する。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数151点、礫総重量19.2kgであり、チャート系礫の占める比率は97%である（第613図６）。大形礫の中に、全礫と半割礫が一定の割合で含まれている。

時期は、勝坂式古段階の可能性がある。

遺物は第602図14、15が出土した。14は雲母を含む阿玉台Ⅱ式の耳状把手である。15は小形土器の口縁部である。

第68号集石土壙（第603図、第602図16～19、第613図７）

Ｋ－18区に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長径1.46m、短径0.99m、深さ0.19mである。断面形は皿状を呈し、壙底は緩く窪む。礫はほぼ上層部で出土しており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数143点、礫総重量17.0kgであり、チャート系礫の占める比率は91%である（第613図７）。典型的なパターンを示しており、大形礫の中に全礫と半割礫が一定の割合で含まれている。

時期は、勝坂式中～新段階の可能性がある。

遺物は第602図16～19が出土した。16は口縁部破片である。17は平行沈線文とジグザグ施文の鋸歯状文を施文する、18は撚糸文Ｌと思われる。

19は石鏃である。正面左脚部が根元から欠けており、右脚部は脚部の先端が僅かに欠損している。

第69号集石土壙（第603図、第602図20～26、第613図８）

Ⅰ－20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.10m、短径0.93m、深さ0.17mである。断面形は緩い弧状を呈し、壙底は丸く窪む。礫は覆土の表層から壙底までに含まれていた。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数283点、礫総重量33.5kgであり、チャート系礫の占める比率は83%である（第613図８）。どの重さでも、全礫と半礫が高い割合で含まれており、小破砕礫が少ない。

時期は、勝坂式古段階である。

遺物は第602図20～26が出土した。20、21は口縁部の区画文にキャタピラ文を施文し、20は角押文も施文する。22は断面三角形の隆帯区画に沿って３列の角押文を施文する。24は角押文の鋸歯状文や複列の角押文を施文する。25は隆帯に沿って複列の角押文を施文する。新道式段階

の土器群であろう。23は垂下する並行沈線間に交互刺突文を施文しており、勝坂式新段階の土器と思われる。

26は打製石斧で、刃部は両刃である。

第70号集石土壙（第603図、第602図27～29、第614図1）

G・H－21区に位置する。第52号住居跡と第3号溝と重複するが、住居跡の方が新しく土壙を壊している。また、溝は近世で新しい。平面形は円形と思われ、規模は長径0.66m、短径（0.34）m、深さ0.10mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。大形礫が数点まとまっていた。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数7点、礫総重量3.5kgであり、チャート系礫の占める比率は100％である（第614図1）。ほとんどが全礫か半割礫である。

時期は、勝坂式新段階と思われる。

遺物は第602図27～29が出土した。27は区画の低平隆帯脇に並行沈線を施文する。28は撚糸文Lを施文する。29は底部破片である。勝坂式新段階であろう。

第71号集石土壙（第603図、第602図30～33、第614図2）

I・J－19区に位置する。第65号住居跡と重複するが、住居跡の方が古い。平面形は円形を呈するものと思われ、規模は長径0.55m、短径（0.36）m、深さ0.15mである。断面形はたらい状を呈し、壙底は凹凸がある。礫は上層にコンパクトにまとまって出土している。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数32点、礫総重量7.9kgであり、チャート系礫の占める比率は72％である（第614図2）。いずれの重さの礫にも、全礫が含まれる。小破砕礫はほとんどない状態である。

時期は、勝坂式終末～EⅠ式期と思われる。

遺物は第602図30～33が出土した。30は口唇部内端に稜を持つ無文の口縁部である。31は浅鉢の胴部か。32は単節RLの縦走縄文である。

33は撥形を呈する打製石斧で、刃部は片刃である。

第72号集石土壙（第603図、第602図34、35、第614図3）

H－15区に位置する。平面形は円形で、長規模は径1.65m、短径1.49m、深さ0.57mである。断面形は擂鉢状を呈し、壙底は丸く窪む。芦苅場遺跡最大級の集石土壙で、壙底より少し浮いた状態で炭化物を多量に含む黒色土が堆積しており。その範囲で壙底の焼土化、さらに炭化物での黒色化が見られる。上層部では中央部に礫があまり分布せず、周縁で密に分布する傾向が見られた。礫は黒色土の上層に多く分布する。上層で中央部に礫が見られないのは、集石土壙の使用法を示しているのであろうか。壙中で火を焚いたのは明らかである。

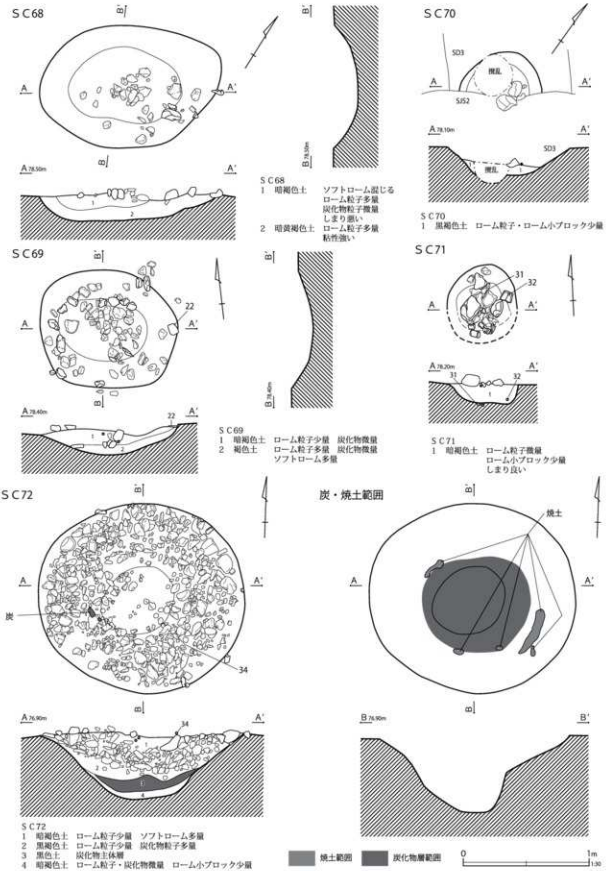
集石の礫は、礫総個数4,854点、礫総重量409.6kgであり、チャート系礫の占める比率は85％である（第614図3）。どの重さの礫にも、全礫が一定の割合で含まれている。小破砕礫が最も多いのは、他と変わらない。

時期は、勝坂式新段階期と思われるが、詳細は不明である。

遺物は第602図34、35が出土した。34は鉢か深鉢の口縁部で、口唇部を瘤状に摘まみ出している。蹙状文的な装飾であろうか。35は単節LR縄文の縦位施文である。

第73号集石土壙（第604図、第607図1～3、第614図4）

H－14・15区に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長径1.37m、短径1.06m、深さ0.10mである。断面形は皿状を呈し、壙底はやや波打



第603図　Ⅲ区集石土壙（7）

つ。礫は中央部の上層にまとまって出土した。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数191点、礫総重量13.4kgであり、チャート系礫の占める比率は77%である（第614図４）。それぞれの重さに、全礫や半割礫が一定の割合で含まれている。

時期は勝坂式の中段階と思われる。

遺物は第607図１～３が出土した。１は内湾する口縁部に角押文を施文するもので、口唇上にも刺突列を施す。雲母を含む。２は幅広の爪形文を施文するもので、雲母を含む。３は蛇行の条線文を施文する。およそ阿玉台Ⅱ式辺りに比定されようか。

第74号集石土壙（第604図、第607図４～７、第614図５）

Ｈ－15区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.38m、短径0.94m、深さ0.10mである。断面形は皿状を呈し、壙底はやや波打つ。礫はブランの中に散在した状態で出土した。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数63点、礫総重量3.8kgであり、チャート系礫の占める比率は78%である（第614図４）。比較的軽い破砕礫が集中しており、その中にも全礫や半割礫が少量含まれている。

時期は、勝坂式古段階と思われる。

遺物は第607図４～７が出土した。４は内削状口唇部が内湾する無文の口縁部で、５は隆帯脇に角押文を施文する。６は無文の胴部破片である。

７は打製石斧の基部片である。

第75号集石土壙（第604図、第607図８～12、第614図６）

Ｈ－20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.07m、短径0.94m、深さ0.24mである。断面形はたらい形を呈し、壙底はやや波打っている。礫は中央部の上層から集中して出土し、壙底までには詰まっていなかった。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数1,184点、礫総重量64.0kgであり、チャート系礫の占める比率は90%である（第614図６）。大形の礫はほとんど含まれず、小破砕礫が主体を占めている。

時期は、勝坂式古段階であろうか。

遺物は第607図８～12が出土した。８は口縁部の隆帯区画脇に角押文と三角押文を施文し、胎土に雲母を含む。９は断面三角形隆帯の楕円区画を施して角押文を沿わせ、波状沈線を施文する。襞状整形痕を残し、雲母を含む。阿玉台Ⅰb式かⅡ式に比定されよう。10は沈線文を沿わせる刻み隆帯で区画し、沈線の三叉文を施文する。勝坂式新段階の土器である。11は底部破片である。

12は短冊形を呈する打製石斧で、刃部は両刃である。

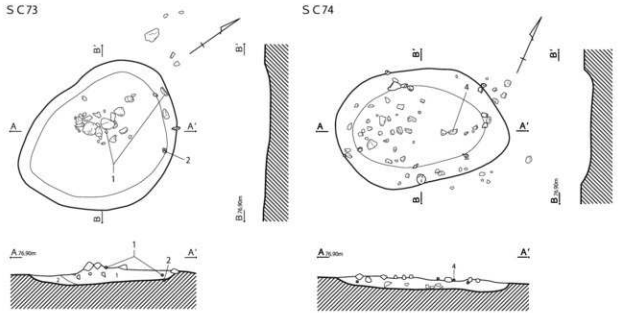
第76号集石土壙（第604図、第607図13～21、第614図７）

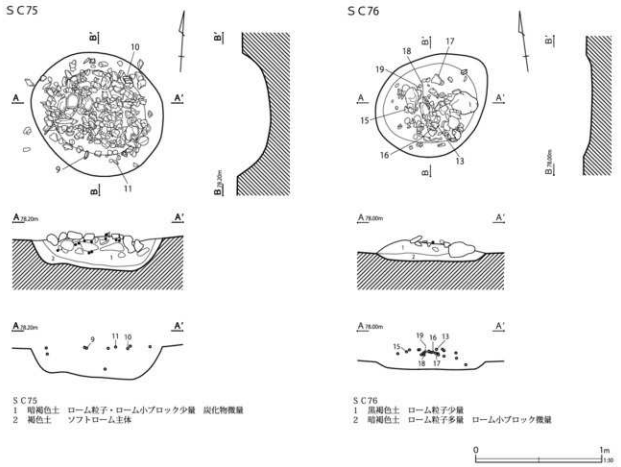
Ｉ－17区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.99m、短径0.79m、深さ0.07mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。壙底近くまで地山が下がっており、土壙の形状が不明瞭である。礫は土壙の上層部から大形礫を含めてまとまって出土している。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数154点、礫総重量12.6kgであり、チャート系礫の占める比率は86%である（第614図７）。小形の破砕礫を中心とするが、大形礫や中形礫に全礫が少量含まれる。

時期は、勝坂式中段階と思われる。

遺物は第607図13～21が出土した。13、14、16、17は櫛歯状工具によるキャタピラ文状の押引文を施文し、三角押文や刺突文列を沿わせている。15は口縁部にキャタピラ文を施文し、三角押文を沿わせている。18は平行沈線で胴部を区





第604図 Ⅲ区集石土壙（8）

画し、雲母を含む。19は隆帯脇にキャタピラ文と三角押文を施文し、雲母を含む。20、21は隆帯脇に幅広の爪形文を施文し、20は波状沈線を沿わせている。以上は新道式から藤内の古段階にかけて比定されるものと思われる。

第77号集石土壙（第605図、第607図22～27、第614図8）

H－19区に位置する。平面形は不整楕円形で、規模は長径1.39m、短径1.18m、深さ0.20mである。断面形は緩い弧状を呈し、壙底はやや窪む。礫はほぼ上層から出土しており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数1,122点、礫総重量56.0kgであり、チャート系礫の占める比率は93%である（第614図8）。大形礫に若干の全礫が含まれるが、大半は破砕礫で、特に小形の破砕礫が主体を占めている。

時期は、勝坂式の中～新段階であろうか。

遺物は第607図22～27が出土した。22は口縁部の隆帯区画に爪形文を沿わせ、23は口唇部直下に押引刺突文を施文する。24は爪形文を施文し、26は断面三角形隆帯でモチーフを描いている。26は雲母を含む。以上は藤内式辺りに比定されよう。25、27は刻み隆帯で区画し、沈線を沿わせている。勝坂式新段階であろう。

第78号集石土壙（第605図、第607図28、29、第615図1）

H－19区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.53m、短径1.12m、深さ0.24mである。断面形は皿状を呈し、壙底は緩く窪む。礫の多くは上層から出土しているが、壙底より少し浮いて大きな礫が下部から出土している。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数304点、礫総重量17.5kgであり、チャート系礫の占める比率は87%である（第615図1）。大形礫には全礫が若干含まれるが、大半は破砕された小礫である。

時期は、勝坂式新段階と思われる。

遺物は第607図28、29が出土した。28は刻み隆帯で区画して沈線を沿わせ、爪形文を施文して鋸歯状沈線を施文する。29は単節ＲＬ縄文の縦位施文である。井戸尻式に比定されよう。

第79号集石土壙（第605図、第608図1～13、第615図2）

H－19区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径2.14m、短径1.61m、深さ0.29mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。礫は上層から壙底近くまで含まれており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

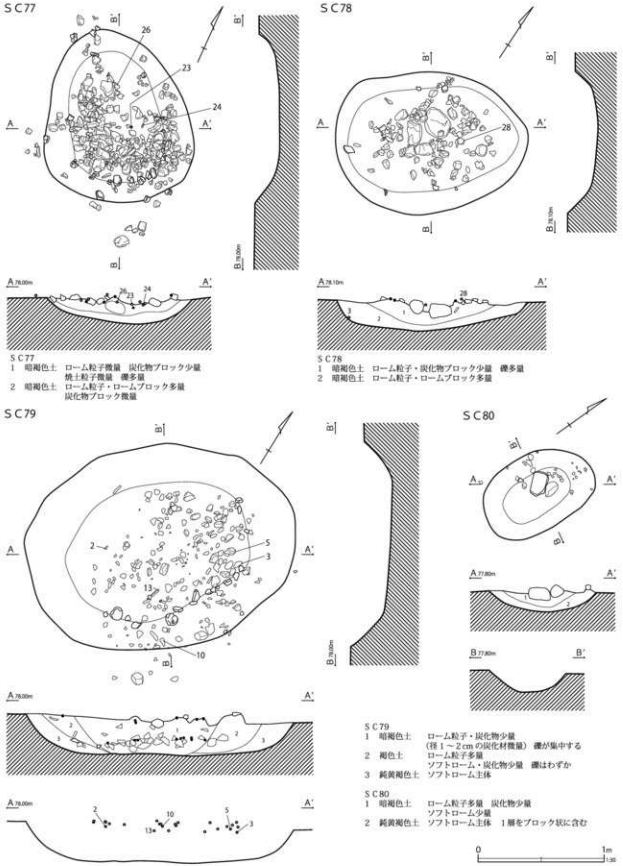
集石の礫は、礫総個数1,186点、礫総重量81.5kgであり、チャート系礫の占める比率は90%である（第615図2）。それぞれの重さの礫に、全礫が若干含まれている。

時期は、勝坂式新段階と考えられる。

遺物は第608図1～13が出土した。1は頸部に沈線の重円文を繋げるモチーフを施文し、爪形文と波状沈線を施文する。2も同様に爪形文の脇に波状沈線を施文する。6～8、11は刻み隆帯で区画し、沈線を沿わせるもので、7は隆帯上に交互刺突文を施文する。11は胴部に単節ＲＬ縄文を縦位施文する。3は内湾する無文の口縁である。9は地文のO段多条ＲＬの縦走縄文に磨消縄文で円形文を施文する。10は単節ＲＬ地文上に隆帯懸垂文を垂下する。12は深鉢の底部破片で、13は無文浅鉢の口縁部破片である。

第80号集石土壙（第605図、第607図30、31、第615図3）

H－19区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.92m、短径0.60m、深さ0.16mである。断面形は緩い弧状を呈し、壙底は丸く窪む。大形



第605図 Ⅲ区集石土壙（9）

礫２点が据えられたような状態で出土し、周囲から小破砕礫が出土している。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数100点、礫総重量5.4kgであり、チャート系礫の占める比率は96％である（第615図３）。大形礫は全礫で、他は破砕された小礫である。

時期は、勝坂式古段階と思われる。

遺物は第607図30、31が出土した。30、31とも角押文を施文するもので、狢沢式か新道式期に比定される。

第81号集石土壙（第606図、第607図32～35、第615図４）

Ｉ－19区に位置する。第62号住居跡、第63号住居跡と重複し、住居跡の方が新しく、また、第132号土壙と重複し、土壙の方が古い。切り合いによりほぼ原形を留めず、平面形及び規模は不明であるが、深さは0.20mである比較的大形礫がまとまって出土した壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数48点、礫総重量17.0kgであり、チャート系礫の占める比率は92％である（第615図４）。大形礫は全礫と半割礫が半数以上を占める。

時期は、勝坂式古段階と思われる。

遺物は第607図32～35が出土した。32は口縁部に複列の三角押文を施文し、34は隆帯脇に太細２列の角押文を施文する。35は襞状整形痕と折れ線状波状文を施文する。32、35は繊維を含み、阿玉台Ｉｂ式からⅡ式辺りに比定されよう。

第82号集石土壙（第606図、第608図14～21、第615図５）

Ｈ－19・20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.67m、短径1.56m、深さ0.35mである。断面形は緩い弧状を呈し、壙底は丸く窪む。覆土全体に炭化物を多量に含む黒色土が堆積し、多量の礫が黒色土中から出土している。壙底は丸く焼土化しており、その周囲に炭が付着して黒色化している。壙中で火を焚いているのは明らかである。

集石の礫は、礫総個数3,026点、礫総重量219.4kgであり、チャート系礫の占める比率は94％である（第615図５）。それぞれの重さの中に全礫が若干含まれ、多量の小破砕礫が主体を占める。

時期は、勝坂式の古段階であろう。

遺物は第608図14～21が出土した。14は口縁部に蛇行隆起線の垂下する棒状貼付文が付き、口縁部の楕円区画に２列の角押文を施文している。15は口縁部区画と充填文の三角押文を施文する。16は頸部に楕円区画文を施し、キャタピラ文を沿わせている。キャタピラ文の脇には角押文を施文する。新道式段階であろう。17は隆帯上に押引状の刻みを施し、18は柄低隆帯で文様を施文する。19は浅鉢の口縁部であろうか。20はＬＲ縄文を浅く施文している。21は深鉢の底部である。勝坂式新段階の土器群と思われる。

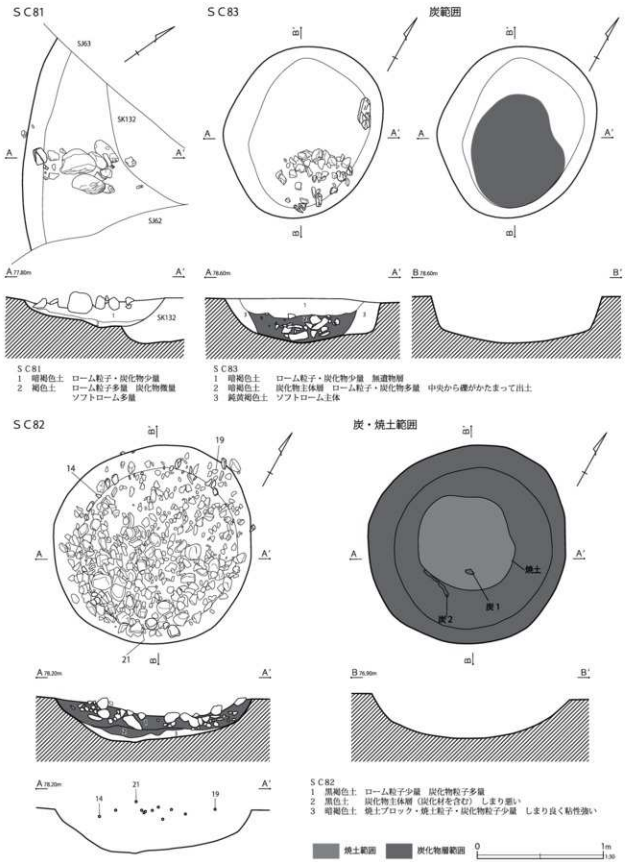
第83号集石土壙（第606図、第607図36～42、第615図６）

Ｊ－20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.40m、短径1.17m、深さ0.35mである。断面形はたらい形を呈し、壙底はやや凹凸がある。礫はプランの南側に寄った地点に集中している。覆土の最下層に炭化物を多量に含む黒色土が堆積しており、礫はその中から出土している。壙中で異を焚いているのは明らかである。

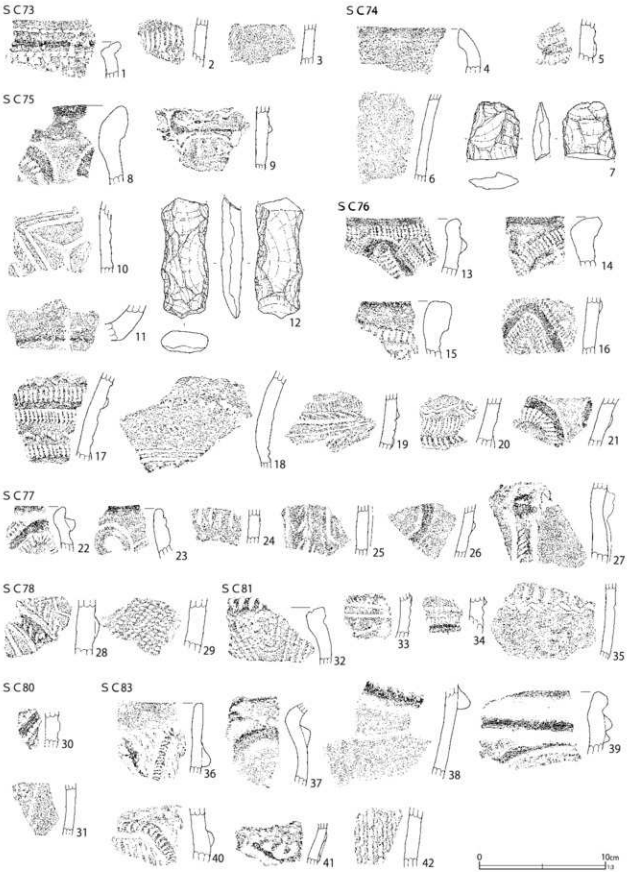
集石の礫は、礫総個数740点、礫総重量55.7kgであり、チャート系礫の占める比率は92％である（第615図６）。大形礫の中に、全礫が若干含まれている。

時期は、加曽利ＥⅡ式期と考えられる。

遺物は第607図36～42が出土した。36、40は



第606図　Ⅲ区集石土壙（10）



第607図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（6）

刻み隆帯でモチーフを描く勝坂式新段階の土器群で、鉢もしくは浅鉢と思われる37、38も同時期であろう。39は加曽利E式キャリパー形深鉢土器で、撚糸文L地文上に隆帯で渦巻文を描くものと思われる。4は曽利式系の籠目文系土器である。42は撚糸文Lを施文する胴部破片である。以上加曽利EⅡ式を中心とした土器群である。

第84号集石土壙（第609図、第608図22、第615図7）

J－19区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.74m、短径0.69m、深さ0.20mである。断面形はボウル状を呈し、壙底は丸く窪む。壙底近くに大形礫があり、その周辺に小礫が集まっている。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数63点、礫総重量13.5kgであり、チャート系礫の占める比率は84%である（第615図7）。大形礫のみならず、中・小形礫にも全礫が含まれている。

時期は、零細な資料からは判断が難しいが、出土した土器からは勝坂式古段階と考えられる。

遺物は第608図22が出土した。22は角押文を2列施文している。

第85号集石土壙（第609図、第608図23、24、第615図8）

H－20区に位置する。平面形は不整形で、規模は長径0.86m、短径0.83m、深さ0.22mである。断面形は緩い弧状を呈し、壙底は緩く窪む。上層部に礫が集中していた。壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数30点、礫総重量2.6kgであり、チャート系礫の占める比率は97%である（第615図8）。大形礫や小形礫に、全礫が一定の割合で含まれていた。

時期は勝坂式中段階であろう。

遺物は第608図23、24、である。23は口唇部が外折し、円形刺突文を施し、口唇部内端には刺突列を巡らす。口縁部は角押文で区画し、円形刺突文を充填する。狢沢式であろうか。24は三角押文の区画内に波状沈線を施文する。新道式の新しい段階であろうか。

第86号集石土壙（第609図、第608図25～28、第610図1～7、第616図1）

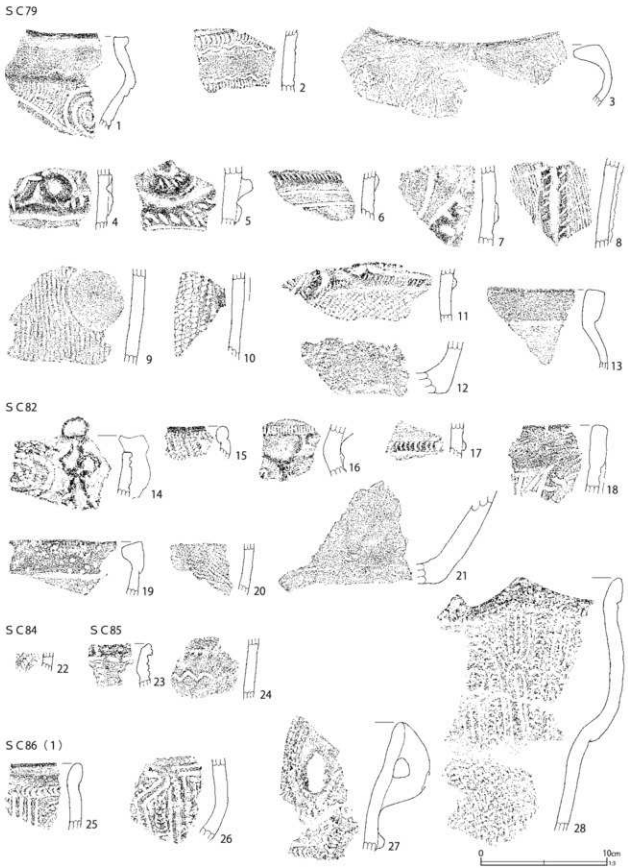
J－19・20区に位置する。平面形は不整形で、規模は長径1.26m、短径0.90m、深さ0.19mである。断面形は皿状を呈し、壙底は平坦である。礫は中央部に集中して出土しており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数60点、礫総重量15.4kgであり、チャート系礫の占める比率は87%である（第616図1）。大形礫の割合が多く、その中でも全礫、半割礫が約半数を占めている。

時期は、勝坂式中段階から新段階にかけての時期と思われる。

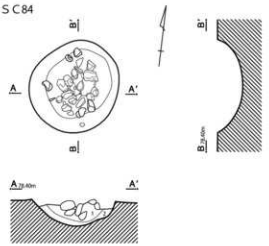
遺物は第608図25～28、第610図1～7が出土した。第608図25～28は半截竹管状工具の平行沈線で区画文や爪形文を施文する土器群である。27は橋状把手に沿って刺突列を施文し、隆帯区画の脇には蓮華状文を施文している。28は波状口縁を呈する深鉢で、頸部の括れが強く、口縁部に平行沈線で上下対の「U」字文や、爪形文で区画文やモチーフを施文する。胴部には単節LR縄文を横位施文する。26は同一個体である。第610図1は楕円区画文に沈線を充填施文するもので、胴部に0段多条RL縄文を横位施文する。2は1の底部破片と思われる。3は底部である。4、5は浅鉢の同一個体で、口縁部が外折し、胴部に低平隆帯で渦巻文を繋げるモチーフを施文している。藤内式の新しい段階か井戸尻式の古段階にかけての土器群と思われる。

第610図6、7はともに打製石斧の刃部片で、6が片刃、7が両刃である。7は短冊形を呈すると思われる。



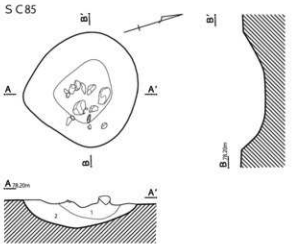
第608図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（7）

SC84



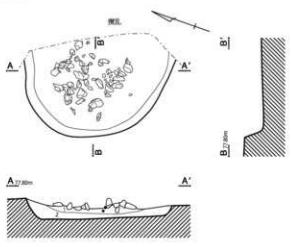
SC84
1　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物・ソフトローム少量
2　鈍黄褐色土　ソフトローム主体

SC85



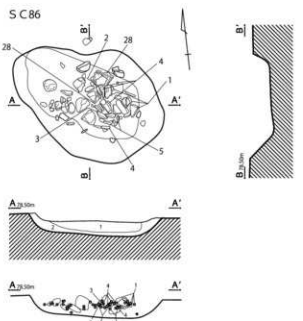
SC85
1　褐色土　　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトロームをブロック状に多量
2　鈍黄褐色土　ソフトローム主体　炭化物少量

SC87



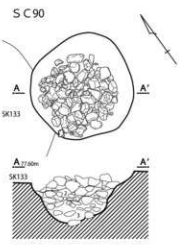
SC87
1　暗褐色土　ローム粒子少量
2　褐色土　　ローム粒子やや多量　しまり良い

SC86



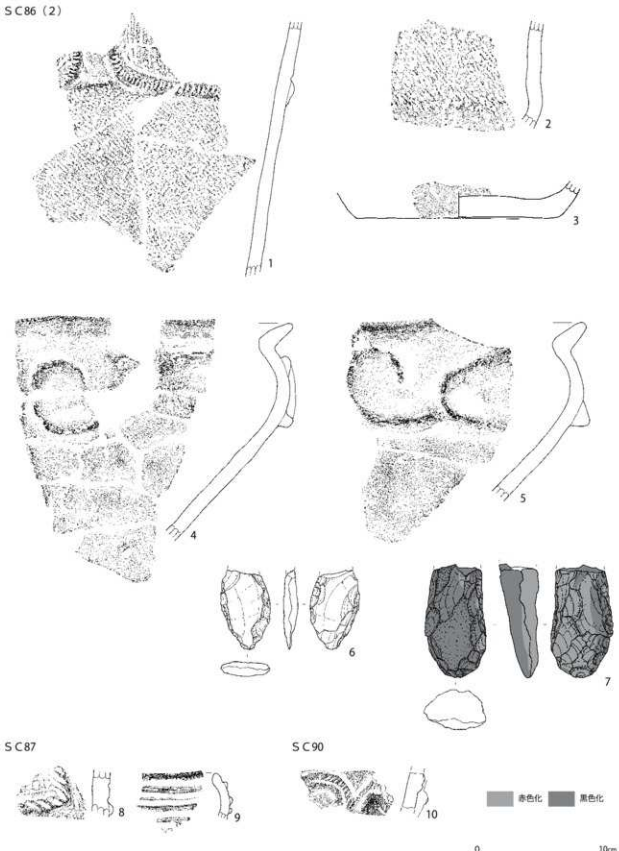
SC86
1　暗褐色土　ローム粒子少量　しまり悪い
2　褐色土　　ローム粒子やや多量　しまり良く粘性強い

SC90

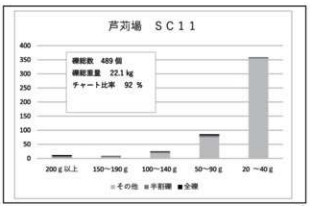


SC90
1　暗褐色土　c・f粒少量含む　やや粘性あり　しまりやや弱い　60～100mmの亜角～亜円礫大量
　ほぼ被熱赤化している　礫の密度高く相接し、上面は盛り上がり凸状なす
2　暗褐色土　1層より黒味あり明調　c・f粒少量含む　粘性強くしまり強い　1・3層より礫やや少なく
　土質分多い印象　また1・3層に比べ破砕礫が多い
3　暗褐色土　2層に似るが黄褐色土含み若干黄味あり 80～150mmの中や大振りな亜角～亜円礫多い
　礫の密度高く破砕礫少ない　被熱赤化な礫がほとんど　粘性あり　しまりやや弱い

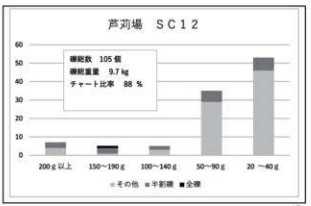
第609図　Ⅲ区集石土壙（11）



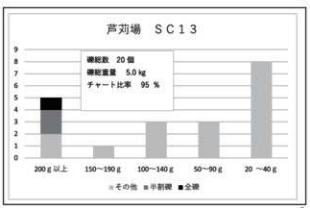
第610図　Ⅲ区集石土壙出土遺物（8）



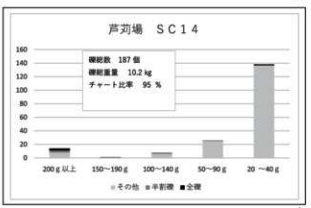
1



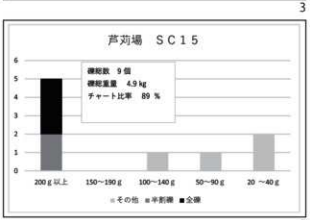
2



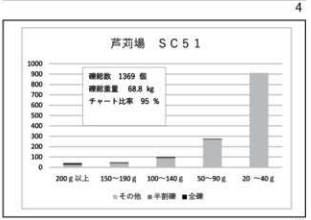
3



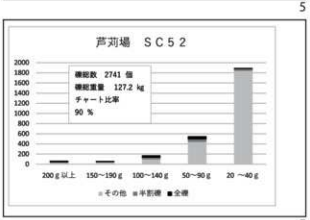
4



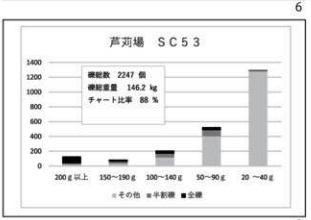
5



6

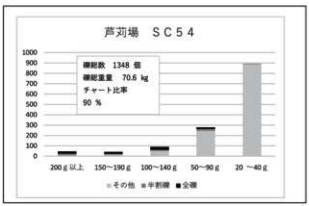


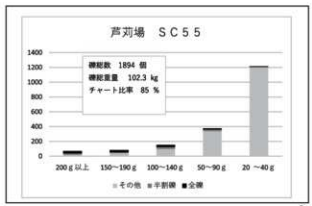
7

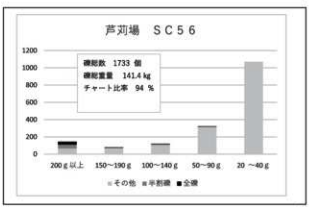


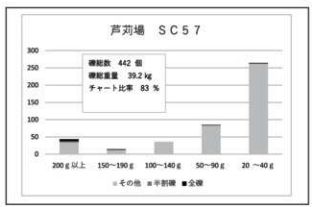
8

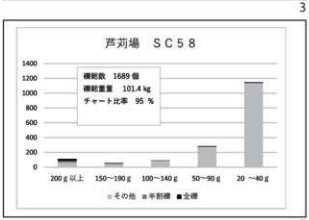
第611図　Ⅲ区集石土壙分析図（1）

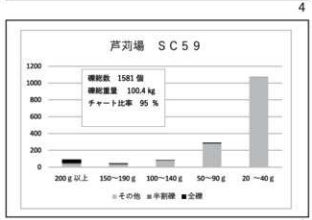


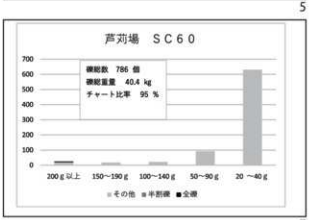


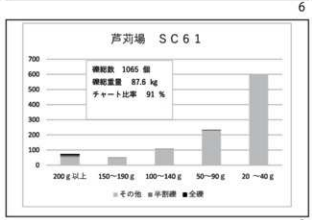




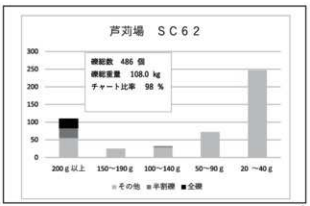




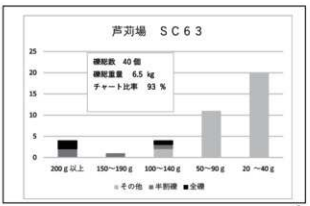




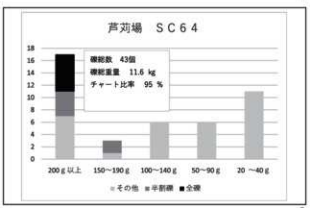
第612図　Ⅲ区集石土壙分析図（２）



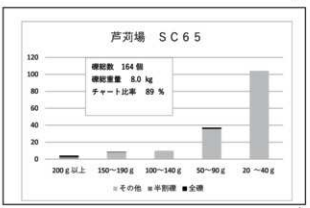
1



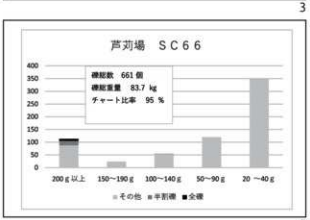
2



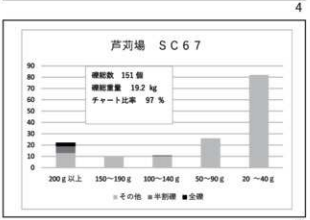
3



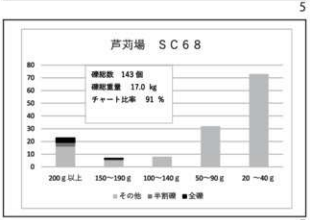
4



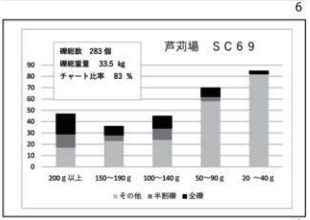
5



6

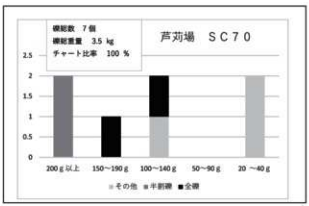


7

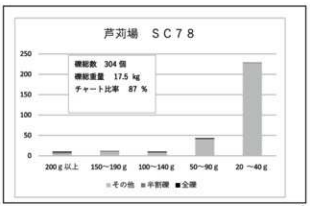


8

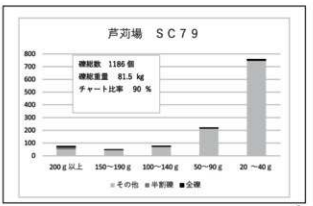
第613図　Ⅲ区集石土壌分析図（3）



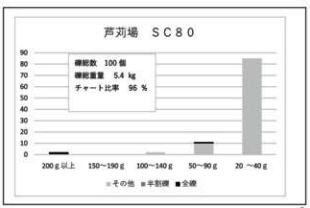
第614図　Ⅲ区集石土壙分析図（4）



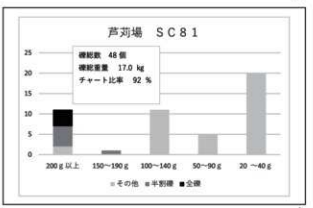
1



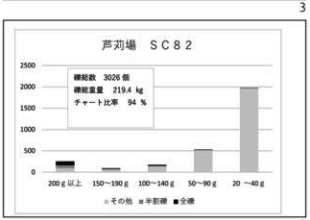
2



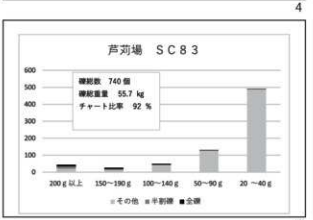
3



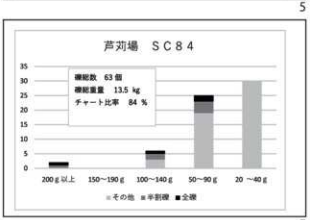
4



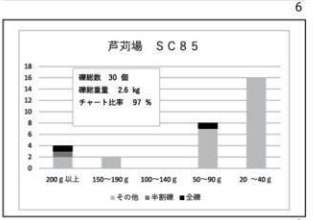
5



6

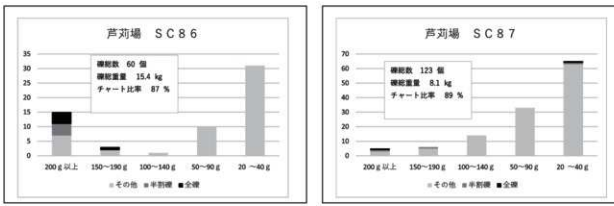


7



8

第615図　Ⅲ区集石土壙分析図（５）



第616図　Ⅲ区集石土壙分析図（６）

第87号集石土壙（第609図、第610図８、９、第616図２）

Ⅰ－17区に位置する。平面形は不明で、規模は長径1.18m、短径（0.78）m、深さ0.16mである。断面形は皿状で、壙底は平坦である。礫はほぼ中央から出土しており、壙中で火を焚いた痕跡は確認されなかった。

集石の礫は、礫総個数123点、礫総重量8.1kgであり、チャート系礫の占める比率は89％である（第616図２）。小破砕礫が主体を占めるが、その中にも全礫が若干含まれている。

時期は、加曽利ＥⅡ式段階であろうか。

遺物は第610図８、９が出土した。８は勝坂式終末期の土器で、低隆帯で区画を施し、隆帯の縁に脇に刻みを施している。区画の沈線に沿って刺突文を施している。９は口縁部が内湾して開く加曽利ＥⅡ式キャリパー形深鉢であろう。口縁部の内湾度が緩く、口唇部もあまり肥厚しない。丸味を帯びた隆帯で口縁部を区画し、地文単節ＲＬ縄文上に２本隆帯で渦巻文を連結するモチーフを描くものと思われる。隆帯は、竹管状工具の内面で整形を施し、丸味を帯びている。口縁部の内湾度などから、加曽利ＥⅡ式の古段階の土器と判断した。

ｃ）Ⅳ区

第90号集石土壙（第609図、第610図10）

Ｌ－12区に位置する。第132号土壙と一部重複するが、新旧関係は不明である。平面形は円形で、規模は長径0.83m、短径0.82m、深さ0.43mである。断面形は擂鉢状で、壙底は丸く窪む。壙底まで焼けた礫が密集して詰まっていた。

遺物は第610図10が出土した。10は刻み隆帯で区画文を施し、隆帯脇に沈線を沿わせている。勝坂式の新段階と思われる。

第224表　Ⅱ区集石土壙出土石器観察表（第569・572・576・577・580・582・584図）

図番号	出土位置	器　種	分　類	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考
569-23	SC 7	打製石斧	Ⅲ2①イ	頁岩	10.7	5.8	2.9	189.8	
572-14	SC 8	打製石斧	Ⅳ①イ	ホルンフェルス	11.6	5.9	2.0	143.5	
576-11	SC20	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	9.8	6.1	2.1	143.1	
12		打製石斧	Ⅲ2①イ	頁岩	6.7	3.8	2.1	49.7	
18	SC21	磨石	Ⅱ1-3①イ	安山岩	13.1	9.5	4.0	735.4	
577-17	SC26	石鏃	Ⅰ2②	チャート	[1.8]	[1.8]	0.4	1.2	
580-16	SC31	打製石斧	Ⅱ2②イ	砂岩	[6.7]	5.3	1.8	74.9	
17		敲石	Ⅲ1-3②イ	安山岩	[10.0]	[4.9]	[3.8]	207.8	磨製石斧からの再利用
582-29	SC42	スタンプ形石器	①ア	砂岩	12.6	11.0	4.8	905.0	表裏面全部赤色・黒色化
584-6	SC40	打製石斧	Ⅲ2②イ	安山岩	10.5	5.8	2.0	96.4	

第225表　Ⅲ区集石土壙出土石器観察表（第595・601・602・607・610図）

図番号	出土位置	器　種	分　類	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考
595-1	SC56	打製石斧	Ⅱ2②イ	砂岩	[9.4]	4.5	2.5	150.4	
2		打製石斧	Ⅱ2②イ	砂岩	[10.4]	4.3	2.0	102.3	
3		打製石斧	Ⅲ2①イ	砂岩	7.6	5.7	1.8	75.1	
4		磨石	Ⅱ2-3①イ	砂岩	14.2	[6.1]	4.9	562.1	
5		石皿	Ⅳ②イ	緑泥片岩	[9.2]	[5.2]	[2.3]	125.4	
6	SC57	打製石斧	Ⅱ2①ア	ホルンフェルス	[10.7]	4.3	2.0	107.3	
7		磨石	Ⅱ1②イ	閃緑岩	[10.6]	7.4	4.7	469.9	
8		石皿	Ⅳ②イ	緑泥片岩	[11.8]	[11.7]	[1.7]	236.8	
601-1	SC58	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[6.1]	[4.3]	[2.7]	87.2	
2		打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	7.9	3.4	1.4	51.5	
3		磨石	Ⅰ1②ア	砂岩	[4.9]	[7.6]	[4.5]	208.8	
10	SC60	打製石斧	Ⅲ2①イ	頁岩	9.2	6.3	1.9	114.7	
11		台石	②ア	閃緑岩	[21.5]	15.2	[10.2]	5040.0	一部赤色・黒色化
15	SC61	磨石	Ⅳ①ア	安山岩	12.9	[7.8]	[5.2]	481.8	表面一部赤色化
16		石皿	Ⅳ②ア	安山岩	[7.1]	[12.5]	7.3	874.2	
602-19	SC68	石鏃	Ⅰ2②	黒曜石	[2.0]	[1.4]	0.5	1.2	
26	SC69	打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	9.0	5.5	1.1	68.4	
33	SC71	打製石斧	Ⅲ1①イ	ホルンフェルス	10.4	5.7	2.5	150.1	
607-7	SC74	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[4.6]	[4.2]	1.4	29.0	
12	SC75	打製石斧	Ⅱ2②イ	砂岩	[9.6]	3.7	1.7	74.5	
610-6	SC86	打製石斧	Ⅰ②イ	ホルンフェルス	[6.3]	3.9	1.2	32.0	
7		打製石斧	Ⅱ2②ア	ホルンフェルス	[9.0]	4.9	[3.2]	146.8	表裏面全部赤色・黒色化

（3）土壙

縄文時代の土壙は、覆土や出土遺物から確実に縄文時代と認定されるものがⅡ区で７基、Ⅲ区で５基の合計12基、縄文土器や石器を出土する縄文時代の可能性があるものがⅡ区で22基、Ⅲ区で26基、Ⅳ区で１基の合計49基で、総計61基が検出された。住居跡の数からすると、確実な縄文時代の土壙が少ないのが特徴である。

a）Ⅱ区

Ⅱ区での確実な縄文時代の土壙は、第16、36、38、41、48、60、61号土壙の７基である。可能性のある土壙は22基で、合計29基である。

第16号土壙（第618図、第617図１、２、第620図１～４）

Ｓ・Ｒ－10区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.20m、短径1.17m、深さ0.82mである。遺物は第617図１、２、第620図１～４が出土した。第617図１は条線地文上に沈線の懸垂文を、２は隆帯の懸垂文を垂下する。第620図１は勝坂式土器、２は撚糸文Ｌを施文し、刻み隆帯で区画する。３は連弧文土器の胴部である。４は乳棒状磨製石斧が欠損した後、欠損部を使用面として再利用した敲石である。正面及び両側面に比べ、裏面の研磨は粗く、研磨以前に施された製作に伴う敲打が認められる。本土壙は加曽利ＥⅡ式期の所産と思われる。

第36号土壙（第618図、第617図３、第620図１）

Ｓ－11区に位置する。第４号住居跡の覆土に掘り込まれた土壙である。平面形は楕円形で、規模は長径0.54m、短径0.29m、深さ（0.27）mである。第617図３は曽利式系の変形した重弧文土器である。胴部を並行沈線で縦位８単位に区画し、上半部に重弧文、下半部に綾杉沈線文施文する。第620図１は単節ＲＬ縄文と小波状沈線文を施文する。本土壙は加曽利ＥⅢ式期の所産と思われる。

第41号土壙（第618図、第620図６～８）

Ｒ－11・12区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.00m、短径0.95m、深さ0.57mである。遺物は第620図６～８が出土した。６、８は勝坂式土器、７は連弧文土器である。本土壙は加曽利ＥⅡ式期の所産と思われる。

第48号土壙（第618図、第620図９～14）

Ｑ－10区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.05m、短径0.95m、深さ0.77mである。遺物は第620図９～12が出土した。９～11は勝坂式土器で、12は加曽利ＥⅠ式土器である。13は打製石斧の基部片である。14は撥形を呈する打製石斧の刃部片で、刃部が両刃である。本土壙は加曽利ＥⅠ式期の所産と思われる。

第19号土壙（第618図、第620図９～12）

Ｐ－９区に位置する。第16号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は不整形で、規模は長径1.65m、短径1.03m、深さ0.40mである。遺物は第620図９～12が出土した。15は勝坂式土器、16～18は加曽利Ｅ式土器で、16、17は連弧文系土器である。加曽利ＥⅡ式辺りに比定されよう。

19は撥形を呈する打製石斧である。正面及び裏面の風化が著しく、詳細は不明であるが、幅広の横長剥片を素材として用い、正面に主要剥離面が残っていると思われる。20も撥形を呈する打製石斧である。著しく風化している。刃部はともに両刃である。

第29号土壙（第618図、第621図１）

Ｏ・Ｐ－８区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.10m、短径0.82m、深さ0.15mである。第621図１が出土した。１は撚糸文Ｌを施

文する。加曽利E式土器であろう。

第30号土壙（第618図、第621図２）

Ｒ－６区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.02m、短径0.92m、深さ0.27mである。第621図２が出土した。２は勝坂式新段階の口縁部である。

第32号土壙（第618図、第621図３）

Ｑ－７区に位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長径0.97m、短径0.92m、深さ0.22mである。第621図３が出土した。３は磨消懸垂文を有する加曽利ＥⅢ式土器である。

第33号土壙（第618図、第621図４）

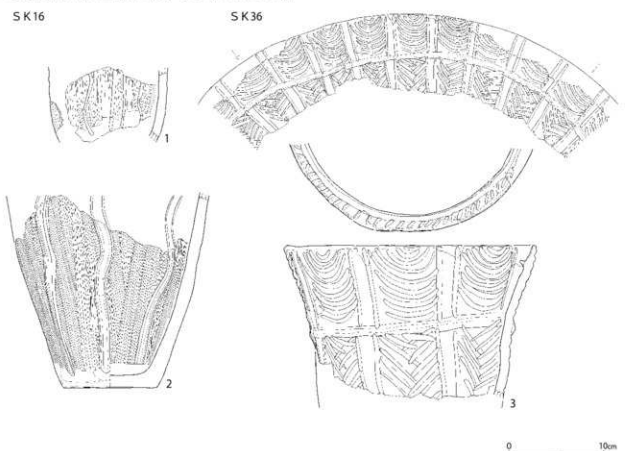
Ｓ－９区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.97m、短径0.90m、深さ0.31mである。第621図４の勝坂式土器が出土した。２本の隆帯を垂下する。

第34号土壙（第618図、第621図５～８）

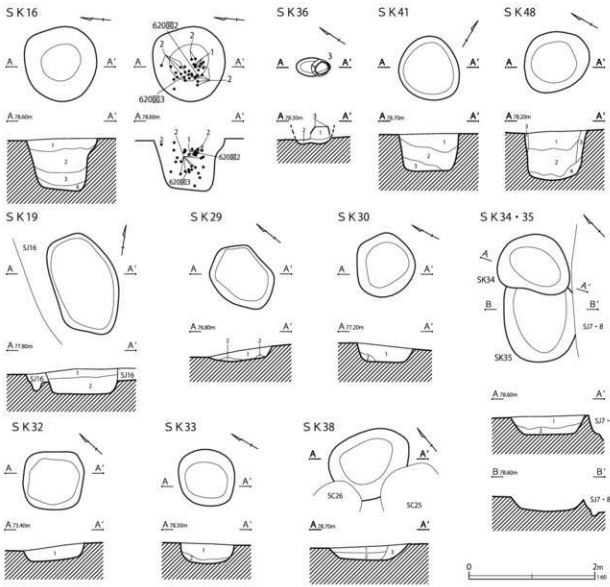
Ｓ－９区に位置する。第35号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長径1.18m、短径（0.97）m、深さ0.28mである。第621図５のキャタピラ文を施文する勝坂式古段階、６～８は新段階の土器であろう。

第35号土壙（第618図、第621図９～11）

Ｓ－９区に位置する。第34号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面楕円形で、長径（1.25）m、短径（1.08）m、深さ0.22mである。第621図９は勝坂式古段階、10は加曽利ＥⅠ式、11は底部である。



第617図　Ⅱ区土壙出土遺物（１）



SK16
1 暗茶褐色土　ソフトローム土混じる　ローム微粒子少量
　炭化物粒子・焼土粒子微量
2 暗茶褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック微量
　炭化物粒子・焼土粒子少量
3 暗茶褐色土　黒味帯びる　ローム粒子多量
　ロームブロック・炭化物粒子・焼土粒子少量
4 暗黄褐色土　ソフトローム土主体（暗茶褐色土混じり）ローム粒子少量
　ローム小ブロック中少多量

SK36
1 暗褐色土　ローム土をまばらに混じ、ローム粒子も多量（伏せ瓶内部）
2 暗茶褐色土　暗褐色土とローム土との混土層　粘性やや強い

SK41
1 暗灰褐色土　ローム粒子多量　炭微粒子少量
2 暗茶褐色土　1層よりローム粒子多量　ローム小ブロック少量
3 黒褐色土　炭化物少量のみで比較的均質　しまり良く粘性強い

SK48
1 暗茶褐色土　炭化物多量　ローム粒子多量でザラザラの触感
2 黒褐色土　ローム土微量　炭化物1層より少ない　粘性強い
3 黄褐色土　ローム土主体　壁の崩落に起因
　しまり非常に悪く粘性強い
4 暗灰褐色土　2層をベースにローム土多量

SK19
1 暗茶褐色土　ローム微粒子・炭化物粒子少量のみの均質な層
2 黒褐色土　ローム粒子多量　攪乱著しい　粘性強い

SK29
1 黒褐色土　黒色土と茶褐土との混土層で粒子黙含まず　粘性強い
2 黄茶褐色土　1層をベースにローム粒子多量

SK30
1 黒褐色土　ローム微粒子多量　しまり悪く粘性強い
2 黄褐色土　ローム土を主体に黒褐色土を混じる

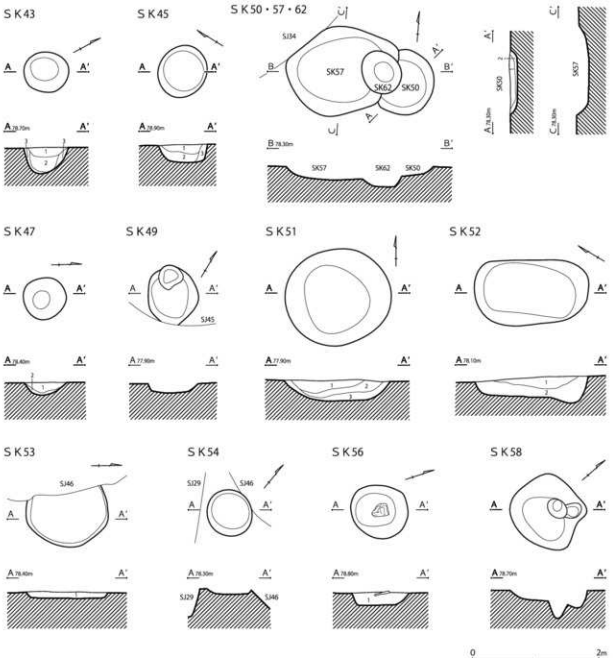
SK32
1 茶褐色土　ローム土との混土層（粒子黙は含まず）粘性強い

SK33
1 黒褐色土　ローム粒子少量　遺物出土
2 暗茶褐色土　1層をベースにローム土を混じる　粘性強い

SK34
1 暗褐色土　ローム粒子少量　しまり悪い
2 暗黄褐色土　1層をベースに多量のローム土を混じる　粘性強い

SK38
1 黒褐色土　ローム粒子少量　焼土粒子微量　炭化物多量　粘性なし
2 暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量
　焼土粒子微量　炭化物少量
3 黄褐色土　ソフトローム主体　粘性強い

第618図　Ⅱ区土壙（1）



SK43
1 灰褐色土　炭微粒子微量のみで比較的均質
2 暗灰褐色土　1層に近似するがやや暗くローム土多量
3 黄褐色土　ローム土主体　粘性強い

SK45
1 黒褐色土　炭微粒子少量含のみの均質　しまり非常に良い
2 暗灰褐色土　1層をベースに多量のローム土を含む
3 黄褐色土　ローム土主体　壁の崩落に起因

SK47
1 黒褐色土　部分的にローム小ブロックを混入　しまり非常に悪い
2 灰褐色土　茶褐色土とロームの混土層（粒子類は含まず均質）
粘性非常に強い

SK50
1 黒褐色土　ローム粒子少量　しまり強い
2 暗黄褐色土　ローム粒子多量　礫を含む　粘性強い

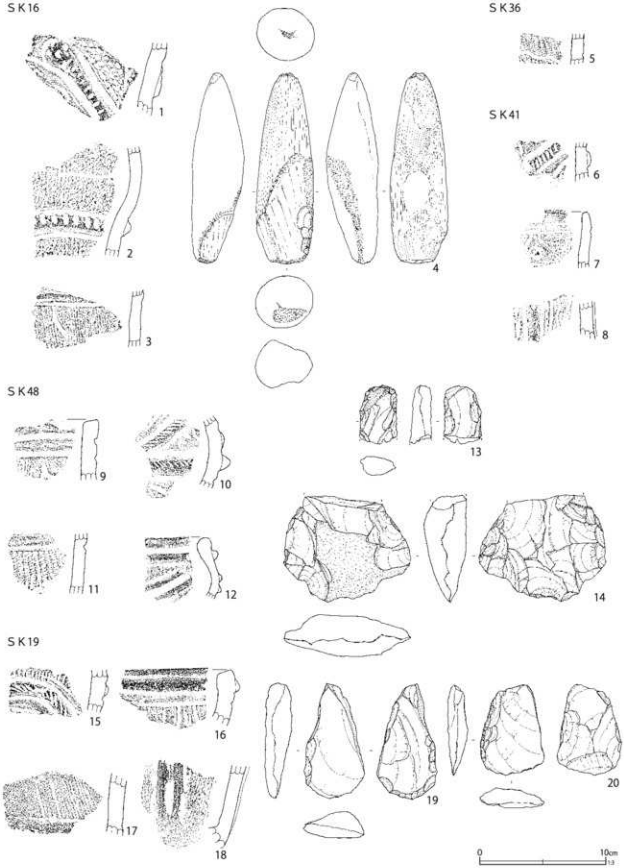
SK51
1 暗褐色土　ローム粒子少量　黒み強い
2 暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量　ローム小ブロック微量
3 褐色土　ソフトローム多量

SK52
1 黒褐色土　ローム粒子少量　しまり強い
2 暗黄褐色土　ローム粒子多量　礫を含む　粘性強い

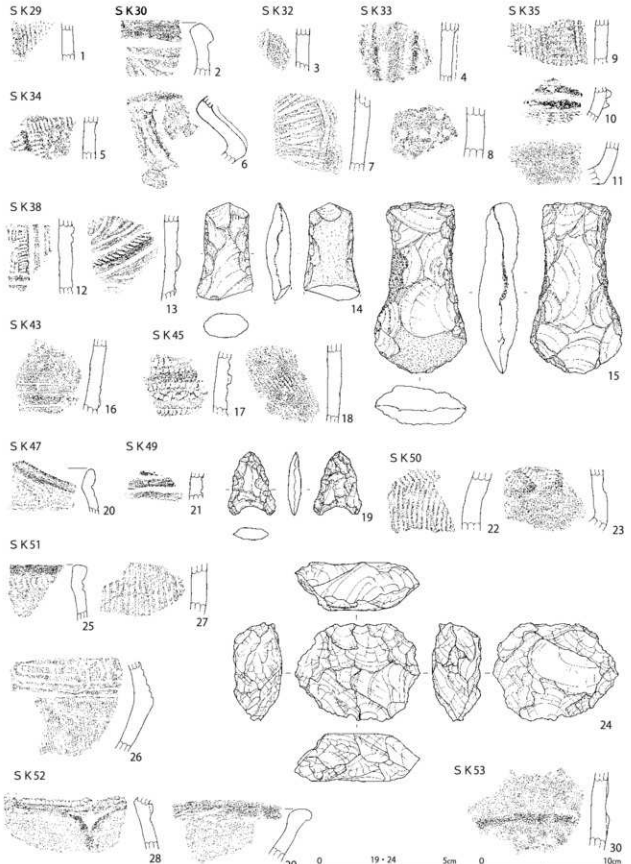
SK53
1 暗褐色土　ローム粒子多量　ソフトロームを混入

SK56
1 暗灰褐色土　茶褐色度土とローム土の混土層　しまりやや良い

第619図　Ⅱ区土壙（2）



第620図　Ⅱ区土壙出土遺物（2）



第621図　Ⅱ区土壙出土遺物（3）

第38号土壙（第618図、第621図12～15）

Ｐ－12区に位置する。第25、26集石土壙と重複するが、本遺構の方が古い。平面形は楕円形で、規模は長径1.33m、短径1.06m、深さ0.23mである。第621図12、13、は勝坂式中段階から新段階にかけての土器である。14、15は撥形の打製石斧で、14は刃部を欠損する。

第43号土壙（第619図、第621図16）

Ｒ－11区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.72m、短径0.63m、深さ0.40mである。第621図16は三角形状隆帯脇に平行沈線を施文する、阿玉台式系の土器と思われる。

第45号土壙（第619図、第621図17～19）

Ｒ－11区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.84m、短径0.74m、深さ0.26mである。第621図17は角押文を施文する勝坂式古段階の土器である。18は単節ＲＬ縄文を横位施文する。19は完形の石鏃である。

第47号土壙（第619図、第621図20）

Ｐ・Ｑ－10区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.68m、短径0.65m、深さ0.21mである。第621図20は雲母を含む阿玉台Ⅱ式土器である。

第49号土壙（第619図、第621図21）

Ｏ－11区に位置する。第45号住居跡と重複するが、住居跡の方が古い。平面形は楕円形で、規模は長径0.95、短径0.77m、深さ0.15mである。第621図21は平行沈線を施文する勝坂式と思われる。

第50号土壙（第619図、第621図22～24）

Ｏ－11区に位置する。第57、62号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は円形で、規模は長径1.00m、短径（0.75）m、深さ0.12mである。第621図22、23は勝坂式土器で、22はＯ段多条ＲＬの縦走縄文を、23はキャタピラ文を施文する。24は石核である。各方向から剥離が行われている。

第51号土壙（第619図、第621図25～27）

Ｎ－11区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.68m、短径1.52m、深さ0.32mである。第621図25は口縁部区画に爪形文、26は平行沈線でモチーフを描き、27は撚糸文Ｌを施文する。

第52号土壙（第619図、第621図28、29）

Ｎ－12区に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長径1.80m、短径1.04m、深さ0.42mである。第621図28は角押文を施文する阿玉台式系土器でⅠｂ式かⅡ式であろう。29は浅鉢の口縁部か。

第53号土壙（第619図、第621図30）

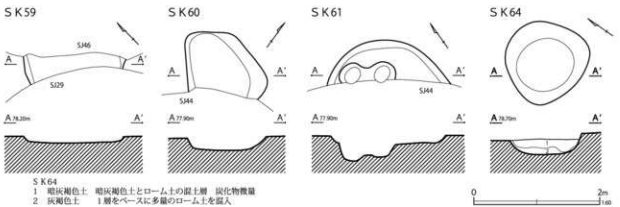
Ｏ・Ｐ－11区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.30m、短径（0.85）m、深さ0.10mである。第621図30は隆帯を２本施文し、畿状整形痕を残す。

第54号土壙（第619図、第623図１）

Ｐ－11区に位置する。平面形は円形で、規模は直径0.70m、深さ0.10mである。第623図１は隆帯渦巻文を施文する勝坂式新段階の土器であろう。

第56号土壙（第619図、第623図２～４）

Ｐ－13区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.91m、短径0.85m、深さ0.20mである。第623図２、３は地文に撚糸文を施文する加曽利ＥⅠ式土器か、その直前の土器であろう。４は石皿で、正面及び裏面に多数の凹痕を有する。



第622図 Ⅱ区土壙（3）

第57号土壙（第619図、第623図８～10）

Ｏ－11区に位置する。第34号住居跡、第50、62号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長径（1.75）m、短径1.40m、深さ0.20mである。体部に付く抽象文、または人面の装飾の剥落とも思われ、刻み隆帯で円孔の周囲を縁取っており、片目が切れ長になっていることから人面の可能性がある。中央部から円形刺突文列が垂下する。９は隆帯の区画文脇にキャタピラ文と三角押文を施文する新道式である。10は撥形を呈する打製石斧で、基部を欠く。刃部は両刃である。

第58号土壙（第619図、第623図11～16）

Ｐ－13区に位置する。平面形は不整形で、規模は長径1.22m、短径1.18m、深さ0.45mである。第623図11、14、15加曽利ＥⅢ式、12、13は綾杉沈線を施文する曽利Ⅳ式系の深鉢である。16は打製石斧で、基部と刃部を欠損する。

第59号土壙（第622図）

Ｐ－11区に位置する。第29、46号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は不明で、規模は長径1.60m、短径（0.40）m、深さ0.10mである。遺物は出土していないが、縄文時代の覆土を有する。

第60号土壙（第622図、第623図５）

Ｎ－11区に位置する。第44号住居跡と重複するが本遺構の方が古い。平面不整形で、長径1.2m、短径（0.90）m、深さ0.20mである。第623図５は勝坂式終末期の土器で、０段多条ＲＬの縦走縄文を施文する。

第61号土壙（第622図）

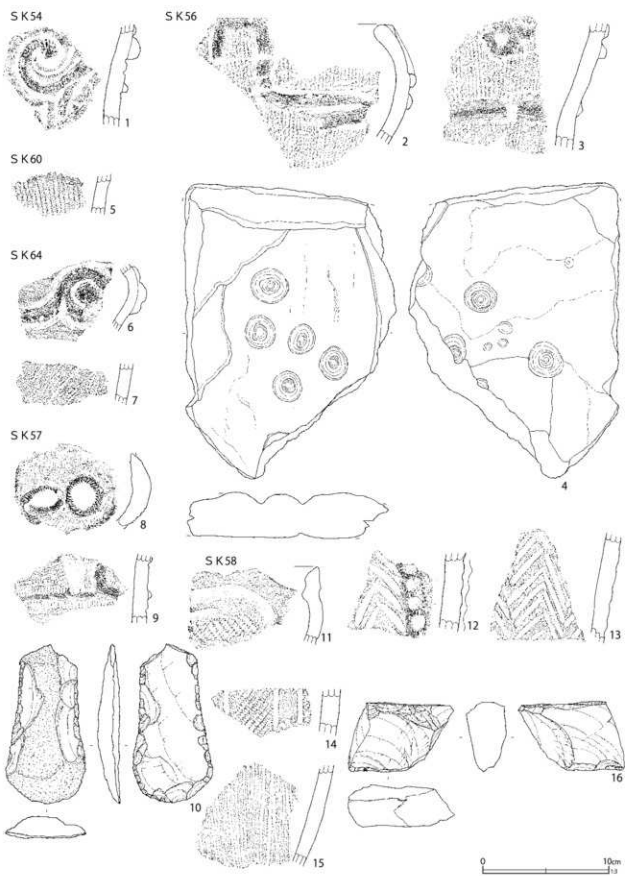
Ｎ－11区に位置する。第44号住居跡と重複するが、本遺構の方が古い。平面形は不整形で、規模は長径1.95m、短径（0.63）m、深さ0.40mである。遺物は出土していないが、縄文時代の覆土を有し、切り合い関係からも判断される。

第62号土壙（第619図）

Ｏ－11区に位置する。第50、57号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。第平面楕円形で、長径0.70m、短径0.60m、深さ（0.15）mである。

第64号土壙（第622図、第623図６、７）

Ｒ－11区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.34m、短径1.30m、深さ0.28mである。第623図６は有文浅鉢の肩部で、隆帯の渦巻文を施文する。７は単節ＲＬ縄文の縦位施文である。



第623図　Ⅱ区土壙出土遺物（4）

b）Ⅲ区

Ⅲ区での確実な縄文時代の土壙は、第103、104、114、124、132号土壙の５基である。可能性のある土壙は26基で、合計31基である。

第103号土壙（第625図）

G－23区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.53m、短径1.02m、深さ0.86mである。楕円形で、壙底が船底状を呈し、自然堆積状態の覆土であることから、陥し穴的な性格も考えられる。遺物は出土していない。

第104号土壙（第625図、第626図１～３）

D－24・25区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径3.10m、短径2.75m、深さ0.20mである。覆土の違いで土壙としたが、小竪穴状遺構とも思われる。掘り込みが浅く、壙底は平坦である。遺物は第626図１～３が出土した。１は半截竹管状工具の平行沈線で区画やモチーフを描くが、部分的に押引の結節沈線となっている。雲母を含み、阿玉台Ⅱ式辺りに比定されようか。２は加曽利ＥⅠ式の口縁部破片で、撚糸文Ｌ地文上に隆帯の渦巻文を施文するものと思われる。ＥⅠ式でも後半段階であろうか。３は石皿の破片で、皿部が一部残存する。皿部の周縁と裏面に凹痕を有し、特に裏面には密集している。

第114号土壙（第625図、第624図１～４、第626図４～18）

Ⅰ－21区に位置する。第54号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。第54号住居跡の中央部で、炉を壊す形で覆土中層あたりから掘り込んでいる土壙である。平面形は円形で、規模は直径1.55m、深さ0.65mである。

遺物は第624図１～４、第626図４～18が出土した。第624図１は円筒形の器形で、約半身と底部を欠損する。口唇部に細かな刻み隆帯で捻りを加えた突起を配し、口縁部を無文帯として、胴部を横位多帯に分帯している。口縁部をⅠ帯とすると、底部までのⅥ帯構成となる。区画やモチーフは半截竹管状工具の内面施文による半肉彫状沈線を使用し、貼付の隆帯上には押引爪形文状の細かな刻みを施している。上からⅡ帯目の幅広文様帯には、Ⅰ帯の突起下に巻き上がる隆帯の渦巻文を施文し、余白をパネル状区画文で埋めている。パネル状区画文は沈線脇に爪形文を施文し、爪形文を縁取るように径の小さな半截竹管状工具を刺突してできる半円文を繋げた連弧文状の小波状文を施文している。大変細かな細工である。Ⅲ帯目には横長の長方形区画を施し、爪形文を区画に沿わせ、横位の連弧文状の小波状文を横位３列に充填施文している。幅狭なⅣ帯目は無文帯とせず、単節ＲＬ縄文を横位施文する。Ⅴ帯目は鋸歯状文を施文し、沈線脇に爪形文と縁取る小波状文を施文する。Ⅵ帯目にはⅢ帯目と同様な横長の長方形区画を施している。胎土に雲母を含み、器面は丁寧に成形されている。

２は胴部破片からの復元である口縁部の開くキャリパー形深鉢のパネル文土器で、胴部上半に縦長の区画文を有し、足の長い三叉文を施文する。区画の縁辺には細かな刻みを、全周に施している。底部付近は横長横位の区画文を施し、鋭い斜行沈線を施している。

３は口縁部の開く器形と思われ、頸部に縦位沈線を施文し、胴部に幅狭な鋸歯状区画による重三角文帯を構成する。三角区画の頂点には２連の刻みを施し、三角区画文の１箇所が菱形区画となっている。区画に沿って緩い波状沈線を施文する。胴部下端の区画隆帯にはキャタピラ文を施文する。

４は胴部で括れ、上半部と下半部が膨れる器形と思われる。上半部には大きな弧状の区画文を施し、隆帯に沿って角押文と三角押文を施文する。捻りを施した円形貼付文で弧状区画の波底部と胴部区画線を連携している。胴部には鋸歯状沈線２列を施文し、下半部に楕円区文を施しているようである。

第626図４～18は破片資料で、４～８は胎土に雲母を含む阿玉台式系土器で、４は口縁部区画に角押文を施文し、５、６は爪形文、７、８は２列の角押文を施文する。阿玉台Ⅱ式辺りに比定されよう。９は低平隆帯の蛇行文と２列の角押文を施文し、10は複列角押文の円形モチーフに沿って、円形刺突文列を施文する。11は隆帯に沿って幅広爪形文を施文するが、工具の形状から三角押文状に見える。13は隆帯脇にキャタピラ文と胴部に三角押文の鋸歯状文を施文する。12は口縁部に菱形文を構成し、括れた胴部に鋸歯状沈線を施文する。胴部の地文に単節ＲＬ縄文を横位施文する。14、15は半截竹管状工具の平行沈線で区画するパネル文土器である。方形状区画文内には単節ＲＬ縄文を施文し、区画周縁に刻みを施している。16は隆帯脇に平行沈線を施文するもので、部分的に結節状となる。９、15、16は雲母を少量含む。17、18は底部破片である。18には網代痕が残る。以上、土器群は阿玉台Ⅱ式並行期の新道式新段階から藤内式古段階の様相を有するものと判断される。

19は石錐の錐部先端である。正面左側縁が鋸歯状で、断面形が凸レンズ状を呈しており、石鏃の先端部の可能性もある。

第124号土壙（第625図、第629図１～３）

Ｉ・Ｊ－19区に位置する。第64号住居跡と重複するが、住居跡の方が新しい。平面形は楕円形で、規模は長径0.93m、短径0.76m、深さ0.52mである。

遺物は第629図１～３が出土した。１、２は半截竹管状工具の平行沈線で施文するもので、１は楕円区画内に集合沈線を施文する。２は隆帯脇に平行沈線の３本沈線を施文する。３は刻み隆帯でモチーフを描く。勝坂式新段階でもやや古い様相を有する土器群である。

第132号土壙（第625図）

Ｉ－19区に位置する。第62、63号住居跡、第81号集石土壙と重複するが、いずれも本遺構より新しい。平面形は不明で、規模も不明である。遺物は出土していないが、切り合い関係等から判断した。

第21号土壙（第625図、第629図４～８）

Ｌ－20区に位置する。第15号集石土壙と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は不整形で、規模は長径1.40m、短径1.05m、深さ0.50mである。第629図４は勝坂式、５、６は加曽利ＥⅡ式土器である。６は口縁部に沈線の渦巻文と連結する三角単位文を構成する。７は撚糸文Ｌを施文する。８は石鏃で、先端及び正面左側が欠損している。左側縁の欠損面には縦溝状の剥離が認められ、刺突による欠損の可能性がある。

第22号土壙（第625図、第629図９）

Ｌ－20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.94m、短径0.76m、深さ0.29mである。第629図９は、口縁部に隆帯の渦巻文と区画文が一体となったモチーフを施文する加曽利ＥⅢ式土器である。

第23号土壙（第627図、第629図10、11）

Ｌ－20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.08m、短径0.67m、深さ0.17mである。第629図10、11は加曽利Ｅ式深鉢形土器の胴部破片で、余地糸文Ｌを施文する。加曽利ＥⅠ式の新しい段階か。

第24号土壙（第627図、第629図12）

Ｌ－20区に位置する。平面形は円形で、規模は長径0.94m、短径0.91m、深さ0.42mである。第629図12は内湾する無文の口縁部で、浅鉢の口縁部であろう。

第25号土壙（第627図、第629図13）

K・L－20区に位置する。平面楕円形で、長径0.81m、短径0.69m、深さ0.23mである。第629図13は口縁部破片で、角押文を施文する勝坂式古段階の土器である。

第26号土壙（第627図、第629図14）

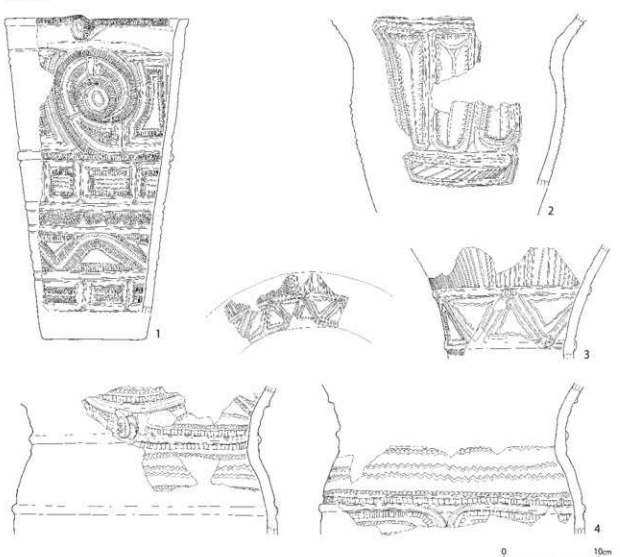
H－24区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.93m、短径0.80m、深さ0.30mである。第629図14は勝坂式土器の底部付近で、楕円の区画隆帯が剥落しており、区画内に縦位の沈線文を施文する。

第27号土壙（第627図、第629図15）

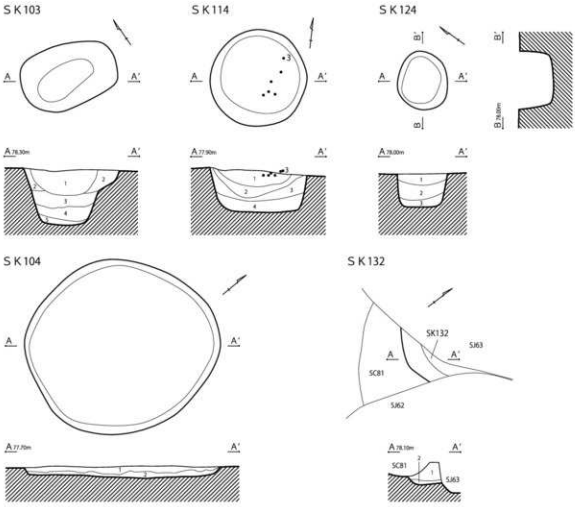
I－22・23区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.38m、短径1.18m、深さ0.30mである。第629図15は胴部に条線文を施文する鉢形土器と思われる。

第101号土壙（第627図、第629図16）

E－24区に位置する。平面形は長楕円形で、規模は長径1.40m、短径0.82m、深さ0.15mである。



第624図　Ⅲ区土壙出土遺物（1）



S K 103
1 暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量　ローム小ブロック微量
2 褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量
ソフトローム多量
3 褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量
ソフトロームブロック状に混入
4 暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量
5 暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量
しまり非常に良い

S K 104
1 暗褐色土　ローム粒子・炭化物・ローム小ブロック少量
2 暗褐色土　炭化物少量　ローム小ブロック多量

S K 114
1 暗褐色土　ローム粒子・炭化物多量　焼土粒子少量
ローム小ブロック微量
2 暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量
焼土粒子微量
3 褐色土　ローム粒子多量　ローム小ブロック少量　炭化物微量
ソフトローム多量
4 鈍黄褐色土　ソフトロームとロームブロックで構成される
ローム粒子・ローム小ブロック多量　炭化物微量

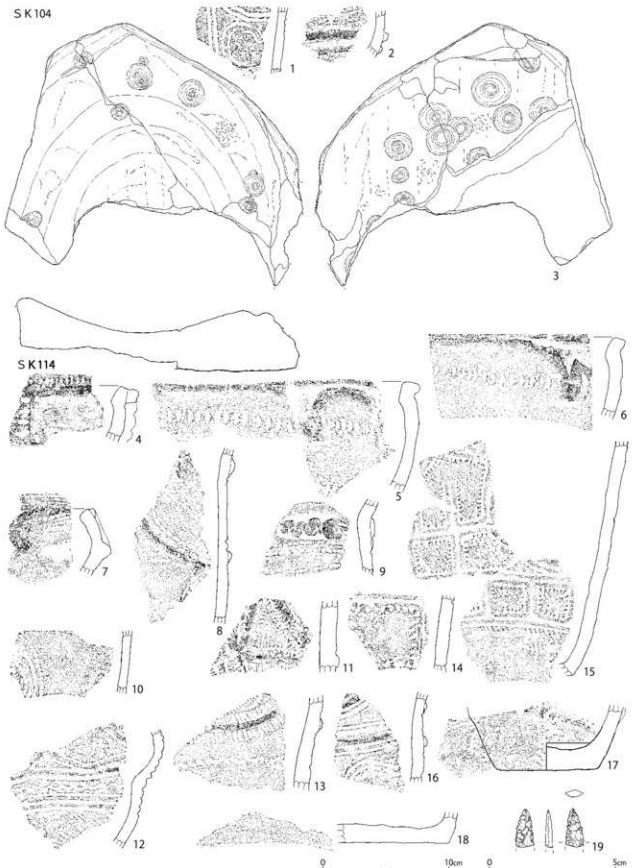
S K 124
1 暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量
2 暗褐色土　ローム粒子少量　炭化物微量
3 暗褐色土　ローム小ブロック少量

S K 132
1 暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量　ソフトロームを斑に混入
2 暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量　ローム小ブロック多量

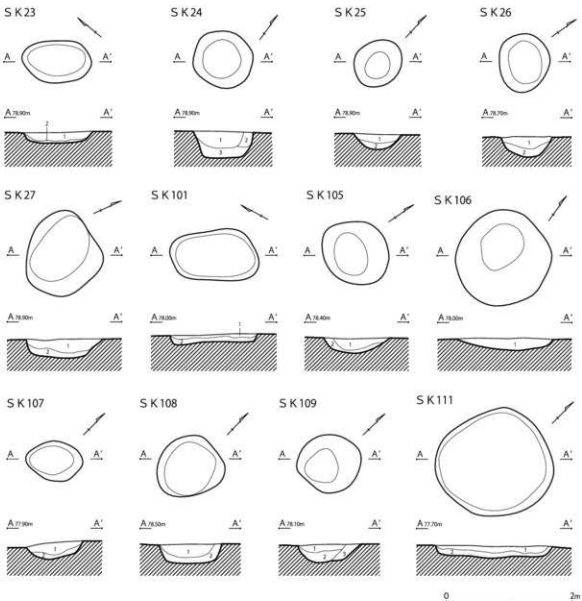
S K 21
1 黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック少量
2 黒褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム混入
3 黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量

S K 22
1 暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
2 暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量

第625図　Ⅲ区土壙（1）



第626図　Ⅲ区土壙出土遺物（2）



SK23
1　黒褐色土　ローム粒子・ブロック状ソフトローム多量
2　鈍黄褐色土　ソフトローム主体

SK24
1　黒褐色土　ローム粒子・暗褐色土小ブロック・炭化物少量
2　暗褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量
3　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック多量　ソフトローム混入

SK25
1　暗褐色土　ローム粒子多量　ソフトローム斑状に多量
2　鈍黄褐色土　ソフトローム主体

SK26
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック多量

SK27
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物・ローム小ブロック少量
2　暗褐色土　ロームブロック多量　炭化物少量

SK101
1　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物微量
2　褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック多量
　ソフトローム多量

SK105
1　暗褐色土　ローム粒子・炭化物少量
2　褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック多量

SK106
1　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック少量

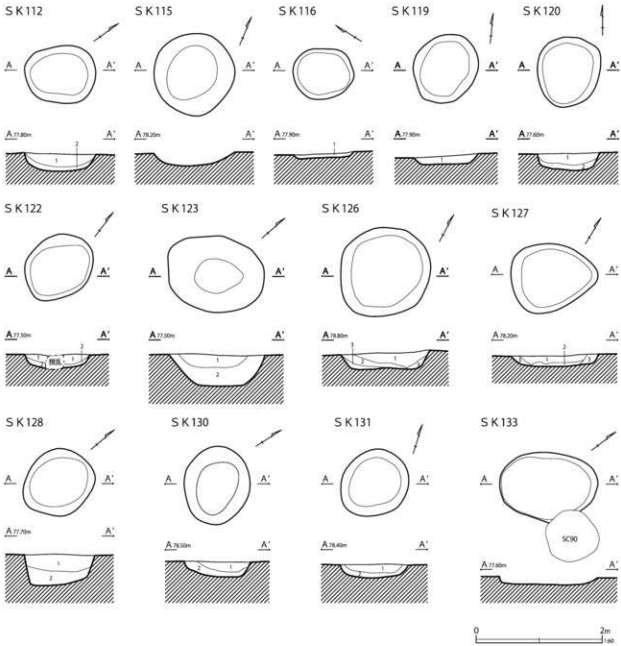
SK107
1　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトローム小ブロック微量
2　褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量

SK108
1　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトローム小ブロック微量
2　褐色土　ローム粒子・ソフトローム多量

SK109
1　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック微量
2　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量
3　褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトローム多量

SK111
1　暗褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ローム小ブロック微量
2　褐色土　ローム粒子多量　炭化物少量　ソフトローム多量

第627図　Ⅲ区土壙（2）



SK112
1　暗褐色土　　ローム粒子・炭化物少量
2　褐色土　　ローム粒子少量　ローム小ブロック多量

SK116
1　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック少量

SK119
1　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物少量
　　ソフトロームをブロック状に混入

SK120
1　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物・ローム小ブロック微量
2　にぶい黄褐色土　ソフトローム主体

SK122
1　暗褐色土　　ローム粒子少量　ローム小ブロック微量
2　黄褐色土　　ローム粒子を主体　しまり良く粘性強い

SK123
1　暗褐色土　　ローム粒子・ローム小ブロック少量
2　暗褐色土　　ローム粒子多量　ローム小ブロック微量　粘性強い

SK126
1　暗褐色土　　ローム粒子・炭化物少量　ソフトローム斑に含む
2　暗褐色土　　ローム粒子・ソフトローム多量
3　鈍黄褐色土　ローム主体

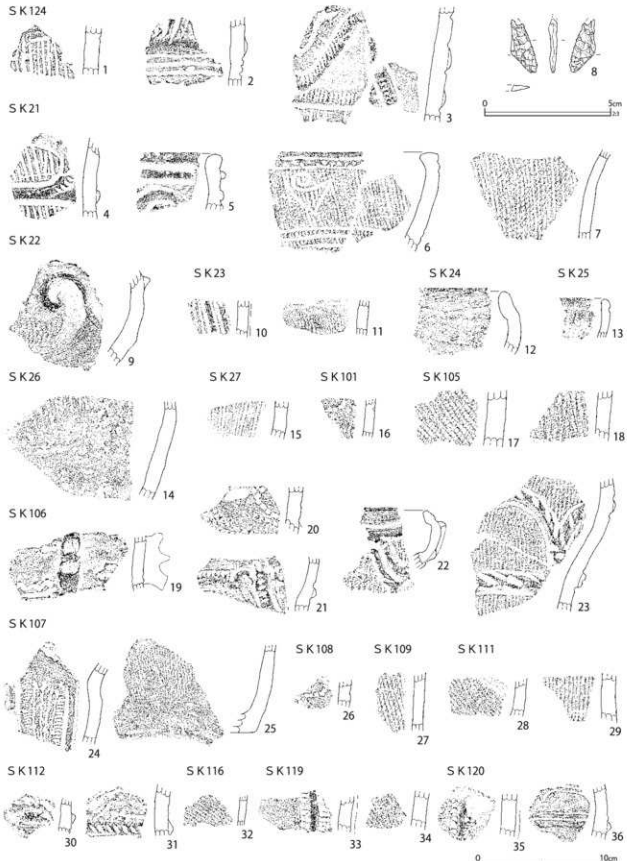
SK127
1　暗褐色土　　ローム粒子・炭化物少量　焼土粒子微量
2　暗褐色土　　ローム粒子多量　炭化物微量　ローム小ブロック多量
3　褐色土　　炭化物少量　ソフトローム多量

SK128
1　暗褐色土　　ローム粒子・炭化物少量
2　鈍黄褐色土　ソフトローム主体　ローム小ブロック多量

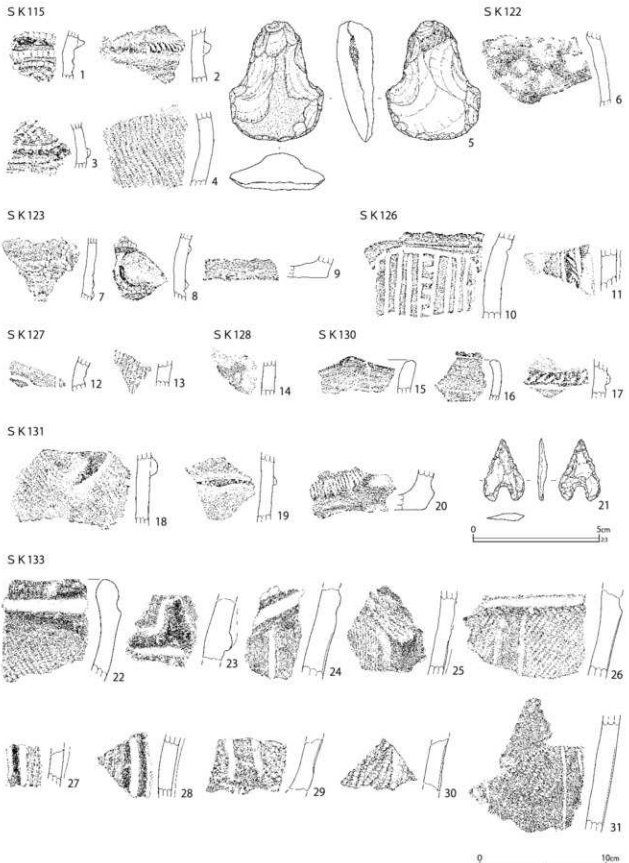
SK130
1　暗褐色土　　ローム粒子少量　しまり良い
2　暗黄褐色土　褐色土を含む　しまり良く粘性強い

SK131
1　暗褐色土　　ローム粒子少量　しまり良い
2　暗黄褐色土　褐色土ブロックを含む　しまり良く粘性強い

第628図　Ⅲ区土壙（3）



第629図　Ⅲ区土壙出土遺物（3）



第630図　Ⅲ区土壙出土遺物（4）・Ⅳ区土壙出土遺物

第629図16は胎土に雲母を含み、押引文を施文する阿玉台Ⅱ式土器であろう。

第105号土壙（第627図、第629図17、18）

G・H－22区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.15m、短径0.98m、深さ0.22mである。第629図17、18はO段多条RLの縦走縄文風施文である。

第106号土壙（第627図、第629図19～23）

F－21区に位置する。平面形は円形で、規模は直径1.50m、深さ0.20mである。第629図19、20は雲母を含む阿玉台Ⅱ式、21は勝坂式新段階、22は加曽利EⅠ式、23は勝坂式終末段階の土器である。

第107号土壙（第627図、第629図24、25）

F－21区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.90m、短径0.63m、深さ0.25mである。第629図24は藤内式の新しい段階、撚糸文Lを施文する底部である。

第108号土壙（第627図、第629図26）

H－23区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.07m、短径0.95m、深さ0.31mである。第629図26は角押文を施文する勝坂式古段階の胴部破片である。

第109号土壙（第627図、第629図27）

G－21区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.10m、短径0.93m、深さ0.28mである。第629図27は撚糸文Lを施文する胴部である。

第111号土壙（第627図、第629図28、29）

F－21区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.85m、短径1.70m、深さ0.18mである。第629図28は細かな単節RL縄文の横位施文、29は撚糸文Lを施文する胴部破片である。

第112号土壙（第628図、第629図30、31）

F－20・21区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.12m、短径0.90m、深さ0.26mである。第629図30、31は刻み隆帯で区画等を行う勝坂式土器である。

第115号土壙（第628図、第630図1～5）

H－19区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.30m、短径1.27m、深さ0.22mである。第630図1、3は角押文を施文する勝坂式古段階、2は刻み隆帯を施文する新段階、4もO段多条RLの縦走縄文を施文する新段階であろう。

5は粗粒の石材を用いた大形のスクレイパーで、上部の両側縁に抉りが施されている。

第116号土壙（第628図、第629図32）

Ⅰ－18区に位置する。第58号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は長径0.95m、短径0.80m、深さ0.05mである。第629図32は太細の単節LR縄文の縦位施文である。

第119号土壙（第628図、第629図33、34）

G－19区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.15m、短径0.98m、深さ0.13mである。第629図33は垂下する隆帯脇にキャタピラ文と三角押文を施文する勝坂式古段階の土器である。34はO段多条RL縄文の横位施文か、O段多条Lの撚糸文である。

第120号土壙（第628図、第629図35、36）

F・G－19区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.10m、短径1.00m、深さ0.25mである。第629図35は隆帯脇に三角押文を施文する勝坂古段階の土器、36は平行結節沈線を施文し、雲母

を含む阿玉台Ⅱ式であろう。

第122号土壙（第628図、第630図６）

Ｈ－16区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.18m、短径0.96m、深さ0.21mである。第630図６は胴部の張る無文の深鉢である。

第123号土壙（第628図、第630図７～９）

Ｈ－17区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.52m、短径1.20m、深さ0.49mである。第630図７、８は角押文を施文する阿玉台式系の土器で、阿玉台Ⅰｂ式かⅡ式相当であろう。９はその底部である。

第126号土壙（第628図、第630図10、11）

Ｊ－21区に位置する。平面形は円形で、規模は長径1.53m、短径1.40m、深さ0.25mである。第630図10、11勝坂式土器で新段階の土器群である。10は隆帯の楕円区画内に沈線を施文する。11は沈線を伴う刻み隆帯を垂下する。

第127号土壙（第628図、第630図12、13）

Ｈ－19区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.37m、短径1.07m、深さ0.17mである。第630図12は無地文上に沈線と逆「U」字状沈線を垂下する。13は撚糸文Ｌを施文する。

第128号土壙（第628図、第630図14）

Ｇ－18区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.18m、短径1.02m、深さ0.50mである。第630図15は無文の胴部破片である。

第130号土壙（第628図、第630図15～17）

Ｉ－20区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.22m、短径1.04m、深さ0.23mである。第630図15～17は勝坂式土器で、15、16は無文の口縁部である。15は波状口縁を呈する。17は刻み隆帯で区画する胴部破片である。

第131号土壙（第628図、第630図18～21）

Ｉ－19区に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.15m、短径1.10m、深さ0.21mである。第630図18は単節ＬＲ縄文の縦位施文上に、斜位の隆帯を貼付する。19は無地文上に横位の隆帯を施文する。20は底部の楕円区画にキャタピラ文を施文する勝坂式土器である。中段階の可能性がある。21は完形の石鏃である。

ｃ）Ⅳ区

第133号土壙（第628図、第630図22～31）

Ｌ－13区に位置する。第90号集石土壙と重複するが、本遺構の方が新しい。平面形は楕円形で、規模は長径1.56m、短径1.11m、深さ0.15mである。第630図22～31は加曽利ＥⅢ式土器である。胴部に磨消懸垂文を有する土器群で、22～26は口縁部付近の破片、27～31が胴部破片である。地文は、22、26、30、31が単節縄文ＲＬの縦位施文、29がＬＲ縄文、25が条線文である。

第226表　Ⅱ区土壙出土復元土器観察表（第617図）

番号	器高（cm）	口径（cm）	最大径（cm）	底径（cm）	備　考
617-1	[8.0]	－	(12.6)	－	30%
2	20.3	－	(21.4)	9.8	40%

番号	器高（cm）	口径（cm）	最大径（cm）	底径（cm）	備　考
617-3	[16.2]	26.0	26.4	－	50%

第227表　Ⅱ区土壙出土石器観察表（第620・621・623図）

図番号	出土位置	器　種	分　類	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考
620-4	SK16	磨製石斧	Ⅰ②イ	緑色岩	15.1	4.6	4.1	383.1	
13	SK48	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[4.6]	3.0	1.7	30.3	
14		打製石斧	Ⅳ②イ	ホルンフェルス	[8.5]	10.1	3.4	282.0	
19	SK19	打製石斧	Ⅲ①イ	ホルンフェルス	9.1	4.8	2.1	121.8	
20		打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	7.2	5.1	1.6	59.6	
621-14	SK38	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[7.7]	[4.5]	2.0	77.8	
15		打製石斧	Ⅲ2①イ	ホルンフェルス	13.6	7.2	3.1	324.7	
19	SK45	石鏃	Ⅰ2①	チャート	2.5	1.9	0.5	2.3	
24	SK50	石核	①	黒曜石	3.9	5.0	1.9	37.7	
623-4	SK56	石皿	Ⅳ②イ	緑泥片岩	[23.4]	[16.8]	4.1	2230.2	
10	SK57	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[12.6]	6.3	1.7	125.2	
16	SK58	打製石斧	Ⅴ②イ	砂岩	5.5	[8.4]	3.4	176.6	

第228表　Ⅲ区土壙出土復元土器観察表（第624図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
624-1	[31.4]	(19.4)	－	－	40%
2	[17.9]	－	(27.0)	－	30%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備　考
624-3	[11.4]	－	(21.2)	－	30%
4	[15.6]	－	(28.0)	－	30%

第229表　Ⅲ区土壙出土石器観察表（第626・629・630図）

図番号	出土位置	器　種	分　類	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考
626-3	SK104	石皿	Ⅲ2②イ	緑泥片岩	[20.8]	[23.6]	[6.0]	2452.1	
19	SK114	石錐	Ⅳ②	黒曜石	[1.5]	[0.7]	[0.3]	0.3	
629-8	SK21	石鏃	Ⅳ②	黒曜石	[2.1]	[1.0]	0.3	0.5	
630-5	SK115	スクレイパー	Ⅲ1①ア	砂岩	9.5	7.5	2.9	182.8	
21	SK131	石鏃	Ⅰ2①	チャート	2.5	1.7	0.4	1.0	

（4）特殊遺構

縄文時代の性格不明及び用途不明の遺構について、特殊遺構として扱った。Ⅰ区とⅡ区に1例ずつ存在した。

a）Ⅰ区

第1号特殊遺構（第631図）

当初住居跡を想定して調査を始めたが、礫が多く出土し、炉跡と思われた焼土跡も浮いた状態で検出された。範囲全体が住居跡の落ち込み状を呈することから、撹乱を受けて床面等が荒れてしまった可能性もある。礫が多く出土するものの、土器が出土していないので、時期判定も難しい。

炉跡状の焼土塊が2箇所に存在し、焼土塊の下から間層を挟んでピットが4基検出された。焼土との関係は不明であり、散在する礫との関係も不明であった。この遺構を性格不明の焼土跡として認識し、礫との関係も考慮して、集石土壙等と何らかの関係があるものと把握しておきたい。

b）Ⅱ区

第2号特殊遺構（第632図、第633図1～第634図17）

当初、礫が集中していたため、集石土壙として調査を始めたが、埋甕が検出されたことで敷石住居跡の可能性を考慮して調査を進めた。集石土壙

と想定していた場所からは石棒や石皿が出土しており、下部に掘り込みが確認された。また、埋甕もほぼ完形で埋設されていたことが明らかになった。

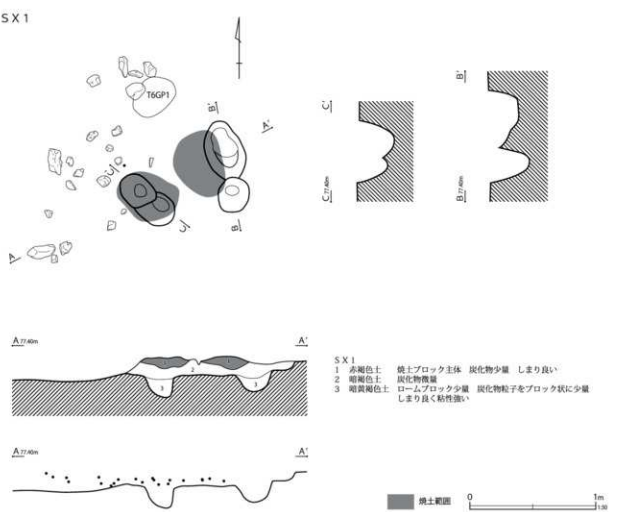
しかし、埋甕の上にも大形礫が乗り、埋甕の口縁部の高さと、集石の礫の高さが異なるため、敷石住居跡の可能性を残すものの、埋甕と石棒との組み合わせによる何らかの祭祀的な遺構とも考えられた。敷石住居跡の残骸とも、祭祀遺構とも決めかねることから、特殊遺構として把握した。

第633図１は埋甕である。口縁部を欠損するが口縁部の外反する壺形土器と思われる。肩部の文様帯には隆帯の渦巻文と区画文を連携するモチーフを施文するものと思われ、地文に単節ＲＬ縄文を施文する。胴部は目の細かい条線文を施文する。

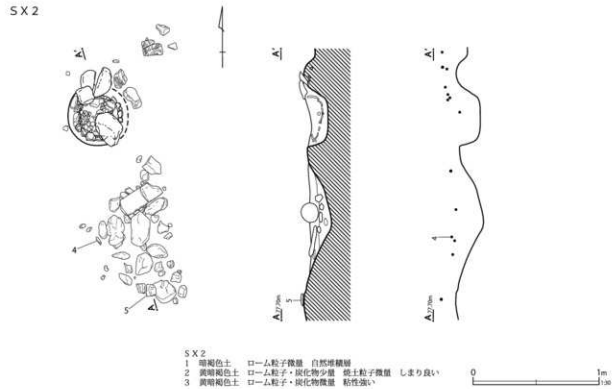
２～10は加曽利ＥⅢ式土器である。２、３は渦巻文土器で、胴部の上半と下半に隆帯の渦巻文を連結するモチーフを描く。４は口縁部文様帯のない深鉢で、無文の逆「Ｕ」字状懸垂文を施文し、内部に無節Ｌ縄文を充填施文する。

５～９は磨消懸垂文を有するもので、５は膨れる胴部に磨消懸垂文と蕨手状沈線文が垂下する。６、７は同一個体と思われ、上半部の波状沈線区画とＹ字状の磨消懸垂文とが組み合った上下一体のモチーフを描く。８、９は上下で分かれたモチーフを描く。10は両耳壺系の土器である。

11は定角式磨製石斧が欠損した後、欠損部を作業面として再利用した蔽石である。一部、整形時



第631図　第１号特殊遺構・遺物出土状況



第632図 第２号特殊遺構・遺物出土状況

第230表 第２号特殊遺構出土復元土器観察表（第633図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備 考
633-1	[22.4]	-	35.0	7.8	70%

第231表 第２号特殊遺構出土石器観察表（第633・634図）

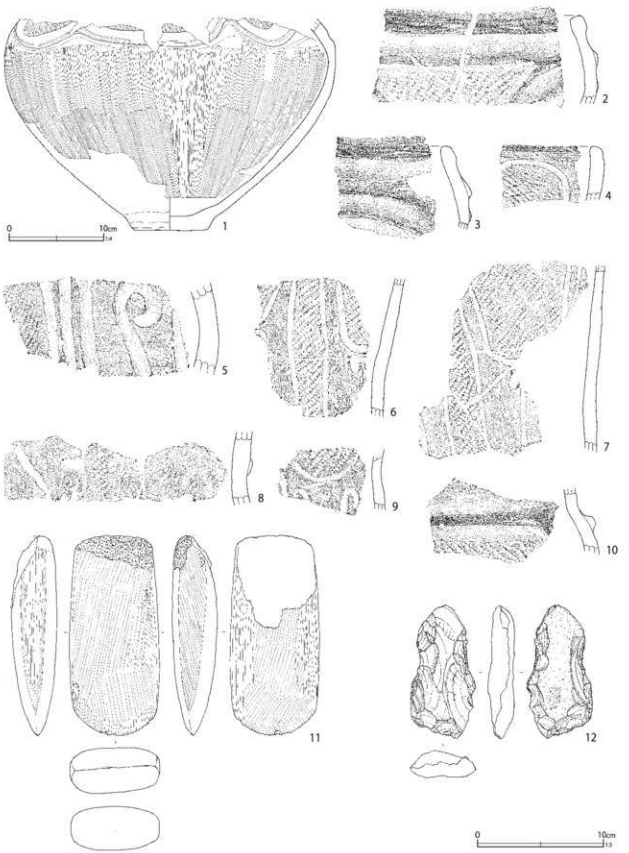
図番号	出土位置	器 種	分 類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
633-11	SX2	磨製石斧	Ⅱ②ア	緑色岩	15.8	7.2	3.6	733.8	敲石として再利用
12		打製石斧	Ⅲ2①イ	頁岩	10.6	5.2	2.1	124.9	
634-13		打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	[10.6]	5.1	2.5	158.7	
14		打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	[9.9]	4.2	1.7	83.2	
15		打製石斧	Ⅳ②イ	ホルンフェルス	[9.4]	[7.1]	2.1	139.4	
16		石棒	②イ	安山岩	35.4	15.4	13.5	10270.0	
17		石皿	Ⅲ②Ⅰイ	砂岩	28.7	14.2	[6.7]	3678.8	

の敲打痕が認められる。また、被熱により裏面上部が剥落している。

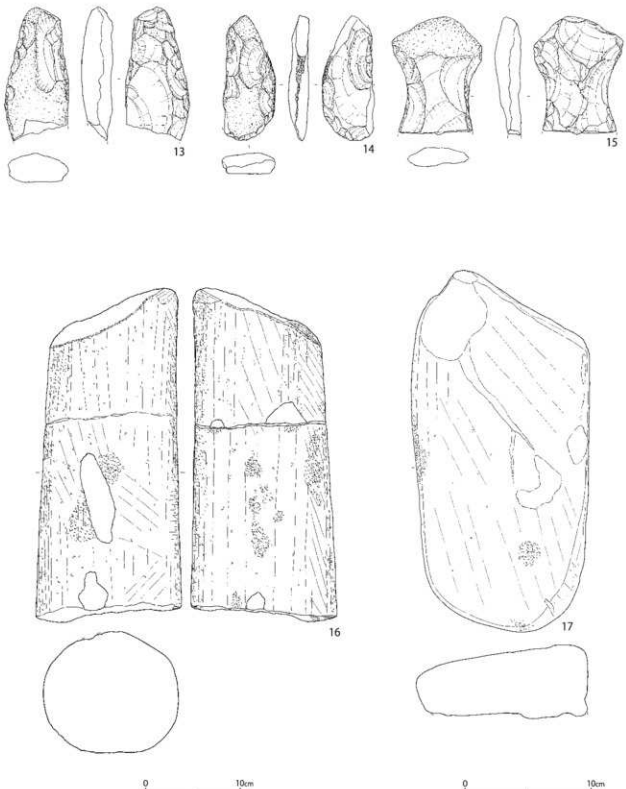
12～15は打製石斧である。12は撥形を呈し、刃部が両刃である。14は被熱の影響で正面右側縁上部と左側縁下部が割れている。15は分銅形を呈する打製石斧の上半部である。

16は大形石棒の破片である。

17は扁平な礫を利用した石皿で、中央部が浅く窪む。



第633図　第２号特殊遺構出土遺物（１）



第634図　第２号特殊遺構出土遺物（２）

（5）グリッド出土遺物

a）縄文土器

芦苅場遺跡は縄文時代中期中葉から後葉にかけての遺跡で、出土土器は勝坂式土器、加曽利E式土器がほぼ全体を占めている。その中にあって、遺跡の範囲が広いこともあり他の時期の土器群も若干ではあるが出土している。また、中期の土器群では他系統と思われる土器群も含まれることから、ここではグリッド出土土器群の中からそれらの土器群を抽出した（第635図、第636図）。

早期の土器群（第636図9、10）

9、10は縄文時代早期の土器群である。遺跡全体の中で2点のみ存在した。

9は早期初頭の撚糸文土器で、やや肥厚する口唇部が緩く外反する器形で、無文であると思われる。器面が荒れており、縄文の施文が確認されないが、口唇部の形態や器形等から夏島式新・稲荷台式古段階の無文土器と判断される。白色細砂粒を多く含み、石英砂粒も若干含まれる。器壁は7㎜程である。遺跡からは早期のこの時期の代表的な石器であるスタンプ形石器や三角錐形石器、礫器が出土していることから、撚糸文系土器群の存在を予期していたが、1点しか確認できなかった。

また、10は早期前葉の山形押型文土器である。端部をV字状に刻み、1回転2山の山形文3条を刻んだ原体を、横位帯状に施文する押型文土器である。原体長12㎜、原体径7㎜ほどを計測する。頸部の破片と思われ、全体の構成としては異方向帯状施文土器と思われる。器壁は8㎜程で、胎土に片岩類を多く含み、裏面は荒れている。樋沢式に比定されよう。以上、2点は膨大な中期土器群にまみれた中で、貴重な資料と言えよう。

前期の土器群（第636図11～14）

11～14は前期末葉の土器群で、諸磯c式に比定される土器である。11、12は同一個体である。半截竹管状工具による細い平行沈線で粗い格子目文を描き、その上に縦位の棒状貼付文を施文するものである。頸部から胴部付近にかけての破片と思われる。胎土に石英、長石類の潰したような角のある大きな砂粒を含み、器面がざらついている。

13は楕円形の瘤状貼付文の付く破片で、地文の条線鋸歯状文の上に、半截竹管状工具の刺突を施すものである。貼付文が棒状か瘤状かは定かではないが、鋸歯状条線文の波頂部に施文されている。

14は地文に無節L縄文のみ施文するもので、大粒の砂粒や片岩類を含む点は、他の土器群と類似する。諸磯c式にともなうものであろう。

中期の土器群（第635図1～8、第636図15～23）

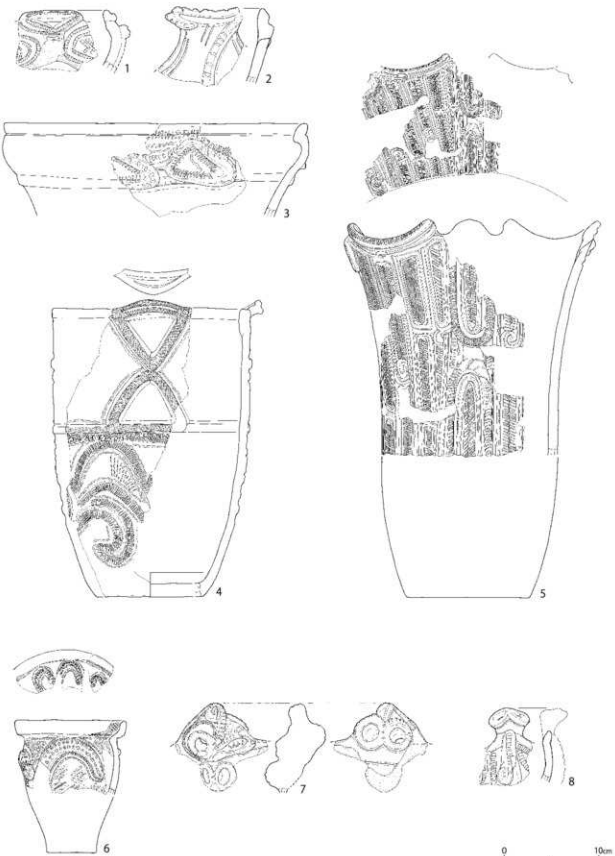
中期土器群については住居跡等の遺構から多量に出土しており、まとめの部分で総括したい。

第635図1は口縁部の楕円区画に沿って角押文2列を施文しており、区画内にも複列の角押文を充填施文する。口唇上には隆帯の三角区画文を施文し、角押文を巡らせている。狢沢式か新道式古段階に比定されよう。2は阿玉台式土器の山形把手で、把手上部を巻く隆帯が口縁部に垂下するモチーフであろう。阿玉台Ⅱ式で新道式新段階に並行するものであろうか。以上は勝坂式古段階とした土器群である。

3は口縁部の復元土器であるが、口縁部に隆帯の三角形と半月形区画を施し、区画に沿って爪形文を施文して、鋸歯状沈線を沿わせるものである。

4は県内では数少ないサンショウウオ文を有する樽形土器である。胴上半部には「X」字状モチーを低平隆帯で施文し、単節RL縄文を施文する。下半部には幅広の爪形文でサンショウウオ文を描き、小波状沈線で縁取っている。

5は縦位縦長区画のパネル文土器である。4単位の波状口縁を呈し、頂部は3山か双頭の山形把手を呈するものと思われる。波頂下には上下対向の「U」字状隆帯文を配し、屈曲部に捻りを加え、隆帯上に爪形文状の細かな刻みを施している。左隣の波頂部には渦を巻いた隆帯文を垂下しており、北陸の新崎式系の要素が垣間見られる。パネ



第635図　グリッド出土遺物（1）